

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第2集

日本住宅公団高坂丘陵地区

埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告

— V —

桜 山 古 墳 群

1 9 8 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第2集

日本住宅公団高坂丘陵地区

埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告

— V —

桜 山 古 墳 群

1 9 8 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



## 序

埼玉県の首都圏に属する地域は、各種開発事業が進行し、目まぐるしい変化発展をきたしているところであります。

特に、首都東京から放射線状に延びる私鉄、国鉄各線沿いは、大小宅地開発事業が集中し埋蔵文化財行政との調整が最も多い地であります。

日本住宅公団の開発もこの例外ではなく、東松山市高坂丘陵地区の土地区画整理事業もその一つであります。

当然、本地区内には多くの埋蔵文化財包蔵地が見られ、慎重に協議を重ねてまいりましたが、8か所の遺跡についてはやむなく発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、昭和51年に埼玉県教育委員会が日本住宅公団の委託を受けて実施し、整理作業は当事業団が委託を受けて行ったものであります。

本書は高坂丘陵地区土地区画整理事業地内の桜山古墳群に関する報告書であります、刊行に当たり多くの方々から種々の御協力、御指導をいただきました。

ここに、日本住宅公団首都圏開発本部第二事業計画課、同埼玉西宅地開発事業所、東松山市教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和56年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 関根秋夫



## 例　　言

1. 本書は日本住宅公団高坂丘陵地区土地区画整理事業にかかる、埼玉県東松山市田木の桜山古墳群（8号遺跡、52委保記第4—169号）の発掘調査報告書である。（桜山窯跡群を除く）
2. 発掘調査は日本住宅公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和51年度に実施し、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和55年度に受託し、実施した。
3. 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第3係があたり、小久保徹、井上肇が担当した。
4. 出土品の整理及び図の作成は小久保徹、井上肇、田中英司、利根川章彦があたり、鈴木仁子、岡村和子、鈴木えり子、小島糸子の協力があった。
5. 本書の執筆は横川好富、小久保徹、田中英司、井上肇、利根川章彦があたった。分担は次のとおりである。

小久保　III、IV—1(4)～(13)、IV—2(1)～(3)、V  
横川　I、　　田中　IV—3(2)、　　井上　IV—3(1)  
利根川　II、IV—1(1)～(3)
6. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第四課があたり、横川好富が監修した。

# 目 次

## 序

## 例 言

I 調査に至るまでの経過.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	3
III 遺跡の概観と調査の方法.....	8
IV 遺構と遺物	
1. 古墳とその遺物	
(1) 桜山1号墳.....	9
(2) 桜山2号墳.....	15
(3) 桜山3号墳.....	19
(4) 桜山4号墳.....	22
(5) 桜山5号墳.....	24
(6) 桜山6号墳.....	24
(7) 桜山7号墳.....	28
(8) 桜山8号墳.....	31
(9) 桜山9号墳.....	36
(10) 桜山10号墳.....	40
(11) 桜山11号墳.....	41
(12) 桜山12号墳.....	46
(13) 桜山13号墳.....	49
2. 住居跡（弥生時代）とその遺物	
(1) 桜山Y1号住居跡 .....	53
(2) 桜山Y2号住居跡 .....	53
(3) 桜山Y3号住居跡 .....	57
3. その他の遺物	
(1) 繩文土式器 .....	58
(2) 石 器 .....	65
V 結 語.....	68

## 挿 図 目 次

第1図	桜山古墳群の位置と周辺の遺跡	4
第2図	桜山古墳群(南群)グリッド配置図	8
第3図	桜山古墳群の分布(折り込み)	
第4図	桜山1号墳全体図(1)	9
第5図	桜山1号墳全体図(2)	10
第6図	桜山1号墳断面図(1)及び 出土遺物(1)	11
第7図	桜山1号墳断面図(2)及び 出土遺物(2)	12
第8図	桜山1号墳石室(折り込み)	
第9図	桜山1号墳出土遺物(3)	13
第10図	桜山2号墳全体図(1)(2)	14
第11図	桜山2号墳断面図(1)	15
第12図	桜山2号墳断面図(2)	16
第13図	桜山2号墳石室	17
第14図	桜山3号墳全体図(1)(2)	18
第15図	桜山3号墳断面図(1)	19
第16図	桜山3号墳断面図(2)	20
第17図	桜山3号墳石室及び出土遺物	21
第18図	桜山4号墳全体図	22
第19図	桜山5号墳全体図	23
第20図	桜山6号墳全体図	25
第21図	桜山6号墳断面図	26
第22図	桜山6号墳石室	27
第23図	桜山7号墳全体図(1)	27
第24図	桜山7号墳全体図(2)	28
第25図	桜山7号墳断面図(1) 及び出土遺物	29
第26図	桜山7号墳断面図(2)	30
第27図	桜山7号墳石室	31
第28図	桜山8号墳全体図(1)	32
第29図	桜山8号墳全体図(2)	33
第30図	桜山8号墳断面図	34
第31図	桜山8号墳石室及び出土遺物	35
第32図	桜山9号墳全体図(1)	36
第33図	桜山9号墳全体図(2)	37
第34図	桜山9号墳断面図	38
第35図	桜山9号墳石室	39
第36図	桜山10号墳全体図(1)	39
第37図	桜山10号墳全体図(2) 及び断面図(1)(折り込み)	
第38図	桜山10号墳断面図(2)	41
第39図	桜山10号墳石室及び出土遺物	42
第40図	桜山11号墳全体図	43
第41図	桜山11号墳断面図	44
第42図	桜山11号墳石室及び出土遺物	45
第43図	桜山12号墳全体図(1)	46
第44図	桜山12号墳全体図(2) 及び出土遺物	47
第45図	桜山12号墳断面図	48
第46図	桜山12号墳石室	49
第47図	桜山13号墳全体図	50
第48図	桜山13号墳断面図	51
第49図	桜山13号墳石室	52
第50図	桜山Y1号住居跡全体図	53
第51図	桜山Y2号住居跡全体図	54
第52図	桜山Y2号住居跡出土遺物	55
第53図	桜山Y3号住居跡全体図	56
第54図	桜山Y3号住居跡出土遺物	57
第55図	桜山古墳群出土の縄文式土器(1)	59
第56図	桜山古墳群出土の縄文式土器(2)	61
第57図	桜山古墳群出土の縄文式土器(3)	63
第58図	桜山古墳群出土の縄文式土器(4)	64
第59図	桜山古墳群出土の石器(1)	66
第60図	桜山古墳群出土の石器(2)	67

## 写真図版目次

- 図版 1 (上) 桜山1号墳墳丘  
(下) 桜山1号墳石室全景
- 図版 2 (上) 桜山1号墳石室入口  
(下) 桜山1号墳石室入口側面
- 図版 3 (上) 桜山1号墳周堀(西)  
(下) 桜山1号墳周堀(東)
- 図版 4 (上) 桜山1号墳石室遺物出土  
状態(金環)  
(下) 桜山1号墳石室遺物出土  
状態(直刀)
- 図版 5 (上) 桜山2号墳石室全景  
(下) 桜山2号墳石室右側壁
- 図版 6 (上) 桜山3号墳石室全景  
(下) 桜山3号墳石室右側壁
- 図版 7 (上) 桜山3号墳墳丘断面(東)  
(下) 桜山3号墳墳丘断面(北)
- 図版 8 (上) 桜山6号墳墳丘  
(下) 桜山6号墳石室全景
- 図版 9 (上) 桜山6号墳墳丘断面(西)  
(下) 桜山6号墳墳丘断面(東)
- 図版10 (上) 桜山7号墳墳丘  
(下) 桜山7号墳石室全景
- 図版11 (上) 桜山7号墳石室右側壁  
(下) 桜山7号墳墳丘断面(西)
- 図版12 (上) 桜山8号墳石室全景  
(下) 桜山8号墳石室出土遺物
- 図版13 (上) 桜山9号墳墳丘  
(下) 桜山9号墳石室全景
- 図版14 (上) 桜山9号墳墳丘断面  
(下) 桜山9号墳墳丘断面
- 図版15 (上) 桜山10号墳石室全景  
(下) 桜山10号墳石室左側壁
- 図版16 (上) 桜山10号墳墳丘断面(西)  
(下) 桜山10号墳墳丘断面(東)
- 図版17 (上) 桜山11号墳石室全景  
(下) 桜山11号墳石室入口
- 図版18 (上) 桜山12号墳墳丘  
(下) 桜山12号墳石室全景
- 図版19 (上) 桜山12号墳墳丘断面(南東)  
(下) 桜山12号墳墳丘断面(東)
- 図版20 (上) 桜山12号墳墳丘断面  
(下) 桜山12号墳墳丘断面
- 図版21 (上) 桜山13号墳石室全景  
(下) 桜山13号墳石室左側面
- 図版22 (上) 桜山13号石室右側面  
(下) 桜山13号墳石室入口
- 図版23 (上) 桜山Y1号住居跡全景  
(下) 桜山Y2号住居跡全景
- 図版24 (上) 桜山Y2号住居跡貯藏穴  
(下) 桜山Y2号住居跡壺出土状態
- 図版25 (上) 桜山Y3号住居跡全景  
(下) 桜山Y3号住居跡ベッド状遺構
- 図版26 桜山古墳群出土遺物1(金環・直刀)
- 図版27 桜山古墳群出土遺物2(須恵器)
- 図版28 桜山古墳群出土遺物3(須恵器・弥生土器)
- 図版29 桜山古墳群出土遺物4(縄文式土器1)
- 図版30 桜山古墳群出土遺物5(縄文式土器2)
- 図版31 桜山古墳群出土遺物6(縄文式土器3)
- 図版32 桜山古墳群出土遺物7(縄文式土器4)
- 図版33 桜山古墳群出土遺物8(縄文式土器5)
- 図版34 桜山古墳群出土遺物9(縄文式土器6)

## I 発掘調査に至るまでの経過

日本住宅公団首都圏開発本部が、東松山市高坂地区に 97.2 ha わたって実施する宅地開発事業は、区画整理方式によるものである。

これに先立ち、昭和46年6月29日、日本住宅公団首都圏宅地開発本部長は、文化庁と日本住宅公団とで取りかわされた「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」により、埼玉県教育委員会「住宅地区開発予定地（高坂地区）内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」の照会があった。

これを受けて県教育委員会文化財保護室では、手許にある昭和36年度に調査した埋蔵文化財包蔵地台帳と開発区域を照合し、50基を越える塚や古墳が区域内に所存することを確認した。

しかしながら、この開発地区が丘陵地帯であり他に相当数の遺跡の所在が予想されるので、改めて分布調査を実施したうえ回答することになった。

この分布調査は、昭和47年2月に実施し、古墳遺物の散布が認められ、集落跡が予想されるところが3か所、古墳10基、塚約130基が確認されたが、区域のほとんどが山林のため、さらに詳細な確認調査が必要であると考えられた。

とりあえず、昭和47年3月、この結果を公団に「住宅地区開発予定地（高坂地区）内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」回答し、今後、これらの取扱いについては、両者で協議を続けることになった。

その後、昭和48、49年の協議を経て、昭和50年3月1日、「高坂地区における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」の公団からの協議があり、開発を予定している他の地域と同時に、この高坂丘陵地区について区画整理方式の計画概要が説明された。文化財保護室では、事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について「覚書」により、現状保存または記録保存のための発掘調査を実施するよう、昭和50年3月3日回答した。

遺跡名	所在地	種別	時代	状況
1号 (塚140~142)	東松山市田木字根平1465	塚群		山林
2号 (塚4~8、集落跡9)	東松山市田木字立野138~24	集落跡 塚群	奈良・平安	畠・山林
3号 (塚125~126)	東松山市田木字舞台1673	塚群		畠
4号 (舞台)	東松山市田木字舞台1640	集落跡	縄文・古墳・奈良	山林
5号 (塚10~17)	東松山市田木字児沢160~18	塚群		山林
6号 (集落跡95)	東松山市田木字緑山1102~1	集落跡	縄文・古墳	畠・山林
7号 (塚102~103)	東松山市田木字根平1478	塚群		山林
8号 (古墳126~135)	東松山市田木字桜山1316	古墳群	古墳	山林

さらに、開発区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地については、県教育委員会直営で記録保存のた

めの発掘調査を実施することとし、次のような発掘調査事業の年次区分が了解された。

昭和50年4月11日付で、日本住宅公団首都圏宅地開発本部長と埼玉県知事との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査に関する協定書」が締結され、昭和50年6月から発掘調査に入った。

年度	作業内容	発掘作業	整理作業	報告書刊行
50	舞台・根平地区 (1・3・4号)			
51	根平・桜山地区 (1・8号)			
52	立野・児沢・桜山地区 (2・7・8号)	舞台地区 (3・4号)		
53	児沢・桜山地区 (4・6号)	根平地区 (1・7号)	舞台地区	
54		桜山・桜山地区 (6・8号)	根平・児沢・立野地区	
55			桜山・桜山地区	

### 発掘調査の組織

#### 1. 発掘(昭和51年度)

主 体 者	埼玉県教育委員会	教 育 長	石 田 正 利
事 務 局	埼玉県教育局文化財保護課	教 育 長	柳 田 敏 司
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	課 長 补 佐	野 村 鍋 一
度 務 經 理	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早 川 智 明
発 掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	塩 野 博 夫
		(嘱託)	本 沼 幹 史
			高 岳 清 史
			太 田 和 夫
			千 村 修 平
			横 川 好 富
			小 久 保 微
			井 上 雄

#### 2. 整理(昭和55年度)

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	関 根 秋 夫
度 務 經 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	副 理 事 長	本 郡 春 治
整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	常 務 理 事 長	渡 辺 澄 夫
		管 理 部 長	伊 藤 悅 光
		調 査 研 究 部 長	関 野 荣 一
		調 査 研 究 第 四 課 長	福 田 浩
		調 査 研 究 第 二 課 長	本 庄 朗 人
			横 川 好 富
			増 田 朗 朝
			小 久 保 微
			田 中 英 司
			利 横 川 章 彦

#### 3. 発掘調査協力者

東松山市教育委員会及び地元関係者

## II 遺跡の立地と環境

桜山古墳群は東松山市田木字桜山1316ほかに所在する。東武東上線高坂駅の南西約1.5kmの位置にあるが、高坂駅を乗せている所謂高坂台地とは越辺川の支流九十九川の開析した谷地形を挟んだ別の台地（仮に田木台地と称する）に乗っている。

高坂台地と田木台地とは、秩父山系から東に張り出す物見山（岩殿）丘陵の東と東南の末端にある。丘陵の北は都幾川、南は越辺川が流れ、それぞれ松山台地、入間台地から丘陵を分断している。

本章では高坂台地・田木台地および松山台地を中心として遺跡群の様相・動態を古墳時代を主として述べておきたい。

まず田木台地上であるが、八ツ手状に広がる舌状台地群の一番北に舞台遺跡（註1）、一つ南に桜山古墳群、以下南方向に坂本遺跡（註2）、大塚原遺跡（註3）、駒堀遺跡（註4）、立野遺跡（註5）が存在する。また、大塚原・坂本遺跡のすぐ西に田木山1号墳・2号墳（註6）、大塚原遺跡の奥に根平遺跡（註7）、坂本遺跡の奥に緑山遺跡（註8）があり、根平遺跡と緑山遺跡の奥の尾根づたいに物見山塚群（註9）が存在する。

これらのうち古墳時代の集落は駒堀（五領期3・和泉期後半7・鬼高峰期前葉11）・坂本（和泉期後半～鬼高峰期前葉、鬼高峰期終末～真間期）・舞台（鬼高峰期前葉～後葉56）・立野（鬼高峰期終末3）などであり、五領期直前と考えられる根平遺跡を含めると、根平→駒堀→坂本→舞台→駒堀・坂本→舞台・坂本→立野という遺跡の「動き」が予想され、「ムラ」が、短期間に廃棄されて二度と住まなくなるもの、かなり時間を隔てて断続的に居住するものなどに分けて考えられ、大きな台地一つの上では居住地の移動はかなり頻繁に行なわれたと予想できる。

また、古墳であるが、墳丘を削平されたものを考えたとしても、田木山1・2号墳、桜山古墳群13基、舞台遺跡3基、根平遺跡2基、駒堀遺跡2基などしかわかつておらず、現状では群集状態の疎な古墳群地帯と考えた方がよいであろう。いずれも凝灰質砂岩截石積みの石室を主体とし、一部に河原石乱石積みの石室も見受けられる。遺物が多くないので何とも言えないが、6世紀代の古墳はほとんどなく、7世紀初頭～末葉の約100年間に形成されたものが大多数を占める。

一方、高坂台地は台地の北側縁辺部に諏訪山古墳群（註10）、東側に高坂・正代古墳群、南側に木塚古墳群が占拠していて、往時はかなり多数の小円墳が形成されたようである。ただし、いずれも相当数のものが破壊されてしまって、今墳丘を見ることができるのはせいぜい40基足らずであろう。このうち諏訪山古墳群は一部調査されているが、粘土構・木棺直葬・無袖型横穴式石室・片袖型横穴式石室を主体部とするものだけが明らかになり、比企地方特有の両袖型胴張り横穴式石室出現以前に既にその形成が進んでいたようである。

高坂台地は前方後円墳が少なく、確定しているのは諏訪山古墳（全長61m）・諏訪山2号墳（全長25m）の2基だけである。いずれも前方部未発達の古式な様相を呈する古墳である（註11）。これ以外に諏訪山浅間神社古墳（現況27m）・高濟寺古墳の2基が前方後円墳と考えられているにすぎ



第1図 桜山古墳群の位置と周辺の道路

ない(註12)。高坂台地は、集落跡で明確に把握されているものが多くないが、台地東方の大黒部・宮鼻・正代地区にはかなり大きな集落跡が推定される。東上線高坂駅南方の大西遺跡は2か所調査されているが、五領期後半から真間期まで存続する大集落跡である(註13)。大黒部から採集された鬼高式土器(註14)もこの遺跡の近傍からのものであろう。

目を松山台地へ転じてみよう。高坂台地に都幾川を挟んで対峙し、台地中央部南側斜面に占地するのが、比企地方最大の前方後円墳である野本將軍塚古墳である。全長120mを越え、かなり前方部が発達した古墳だが、前方部に戦没者慰靈の忠魂碑が建てられ、盛土をかなり動かされているので、その形状による年代をめぐって論争がある(註15)。松山台地の南側には附川古墳群(註16)、下唐子古墳群など整備な胴張り横穴式石室を内部主体とする古墳が多いが、中でも下唐子の若宮八幡古墳(註17)・青塚古墳(註18)の2基は、6世紀末~7世紀前半の地域首長墓として、また初期の胴張り横穴式石室墳として注目さるべきものである。

台地の東部には柏崎古墳群(註19)・古凍古墳群(註20)がある。柏崎古墳群は胴張り複室構造の横穴式石室を内蔵する古墳3基が調査されているが、7世紀前半に属するものである。おくま山(全長62m)・天神山(全長62.5m)の2基は前方後円墳として知られている。

古凍古墳群も分布域の一部が調査され、古式須恵器や円筒埴輪を伴う円墳跡・方形周溝墓などが多数存在することが明らかになっている。この両古墳群に近接して五領遺跡(註21)・番清水遺跡(註22)・古凍下山遺跡などの大きな集落遺跡群が所在する。五領遺跡は多量の布留式土器をもち、番清水遺跡は古式須恵器の良好な資料を有するなど遺物の内容でも注目に値する遺跡群である。

松山台地・高坂台地上には、横穴墓群は形成されていないが、田木台地西方の鳩山丘陵には重郎横穴群が知られている。これ以外にも鳩山丘陵の中には未知の横穴群があるかもしれない。

田木台地の周辺や鳩山丘陵は大規模な古代窯業遺跡群の所在地として有名であるが、6世紀前半代の桜山窯跡群(註23)、7世紀前葉の根平1号窯(註24)、7世紀中葉の舞台1・2号窯(註25)が、鳩山丘陵の8世紀以降の窯業生産の母体となるようである。

奈良・平安時代は、高坂台地と田木台地は比企郡都家郷に、松山台地東部は同じく郡家郷に比定されるというが、都家郷や榎津郷(男衾郷)などの地名は吉土集団やその同族集団の模本首が武藏へ移住してくる際に持ちこんだものであろうと考えられている(註26)。

このように、田木台地の遺跡群の形成を把握するには、一方では、小首長層権力の伸長と比較的大きな「集落共同体」(註27)の構造の変化を、もう一方では、渡来系氏族とその同族集団の移住にかかる遺跡・遺物の外来的要素の変遷とその画期の抽出を十分考慮しなければならないのである。

(利根川章彦)

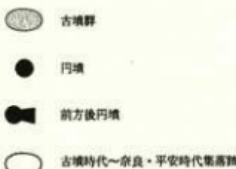
【註】

- (1) 谷井 鮎・今泉泰之・野部篠秋『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 1974年 埼玉県教育委員会
- 井上 雄『舞台(資料篇)』日本住宅公团高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集 1978年 埼玉県教育委員会

- 水村孝行・井上 勲・中島 宏・井上尚明『舞台（本文篇）』日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集 1979年 埼玉県教育委員会
- (2) 1978~79年東松山市教育委員会調査。渡辺久生氏のご好意で遺物と遺跡の一部を拝見させていただきた。記して感謝したい。
- (3) 高橋一夫・水村孝行・今井 宏・井上尚明『児沢・立野・大塚原』日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 1980年 埼玉県教育委員会
- (4) 草原文藏・谷井 鮎・今泉泰之・野部徳秋『駒躍』関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 1974年 埼玉県教育委員会
- (5) (註3) 文献同じ。立野遺跡は多量の須恵器と甕を住居跡から出土していて、大略同時期と考えられる緑山遺跡・大塚原遺跡の居住者より階層的に上位の集団が居住していたと考えてよいであろう。
- (6) (註1) 1974年文献と同じ。
- (7) 水村孝行・井上 勲・今井 宏『根平』日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 1980年 埼玉県教育委員会
- (8) 1978~79年埼玉県教育委員会調査。繩文早期の炉穴群と古墳時代末期~奈良時代の集落跡を主体とする複合遺跡である。
- (9) 水村孝行・井上尚明『物見山塚群』こども動物自然公園内埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県遺跡発掘調査報告書第24集 1980年 埼玉県教育委員会
- ⑩ 金井塚良一・今泉泰之・大塚 実他『諏訪山古墳群』1970年 考古学資料刊行会
- ⑪ (註10) 文献および 金井塚良一「比企地方の前方後円墳——北武藏の前方後円墳の研究(1)」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第1号 1979年 埼玉県立歴史資料館
- ⑫ (註11) 1979年文献
- ⑬ 1977年東松山市史編纂調査。約 140m<sup>2</sup> の遺構確認調査であるが、6軒以上の住居跡が重複していて、大変な密度の集落跡であることを確認している。
- ⑭ 金井塚良一・大塚 実「東松山市笠田遺跡・大黒部遺跡出土の土師器」『台地研究』16号 1965年 台地研究会
- ⑮ 甘粕 健「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武藏考古学資料図鑑』1976年 校倉書房  
門 国男「前方後円墳の設計型からみた武藏国成立過程」『民衆文化の源流』(色川大吉編) 1980年 平凡社教育産業センター
- 金井塚良一「野本将軍塚古墳の謎」『歴史読本』昭和54年5月号 1979年 新人物往来社 および (註11) 1979年文献
- ⑯ 金井塚良一『附川古墳群』1972年 考古学資料刊行会 および (註1) 1974年文献。
- ⑰ 金井塚良一「北武藏の古墳群と渡来氏族吉士氏の動向」『北武藏考古学資料図鑑』
- ⑱ 金井塚良一・小峯啓太郎『南塚古墳』東松山市文化財調査報告第3集 1964年 東松山市教育委員会
- ⑲ 金井塚良一『柏崎古墳群』東松山市文化財調査報告第6集 1968年 東松山市教育委員会
- ⑳ 1978年東松山市教育委員会調査。調査区の東方は五領期・国分期を中心とする集落跡で、須恵器淨瓶形土器・鉄鉢形土器など寺院跡に関連する遺物を持つ。西方は方形周溝墓や円墳跡の集中地区であり、5世紀末乃至6世紀初頭と考えられる須恵器をもつものも存在した。1979年埼玉県教育委員会が国道254号バイパスの建設予定地(東松山市調査区より 300m 程南方)を試掘した際にも 6世紀前半代の埴輪を

- 伴う円墳跡を確認している。
- ⑩ 金井塚良一他 「五領遺跡B区——発掘調査中間報告」『台地研究』13号 1963年 台地研究会  
和島誠一・金井塚良一「集落と共同体」「日本の考古学V」古墳時代(下)(近藤義郎・藤沢長治編)  
1967年 河出書房新社
- ⑪ 金井塚良一編『番清水遺跡——発掘調査の概報』1968年 考古学資料刊行会
- ⑫ 1976~78年埼玉県教育委員会。2基の須恵器窯跡と10基以上の埴輪窯跡を検出した。埴輪焼成のピークは須恵器窯跡よりも新しいようである。1981年度調査報告書刊行予定。
- ⑬ (註7) 文獻に同じ。
- ⑭ (註1) 1978・1979年文献に同じ。
- ⑮ 原島礼二「東松山市と周辺の古代——条里遺構調査を基にして——」東松山市史編さん調査報告  
第13集 1978年 東松山市
- ⑯ 石母田 正『日本の古代国家』1971年 岩波書店

【第1図凡例】



【古 墓 群】

- |           |          |           |
|-----------|----------|-----------|
| 1. 桜山古墳群  | 2. 毛塚古墳群 | 3. 諏訪山古墳群 |
| 4. 高坂古墳群  | 5. 柏崎古墳群 | 6. 古凍古墳群  |
| 7. 下唐子古墳群 | 8. 附川古墳群 |           |

【前方後円墳】

- A. 野本將軍塚古墳 B. 諏訪山古墳 C. おくま山古墳 D. 天神山古墳

【古墳時代～奈良・平安時代の集落跡】

- |           |             |            |          |
|-----------|-------------|------------|----------|
| 9. 根平遺跡   | 10. 払本遺跡    | 11. 大塚原遺跡  | 12. 緑山遺跡 |
| 13. 立野遺跡  | 14. 駒堀遺跡    | 15. 大西遺跡   | 16. 五領遺跡 |
| 17. 番清水遺跡 | 18. 古凍・下山遺跡 | 19. 正直玉作遺跡 | 20. 舞台遺跡 |

### III 遺跡の概観と調査の方法

桜山古墳群は岩殿丘陵の東縁に位置する。東から入る小支谷をはさんで南北の2群にわかれる。いずれも標高28~29mの縁辺部に分布し、急斜面を隔てた沖積地面との比高は6~7mである。

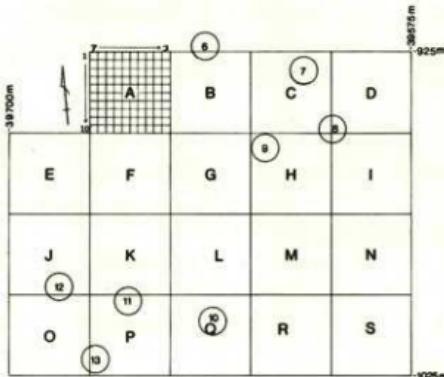
地層は表土の下は暗茶褐色の粘土質ロームで遺構落ち込みは概して不明瞭である。南群の南側縁辺部は通例の黄褐色ローム土が尾根状に東西に連続していた。ローム層の下は粘性の強い灰黄褐色粘土である。なお調査前は全域に松、クヌギを主体とする山林であった。

調査は古墳については墳龍に方位をもとにトレンチ（北・東・南・西）を設定し、周堀確認をした。次に主体部確認後、石室中軸を基準に墳丘を4分割するトレンチ（奥壁部背後を1トレンチとして右回りに4トレンチまで）を設定した。主体部は後ごめ確認のグリッドを作った。4分割した墳丘は1~2トレンチ間を1区盛土とし以下4区盛土まで区分した。古墳周縁は最終的に機械力で表土剥ぎに努めた。古墳が無い平坦地には遺構確認のトレンチを設け、繩文土器が発見された南群地域は第2図のようなグリッドを設定して掘り下げたが明確な遺構はつかめなかった。

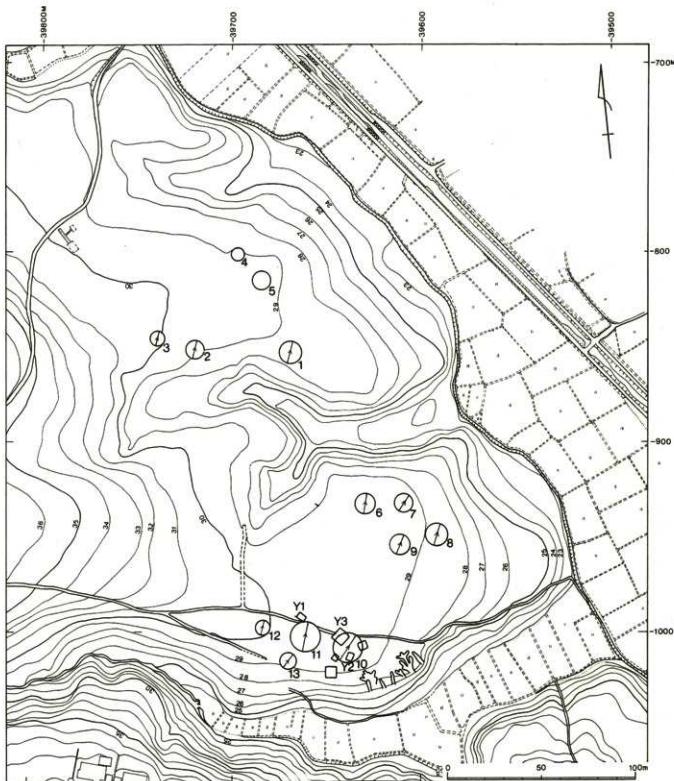
検出された遺構は古墳13基（北群5、南群8）住居跡6軒（弥生時代後期3、古墳時代後期3）若干の土壙（時期不明）である。古墳の内部主体は横穴式石室で凝灰質砂岩の截石使用のものと河原石の乱石積みのものが混在している。住居跡はいずれも南側丘陵の南縁辺に立地しており、古墳の下に位置するものもあった。なおこの南側斜面には埴輪および須恵器の窯跡が発掘されている。

6軒の住居跡では古墳時代後期のものは窯跡と関連することが確認され、古墳中でも埴輪片や土器片が検出されている。これら窯跡に関連するものは、窯跡群に含めて、報告する予定である。

遺構の測量は国土座標をもとに基準点を設定し、それにしたがって実測した。実測図中の数値はX座標（東西）、Y座標（南北）の数値である。方位は磁北を示す。



第2図 桜山古墳群（南群）グリッド配置図

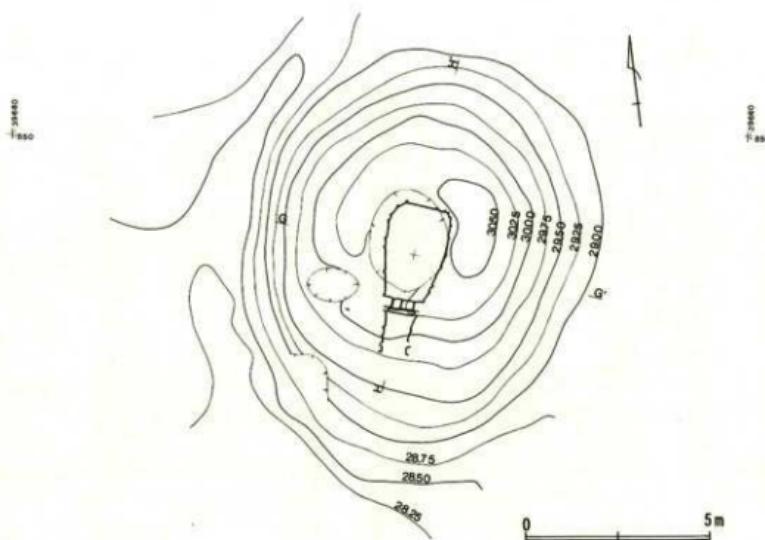


第3図 接山古墳群の分布（南群の南斜面は墓跡群）

## IV 遺構と遺物

### 1. 古墳とその遺物

(1) 桜山1号墳（第4～10図）

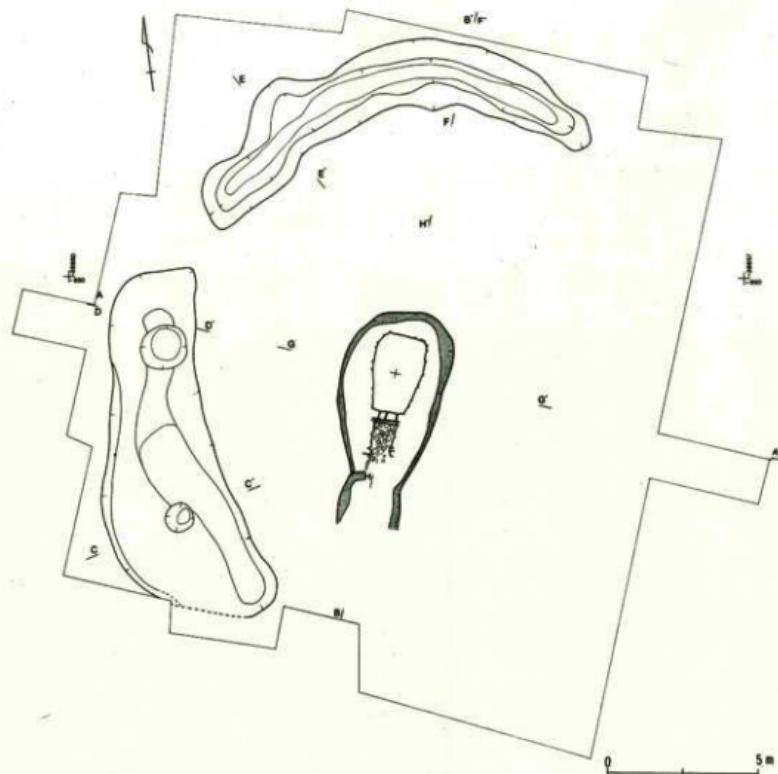


第4図 桜山1号墳全体図(1)

桜山古墳群の北群に属す。2号墳から東へ約50m、5号墳から南南東へ約40mの位置にあり、東からはいり込む小支谷に面して標高28~29mの平坦面に占地する。東西約20m、南北約24m、高さ1.8mの円形のかなり整った墳丘を残していた。墳頂部平坦面やや北寄りに大きな擾乱孔があき、奥壁上部とその付近の石材が露出していた。

墳丘は、暗褐色土乃至褐色土と青灰白色粘土ブロックを多量に含む黄褐色粘土を交互に10~20cmをずつ積み重ね、たたきしめた粗い版築構造の盛土で形成している。側壁の石材のつぎ目にこの粘土詰めて後ごめとし、その外側の段に合わせて繰り返され、墳頂部に灰黒色土を積んでいた。

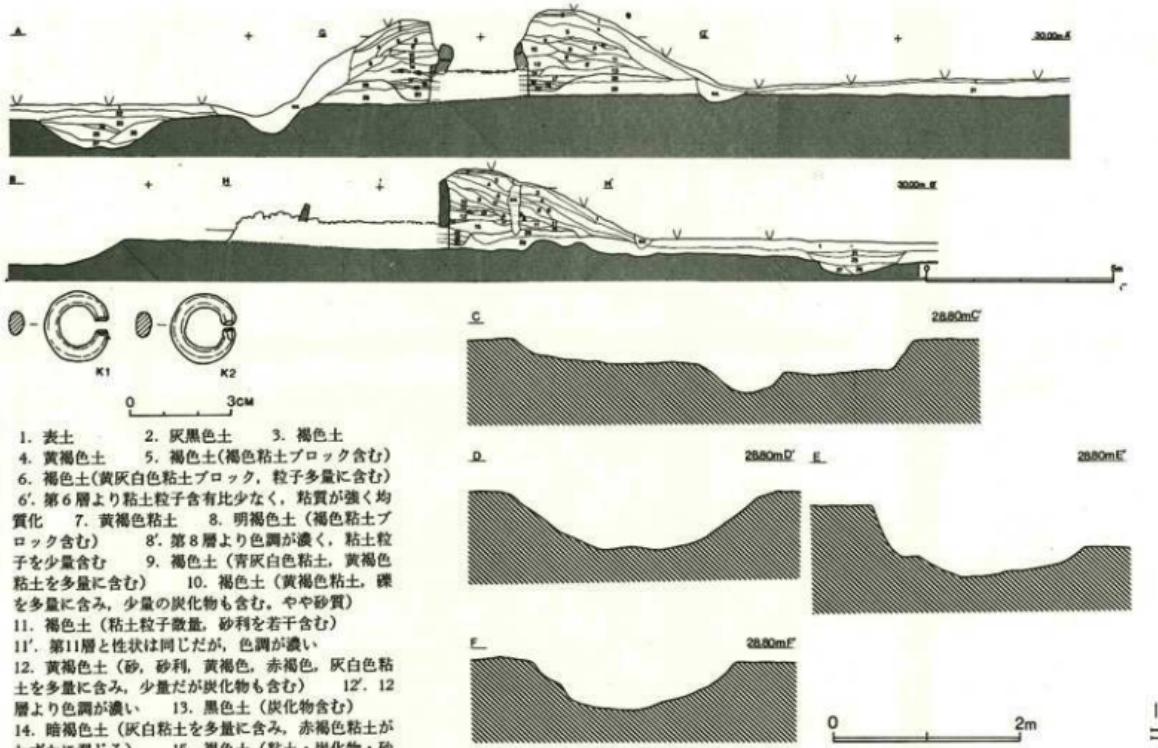
内部主体は凝灰質砂岩截石使用の单室構造両袖型横穴式石室で、石室全長4.13m、主軸方向N-18°-Eである。奥壁は高さ109cm、幅83cm、厚さ22cmの凝灰質砂岩一枚石で、上部西隅を大き



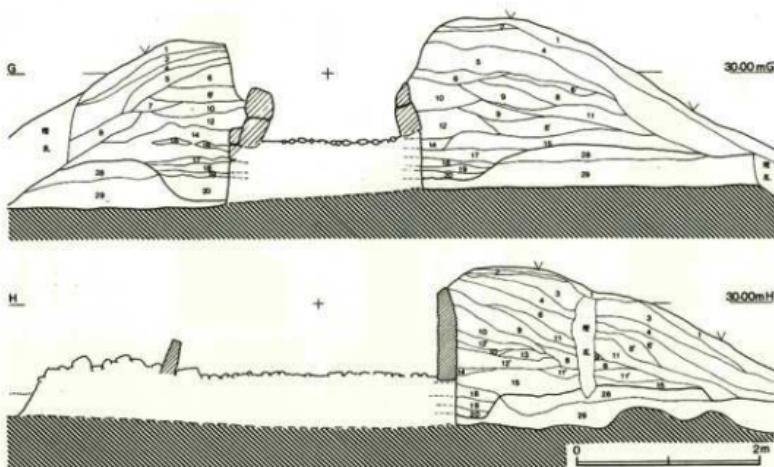
第5図 桜山1号墳全体図(2)

く削り取られていた。側壁は切組み積みで作られ、内面でゆるやかな曲線を描く胴張りプランの玄室を形成する。玄室長は2.61m、最大幅は奥壁から0.9m程の位置で、1.67m、玄門部幅1.03mで、奥壁に近い部分の張りが大きく、玄門寄りは直線に近い。側壁の段は前方に傾斜をもつ。左側壁の門柱石に接する部分に「L」字形の大きな石がある以外はほぼ同じ大きさの石材を互目積みしている。左右共に3段ずつ造存し、50cm高につき約15cmの持ち送りを行なう。玄門部には縦30cm、横35~40cm、高さ22~25cmの樋石を設置している。樋石は幅25cm、33cmの2個の截石を上面を揃えて置く。玄室内は小円礎を厚さ10cm程に敷きつめて砾床を形成する。砾床面の標高は29.237mである。門柱石と樋石の前面には、幅70cm、高さ38cm、厚さ12cmの間仕切り石（凝灰質砂岩）があった。

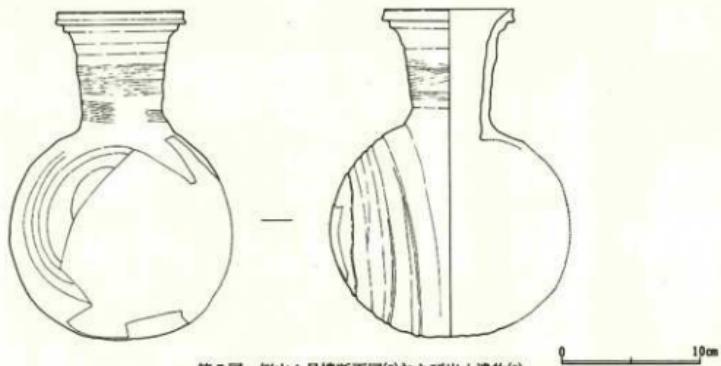
尚、前後するが、奥壁・門柱石の下には径30cm程の平らな面をもつ河原石が置かれていた。大き



第6図 桜山1号墳断面図(1)および出土遺物(1)



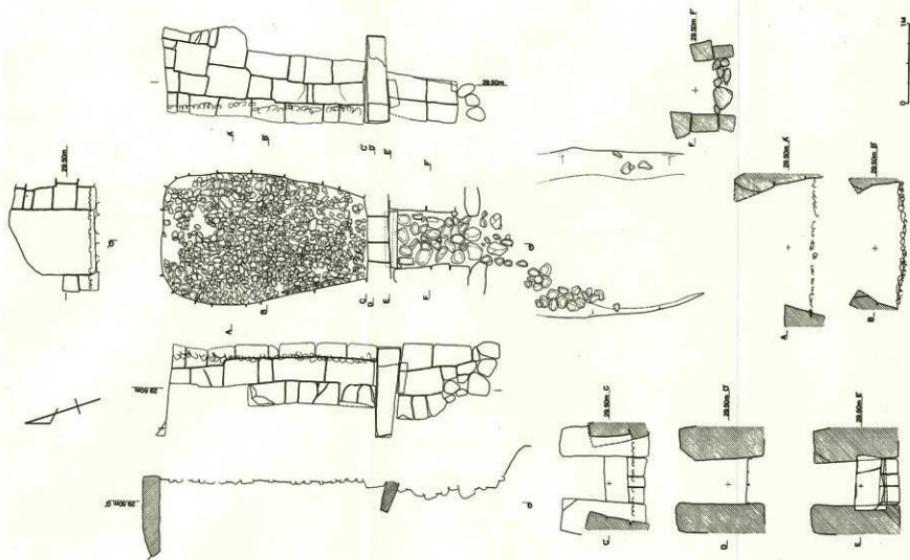
の粒子を含む) 16. 粘土ブロック 17. 褐色土(模灰質粘土、赤褐色粒子少量含む) 18. 明褐色土(黄色  
粘土ブロック、炭化物を多く含む) 19. 茶褐色土(黄色粘土ブロック、少量含む) 20. 明褐色土(黄色  
粘土ブロック・粒子、炭化物粒子含む) 21. 暗褐色土(模土ブロック少量含む) 22. 黄褐色土 23. 褐色  
土 24. 黄褐色粘土 25. 黑色土(硬質) 26. 褐色土(粘土含む) 27. 暗褐色土(粘土粒子含む)  
28. 軟質黒色土(旧地表面) 29. 明褐色土(粘質強く、礫を含む、ソフトローム層) 30. ハードローム層



第7図 桜山1号墳断面図(2)および出土遺物(2)

桜山1号墳出土土器(第7図)観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
細頸瓶	1	口径 9.4 胴径 (17.4) 器高 23.5	頭部やや太く、口縁部に段をもつ 体部上部と頸部内面にやや縞がかかる 黄褐色自然釉、剥落著しくゴマ状。 口縁部作りは鋭さを残す。	頭部内面ロクロ痕明瞭、外面やや ロクロ凹凸あり、弱いカキ目残る 体部回転ヘラ削り、ロクロ痕凹線 状に残る。焼成良好硬い、明灰色	



第8図 桜山1号填石室

な石材を安定させるための工夫であろう。

羨道部は最大幅77cm、長さ1mで、羨門部付近がやや狭い。側壁は凝灰質砂岩截石を左は互目積み、右は通目積みして、その前面に横40cm、縦20cm、高さ15~25cm程の河原石を3段積み上げ、羨門としている。側壁石材の段は前方に傾斜をもつ。さらに、径30~10cm程の大小の河原石を褐色粘質土と共にやや乱雑に詰め込んで封鎖施設とし、間仕切り石を支えていた。

前庭部は地山を約20cm掘り込んで小濠を張って作り、羨門際で1度直角に屈曲し、前方にまっすぐ伸びる形態をとる。左側はよく残存するが、右側は石が抜かれ、地山の掘り込みより線対称の石組の存在を考えてよい。幅約2m、長さ約3mの規模である。

掘形は旧表土と考えられる黒色土を40~50cm程掘り下げて、3.5m×5.5mの倒卵形プランに作り、炭化物を含む茶褐色土と凝灰岩質粘土を含む褐色土を互層にして詰め、たたきしめている。

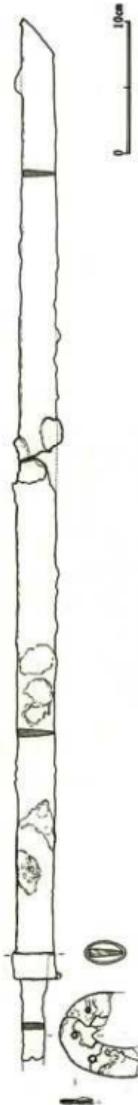
周堀は、古墳の北から西にかけて半周し、奥壁の西北西8mに幅1.5mのブリッジをもつ。北溝は整った形態で、幅2~2.5m、深さ55~75cmである。西溝は最大幅4.2mにもなり、二箇所の井戸状ピットと後世の溝で変形されたようである。周堀の底面は粘土層の基盤まで達していた。

出土遺物は奥壁付近の主軸から左寄りに耳環1対、羨道寄りの左側壁際に直刀1本、前庭部右端羨門寄りの覆土に須恵器細頬瓶1個体がある。玄室内の遺物は疎床面から出土した。

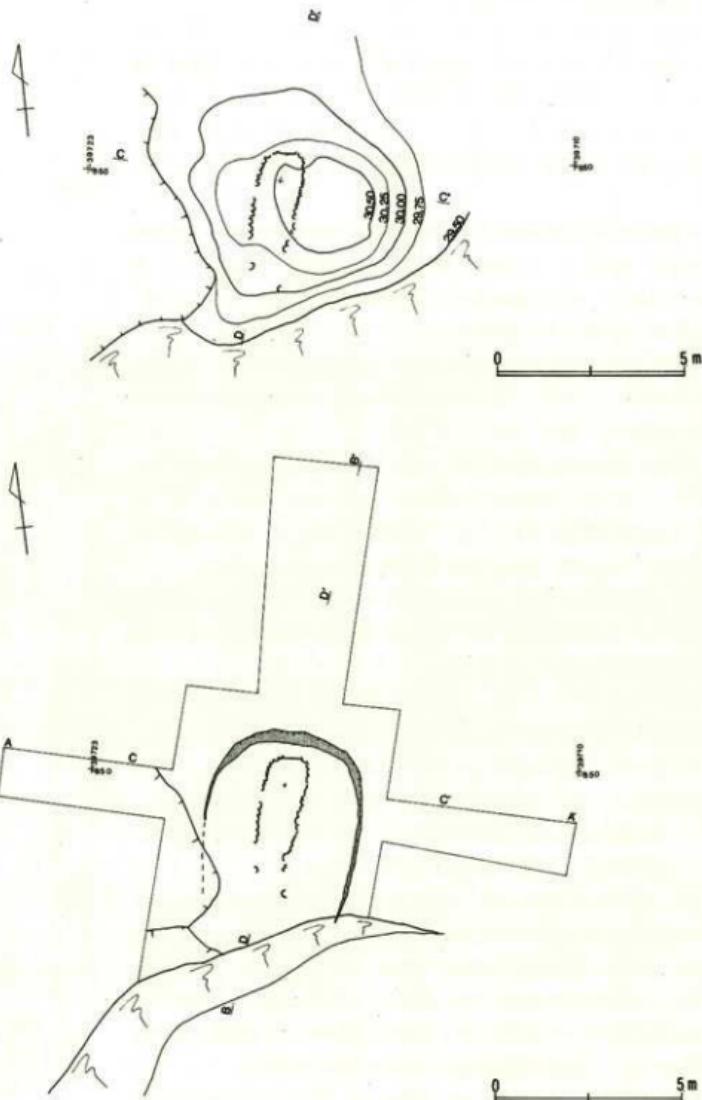
耳環（第6図K1・2）は2個とも全く同じ重量（9.42g）、色調（明るい黄金色）であり、環径（K-1:19.2mm×21.0mm、K-2:19.4mm×21.0mm）、太さ（K-1:7.4mm×4.7mm、K-2:7.3mm×4.7mm）もほぼ等しい。保存状態は良好で、K-1は抉部内面に亀裂があり、一部鍍金が陥没剥落し、K-2は抉部付近に小さく鍍金が剥落するが、それ以外は完全に鍍金が残り、金属光沢をもつ。作りの特徴も全く同じである。

直刀（第9図）は茎先を欠き、茎部分を含めた現存の全長78.1cmである。鍔の銹着により区部が不明であるが、刃部長70.1cmが推定される。刀身棟幅6.5~5.5mm、同身幅2.83~2.48cm、茎幅2.0cm、茎厚約5mm、鍔幅2.05cmを測る。刀身の中央を折損するが、形状はよく残る。刃部はところどころ大きな錆が目立つが玄室疎床に接した部分は錆が少ない。茎部は一部木質の痕跡があり、目釘穴が鍔端部から5.9cmの部分に残存する。

鍔の断片も同時に出土している。横幅6.3cm、厚さ1.5~2.0mmで、偏梢円形の形状より考えると鍔幅8cm前後となる。透し窓の形状は鍔の腐蝕が著しく不明である。小さな孔が三箇所ある。



第9図 桜山1号墳出土遺物(3)



第10図 桜山2号墳全体図(1)(2)

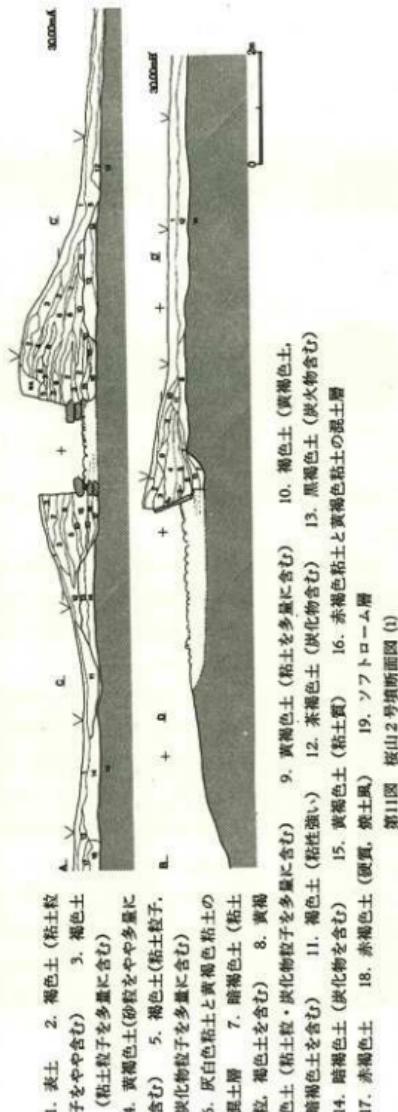
## (2) 桜山2号墳(第10~13図)

北群の乗っている台地の南側緩斜面から平坦面に移行する部分に占地し、1号墳の西50m、3号墳の東南東20mの位置にある。東西約7m、南北約6.5m、高さ約1.2mの墳丘を残存するが、墳丘の西裾を根切溝によって切られていた。また、石室直上の盛土は盜掘等の原因でやや窪んでいた。

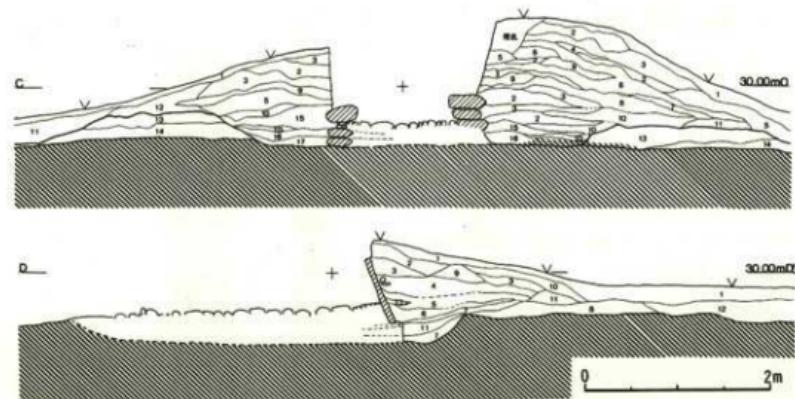
墳丘は現存部のほとんどが後込めの粘土で、石室の石材が河原石のためか1号墳に比べてやや細かい版築構造を示す。後ごめ部分は粘質の黄褐色土乃至灰白色粘土と粘性の弱い茶褐色土との互層となり、石室基底部付近は20cmぐらい、上部は10cm程度の厚さで積み重ね、たたきしめている。2号墳の場合、残存する墳丘のかなり外側の部分まで粘質の土が及んでいるため、墳丘全体を粘土質土で版築する方法をとっているようである。ただし、墳頂部は大きな攪乱が目立ち、明らかに上部から盜掘され、天井石や側壁上部の石材が抜き取られていた。

石室は河原石使用の乱石積み横穴式石室で、玄室の一部と羨道部を欠く。主軸方向はN-20°-Eで、わずかに胴の張るプランである。石室の全長は、側壁の石材が甚しく損われているため推定の域を出ないが、右側壁の最も南に残存する平たい石を生かして考えると3.70m程となり、同様の推定で玄室長2.50mと考えられる。玄室の最大幅は奥壁から75cmの部分で1.1mである。

奥壁は緑泥片岩の一枚石で、約30°前面に傾いた上、左側の側面がやや前に出るという不均衡な設置状態にある。あるいは、墳丘の土圧のために前傾したのかもしれない。石材の大きさは長さ78cm、最大幅52cm、厚さ4~



第11図 桜山2号墳断面図 (1)



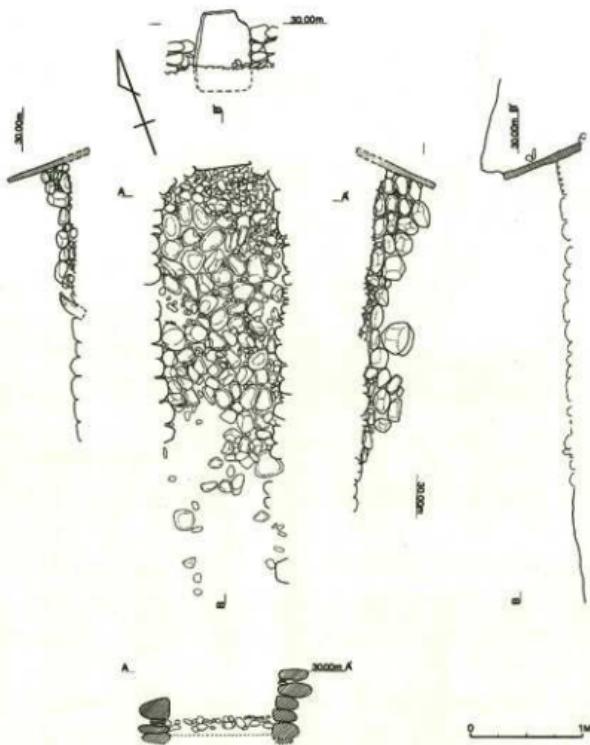
第12図 桜山2号墳断面図(2)

7cmで、本来長方形を意図して作られたものが、右上端のくずれでやや不整形になったようである。

側壁は大小の河原石を内側に小口を揃えて積んでいるが、最大のものは43cm×25cm×29cmで、25cm×15cm×10cmぐらいのものを標準の石材として使用している。右は4～2段、左は3～1段しか残存していない、特に傾向のある積まれ方はしていない、あまり大きくない石に人頭大を越える大石が乗っている部分はかなり多い。

羨道部は欠失しているが、基底石の残存から長さ約1.2m、幅約65cm程の施設を考えることはできる。封鎖の方法も不明である。玄室部分の末端に接して、25cm×25cm程の不整五角形の平たい石があるが、これを玄門部の基底石とするならば、両袖乃至はそれに近い無袖の石室であることを予想できる。玄室内は径20cm程の平たい面をもつ河原石を敷いて砾床面を形成し、その下あるいは間隙の部分に径3～10cm程の小円砾を厚さ10cm程敷いていた。砾床面の標高は29.61mであり、旧地表面と推定される黒色土層より10cm低い。

掘形は、石室の幅に比較して大変広く行なわれていて、幅4.2mで、長さも5mを上まわる。旧地表面を約20cm掘り下げて平らにし、赤褐色粘土と黄褐色粘土の混合土、黒褐色土、黄褐色粘土の順に土を詰めてたたきしめている。この掘形の底面に接して基底石を置き始めているので、これらの粘土層は後ごめも兼ねることになる。さらに側壁の石は間隙を有するため、粘土を適量に隙間に

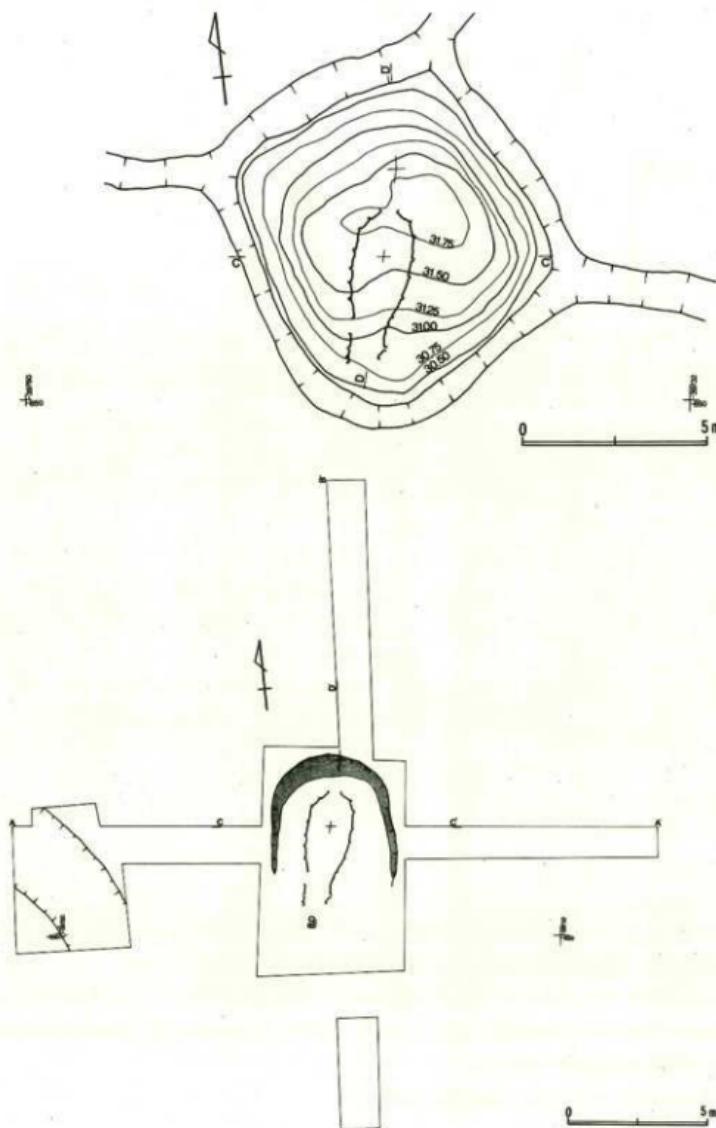


第13図 桜山2号墳石室

詰めている。ただし、奥壁の背後は約35cmの長さしか掘り込まれていないので、側壁の崩壊を防止する配慮の方が、奥壁のそれよりはるかに大きいものであったのではなかろうか。

前庭部・周堀についてはトレンチにより確認したが、明確にそれと判断できるものはなかった。石室自体が小支谷に面する斜面部にかなり近いため、谷地形そのものが前庭部と墓道の機能を意識されていた可能性を留保しておきたい。

出土遺物は古墳に伴うものは一切確認されなかった。



第14圖 桂山3號墳全體圖(1)(2)

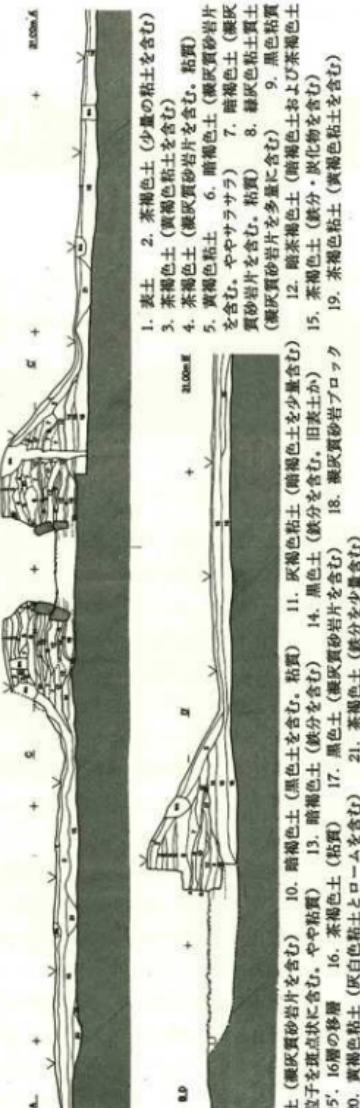
## (3) 桜山3号墳(第14~17図)

北群では最も西に位置し、2号墳と同様に北群の台地の南側緩斜面—平坦面の移行部に占地する。墳丘は東西7m、南北7.5m、高さ1m程であったが、墳頂部から南側はやや窪んだ感じになっていて、かなり盛土が削りとられている。盛土の構築は緑灰色粘土あるいは黄褐色粘土と暗褐色土・茶褐色土を交互に積み、たたきしめている。粘土層は側壁石材の縦ぎ目に対応するように積まれ、強固な後ごめ粘土として機能したようである。

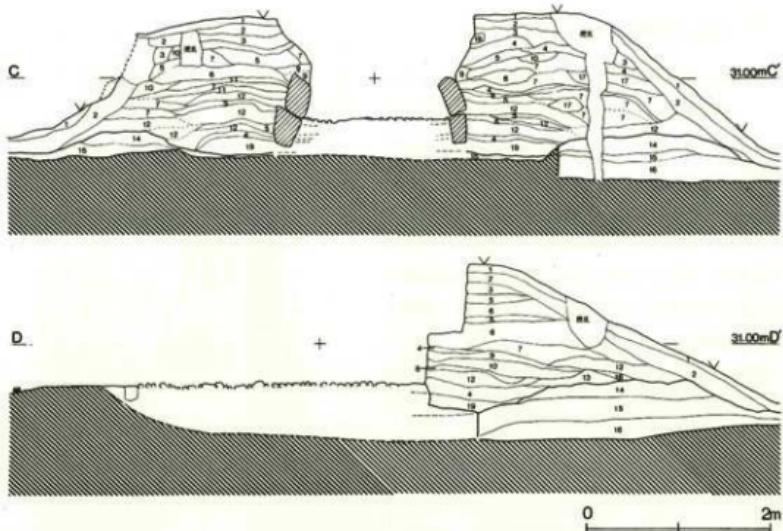
石室は凝灰質砂岩使用の単室構造の横穴式石室である。石室全長は4.15m、主軸方向N-19.5°-Eで、2号墳よりやや西に振れる。玄室長は3.0m、最大幅は奥壁から1.5mの位置で1.56mである。奥壁は欠失しているが、玄室内奥壁付近に石材の破片が散在していることより、緑泥片岩の板石が使用されていたと判断される。奥壁に隣接する側壁石材には、側面に「く」の字状の切り込みがあり、その状況から奥壁はわずかに前傾していたと考えられる。尚、奥壁の幅は56cmである。

側壁は基底部を含めて2段しか残存しない。平面プランは奥壁付近のカーブが強く、羨道部よりの胴張りが弱い鉢子形で、2段目は最高25cm、平均12cmの持ち送りがなされている。截石切組み積みの手法をとり、互目積みにされている。1号墳と同様に3号墳においても石材の列がわずかに前傾しているようである。砾床は径10~20cm程の大きな河原石を平らな面を上にして並べ、その間隙を埋めるように径5cm前後の小石を詰めている。砾床面とローム面との間に約5cm程ロームブロックを混入する茶褐色粘質土が敷かれていた。

羨道部は石材5個しか残存していないので、明確にしえないことが多い。長さ1.15m、最大幅87cmであり、凝灰質砂岩の破片が玄門推定位置に散在していた。左側壁の玄室寄りの部分は側壁石材が欠失し



第15図 桜山3号墳断面図 (1) S=1:118



第16図 桜山3号墳断面図(2)(土層名は第15図と同じ)

て約37cmの空白部がある。玄室と羨道の間に5cm程の隙間が見出されるので、1号墳と同様な凝灰質砂岩が間仕切りに使用されたことは十分考えられる。羨道部の床面にはほとんど石のないことや入口部付近が狭くなることなども1号墳の羨道部と共に通する特徴である。

また、羨道部入口付近には径10~15cm程の河原石が散在し、封鎖に使われたことを暗示している。前部は明瞭な形では存在しないが、羨道部前方約50cmまでの範囲で厚さ約10cmの凝灰質砂岩を含む茶褐色土が敷きつめられたように存在し前部類似の施設を思わせる。

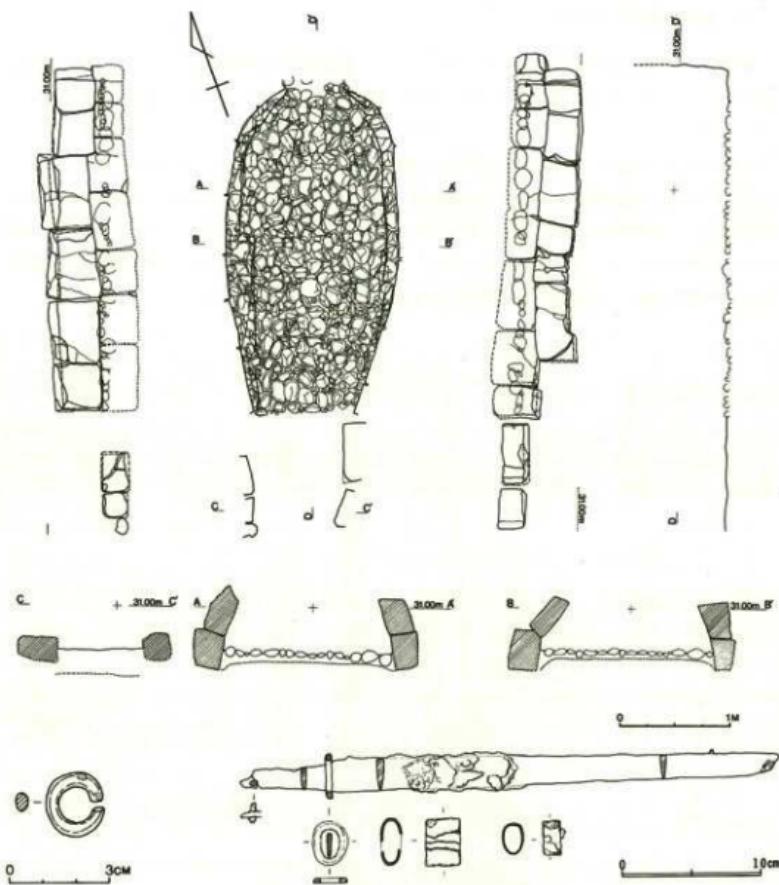
掘形は幅4.5m、長さ4.2mで残存するが、羨道部付近の盛土が失なわれているので、形状・規模ははっきりしない。現存部は半椭円形である。旧表土(黒色土)を24cm掘り下げ、茶褐色粘土・茶褐色土・暗茶褐色土を順に積んでたたきしめ、その上に砾床面(標高30.57m)を作り、前述のごとく盛土・石積みを行う。

墳丘西側裾部の西7mに薄い黑色土の堆積層を確認したが、墳丘の北・東側ではなく、椭円形に立ち上がり、厚さ数cmほどの落ち込みで周囲とは考えられなかった。

出土遺物は玄室の玄門付近中央部に刀装具3点と直刀1本、奥壁付近や左寄りに金環1個があり、いずれも砾床面から出土した。

耳環(第17図K1)は重量6.0g、横幅17.4mm、縦幅19.0mm、太さ6.2mm×4.65mmとやや小振りのものである。保存状態は良好で、抉部付近で一部鍍金が剥落し、緑青が付着するが、その他は全面に鍍金が残り、光沢をもつ。明るい黄金色である。

直刀(第17図)は四つに折損した上、刃元に鈎のふくらみがあるが、ほぼ全形を残し、保存状態



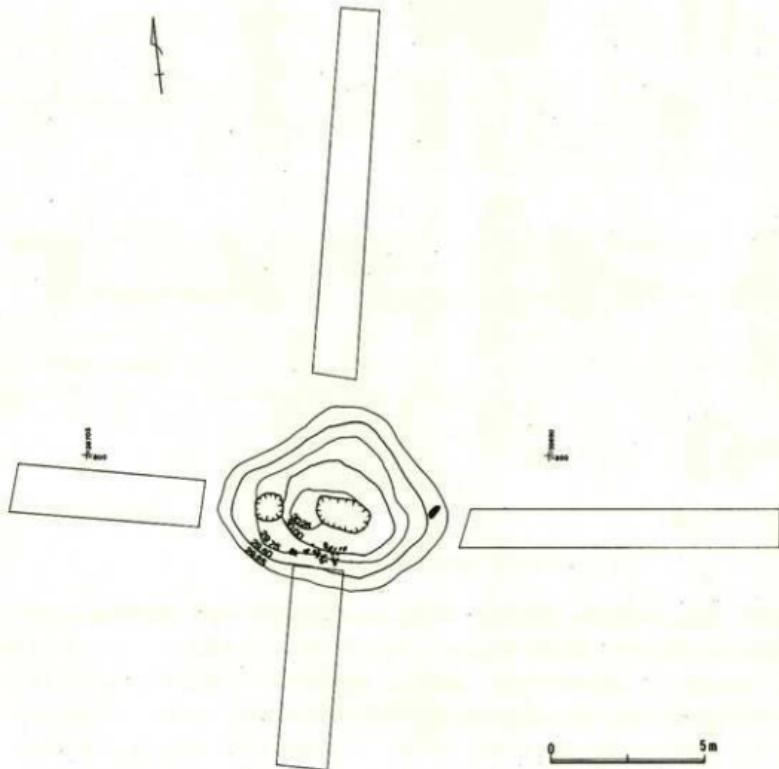
第17図 桜山3号墳石室および出土遺物

は良好である。全長38.9cm、茎長6.7cm、刃部長32.2cm、刀身棟幅5.2~4.2mm、同身幅2.32~1.81cm、茎幅1.55cm、茎厚4.5mm、目釘長1.49cmである。目釘は茎に刺さったまま銹着している。これに刀装具3点が付随する。鉗止は横幅2.53cm、縦幅3.11cm、断面の厚さ3.5mm、幅6.0mmで、鉗に当たる部分が平たく作られている。鞘口の金具と考えられる鉄製品は二つに切断しているが、外径約2.93cm×1.55cm、厚さ2.5~1.0mm、幅2.5cmの大きさであり、かなり薄手の作りである。鞘の木質は残存しない。柄端部の金具と考えられる鉄製品は、外径2.3cm×1.6cm、厚さ2.2mm~0.7mm、幅1.8cmで、大きく銹着しているが、外形はよく残っている。

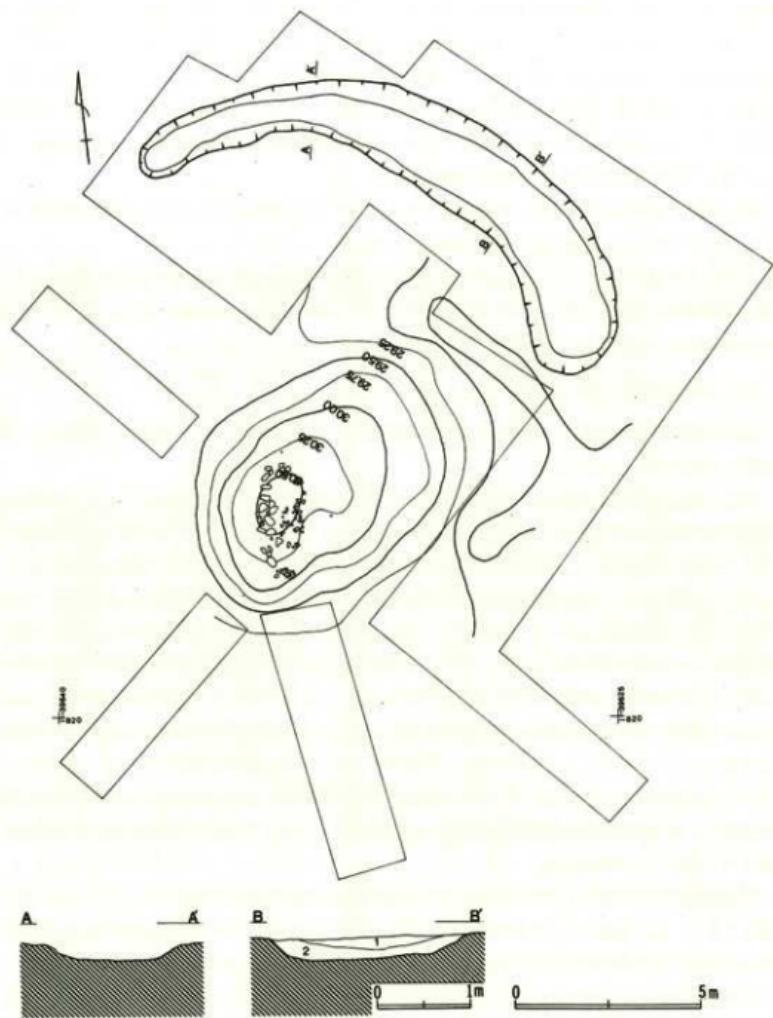
(4) 桜山4号墳(第18図)

東西約8m、南北約7mで高さ1mの墳丘をもつ。東西南北の周堀確認トレンチでは全く周堀は検出されず、また中央部を掘り下げるも主体部は確認できなかった。最終的に墳丘全体を除去したが、現地表レベル近くの墳丘内部に若干の礫群が検出されたのみであった。遺物は全く無かった。

古墳であるかは疑わしかったが、隣接の5号墳が類似した状態であり、5号墳は周堀の存在から古墳であることが確認されるので4号墳も古墳としてよいであろう。古墳の分布状況を観察すると丘陵斜面との傾斜変換点に位置する特色があるので立地状況からも古墳としてよいと思われる。検出された礫は玄室の床に敷かれたものであろう。側壁礫が全くなかったが、土層観察から凝灰岩を使用した痕跡は無いので河原石使用が推定できる。



第18図 桜山4号墳全体図



第19図 桜山5号墳全体図 (1. 黒色土 2. 黑褐色土)

(5) 桜山5号墳(第19図)

4号墳の南西20mに位置する。8m×6m、高さは約1mの墳丘をもつ。主体部探査のトレンチ断面では、かなり二次移動した状況で、原形をとどめている部分はほとんど無かった。現地表とほぼ同レベルで疊群が検出された。疊群の範囲は橢円形で長軸約3m、短軸1.5mで、特に西側は人頭大の河原石がややまとまって出土した。疊はかなり移動しているが、横穴式石室の側壁の一部と思われる。東側には人頭大の疊は無かったが小疊が散乱しており、その範囲は石室のプランと類似する。この部分は若干掘りくぼめた状態であり、石室の根石部分として推定すると、やや胴張りプランをもつ河原石使用の横穴式石室が想定される。

疊分布からは長さ2.5m、幅1.3m内外のプランをもつものと思われる。小疊は石室床面に敷かれていたものであろう。遺物は全く検出されなかった。

周堀は北側で検出された。この部分は5号墳と丘陵傾斜面との境界に相当する。また隣接の4号墳との区画部分でもあるが、全周せず、全体の4分の1程度であった。幅は一定としないが、きれいな弧を描く。周堀内からは須恵器大甕の破片と鉄片が出土している。

(6) 桜山6号墳(第20~22図)

桜山古墳群の南群に属し、小支谷を臨む標高29mライン上に位置する。長径13m、短径8m、高さ約1の墳丘が残っていた。

石室は側壁根石部分と疊床部が残っていたのみで他の疊はきれいに抜き取られていた。残存部の状態から河原石使用の横穴式石室であることが知られる。石室プランはわずかに残った根石部分のプランや疊床の残り具合、また後ごめ粘土の石室側プラン等を観察すると胴張り型の石室であることが十分推定できる。特に後ごめ粘土の石室側は側壁疊の背面があたかも鑄型のように残っており石室の疊だけを内部からそっくり引き抜いて持ち去ったことを示している。したがって後ごめ粘土の内側プランはかなり石室プランと一致すると考えられるので、奥壁および羨道部寄りが若干狭くなり、玄室中央部側の湾曲が少ない胴張り型であろう。これは現存している根石や疊床の残り具合からも十分推定されるところである。奥壁は側壁と同じように河原石を積み上げたもので、13号墳と類似したものである。3・9号墳のように縁泥片岩の1枚石の使用も考えられるが、奥壁周辺でそのような痕跡は全く認められず、疊床や奥壁根石の配置状況からは河原石積み上げの奥壁の可能性が強い。なお石室全体の形態は後ごめ粘土の内側プランによって玄室と羨道が明確に区分されたタイプであることが知られる。

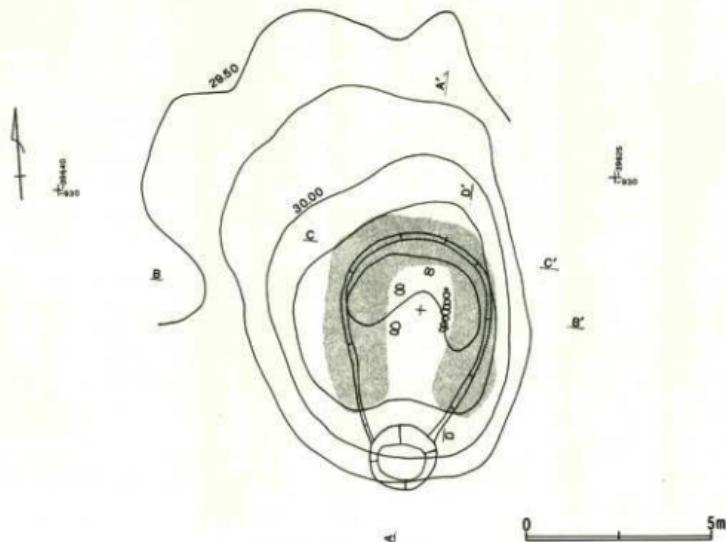
石室規模は玄室の幅が1.10mであること以外は不明であるが、後ごめ粘土プランによってかなり復元できる。後ごめ粘土のくびれ部を玄室と羨道の境界ラインとしてまた、羨道部分相当の後ごめ粘土の間隔から羨道側壁疊の幅を差し引き、更に後ごめ粘土の開口部先端を羨道部入口のラインとして考え合わせると石室全体の規模が推定できる。それらの観察では、玄室全長2.6~2.8m、玄室幅1.1m(実長)、羨道長1.2~1.4m、羨道幅0.7m内外になり石室全長は4m内外になる。

石室の後ごめは基本土として粘質の強い粘土を使用し、間層に暗褐色土(粘性はやや弱い)をつめ交互にたたきしめた粗い版築構造である。石室側壁疊の背後に直接つき固めている。後ごめ部分

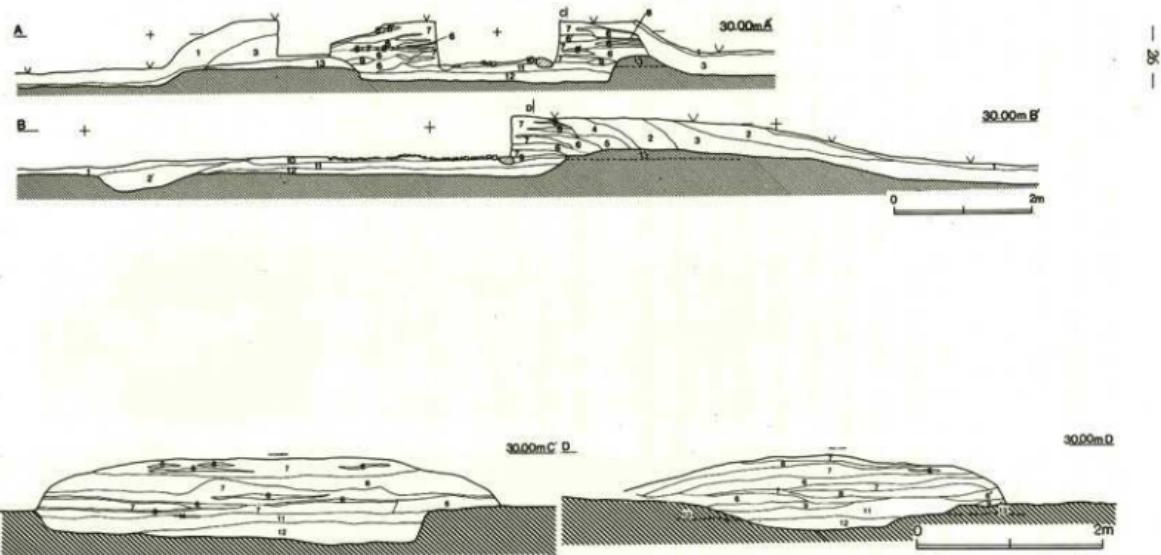
の外側プランは概ね長方形であり、その幅は 1.2~1.5m で石室全体を覆っている。互層が明瞭に認められるのは石室の根石部以上であった。粘土層は上部にゆくに従ってやや厚くなつて後ごめしてあるが、10cm内外で一層を形成しており、石室縦ほぼ 1 列の高さに相当する。後ごめ縦断部（第 22 図、図版 9）の観察によると基本的にはほぼ水平のラインで形成されているので、側壁跡を積み上げた後に、粘土でおさえつけながら順次石室を積み上げたことが観察できた。ただし羨道部については、玄室部と不連続部が生じているので、玄室後ごめと全く同一の工程では無いことが知られる。粘土部分はブロック状になっているが、断面観察によってかなりたたきしめが行なわれていることが知られる。この粘土は桜山古墳群が立地する丘陵部のローム層以下に普遍的に存在する固くしまった粘土層に由来する。ブロック状に認められる粘土は、粘土層から掘り取ったブロックが完全にこわれずに残ったものである。間層として後ごめされる土層は粘土ブロックを含まず、墳丘を構築する基本土層である。ただし墳丘土は後ごめが一定段階に達したところで構築を始めている。

掘形は、石室を囲むように倒卵形プランを呈する。旧地表面から約 40cmほど掘りくぼめ、底面は概ね平坦である。断面では 2 層に分離されるが、石室直下土層が丁寧に整地されている。下部土層はたたきしめの痕跡は認められない。羨道部入口に近い部分に直径 2m 程の円形ピットがある。石室の掘形形成後に掘り込まれているが土層断面に擾乱はみられず、石室に関連ある遺構の一部と思われる。内部土層内には遺物はなかった。

周堀についてはトレンチ発掘では確認されなかった。最終的に機械を使用したが特にそれらしい痕跡はなかった。出土遺物は石室内外とわずか検出されなかった。

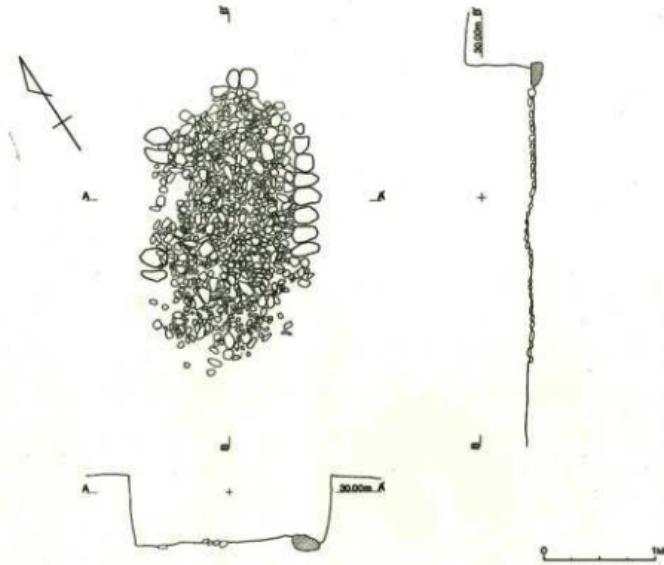


第20図 桜山 6 号墳全体図

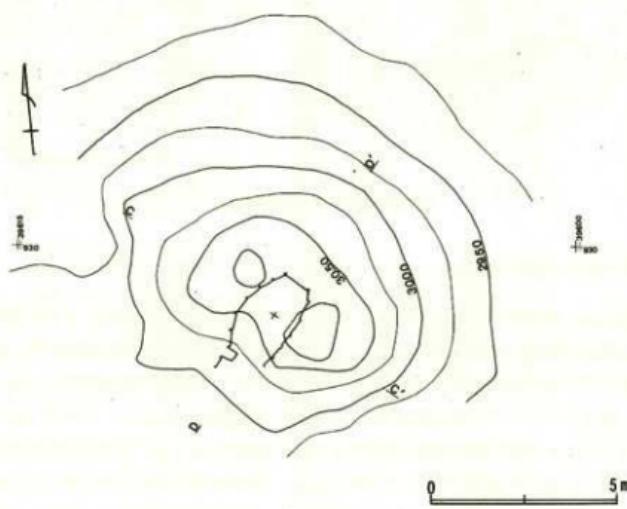


第21図 桜山6号墳断面図

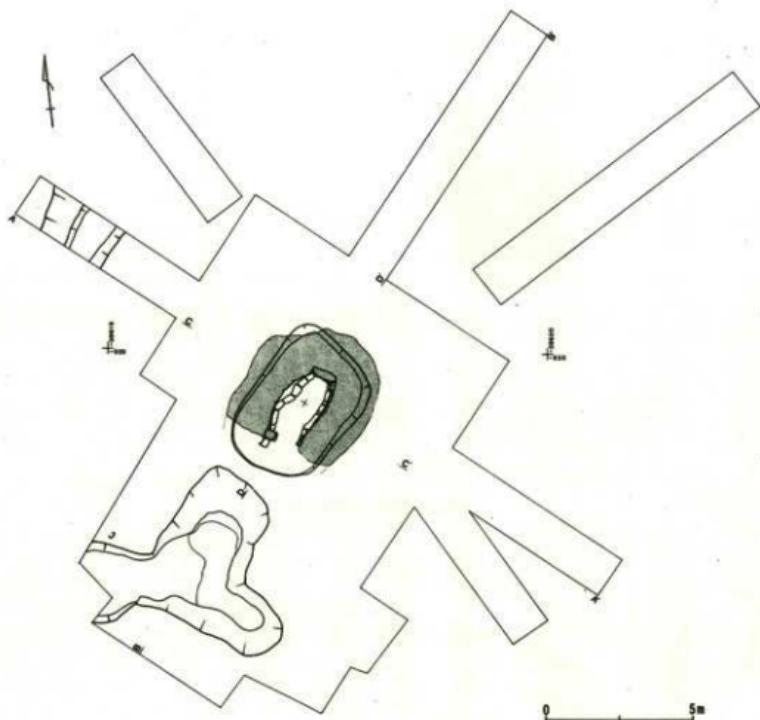
- |                |                     |                 |
|----------------|---------------------|-----------------|
| 1. 表土          | 6. 黒褐色土（粘土少量含む）     | 10. 暗褐色土（粘土含む）  |
| 2. 黒褐色土（柔かい）   | 6'. 黒褐色土（粘土多量に含む）   | 11. 暗褐色土（しまり良い） |
| 3. 暗褐色土        | 7. 淡黄褐色土（粘土層）       | 12. 黒褐色土（粘土含む）  |
| 4. 暗褐色土（しまり良い） | 8. 青灰色粘土            | 13. 黒色土（旧地表面）   |
| 5. 黒褐色土（しまり良い） | 9. 暗褐色土（粘土含み、しまり良い） | 14. 穀泥片岩の薄い層    |



第22図 桜山6号墳石室



第23図 桜山7号墳全体図 (1)

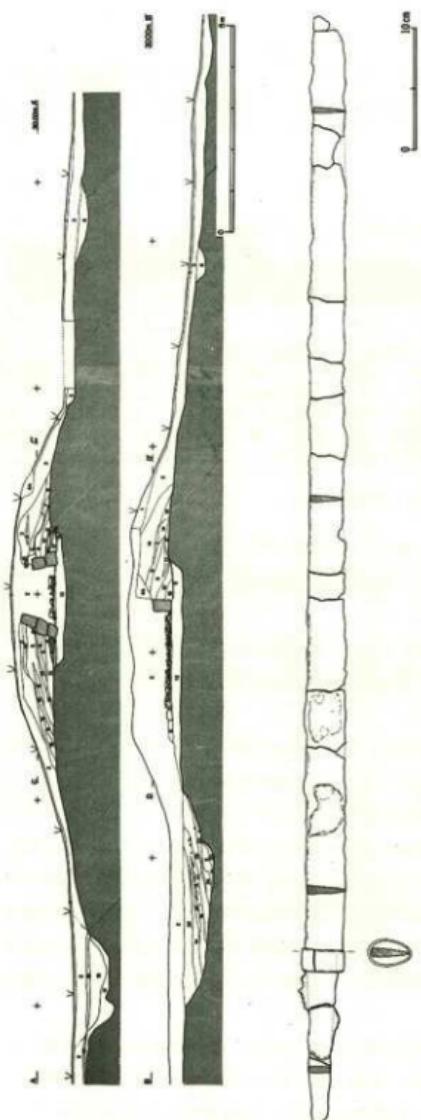


第24図 桜山7号墳全体図(2)

(7) 桜山7号墳(第23~27図)

墳丘は長径11m、短径9m、高さ1m約で、標高29mの丘陵縁辺に立地する。8・9号墳に隣接し中心位置でそれぞれ20~25mの距離にある。急斜面を隔てて小支谷の出口に直面している。

石室は凝灰岩質砂岩の載石使用の胴張り型横穴式石室である。羨道部は破壊されている。玄室は全長2.45m、奥壁幅0.7m、中央最大幅0.7m、入口部幅(玄室前幅)0.98mで、現存部の最大高は床面から90cmまで残る。奥壁は凝灰岩質砂岩の幅広のものを使用している。2段目は抜き取られていたが同規模とすれば奥壁の実際高は約1m内外になる。右側壁の最高所の石材に切り欠き部があるのでこの上に左側壁と同大の石を載せると左右側壁ともに同高の90cmに達する。側壁の4段目と同大の石を更に載せると110cm程度になるが、90~110cmを床から天井部までの高さとしてよいであ



第25図 桜山7号墳断面図(1)および出土遺物

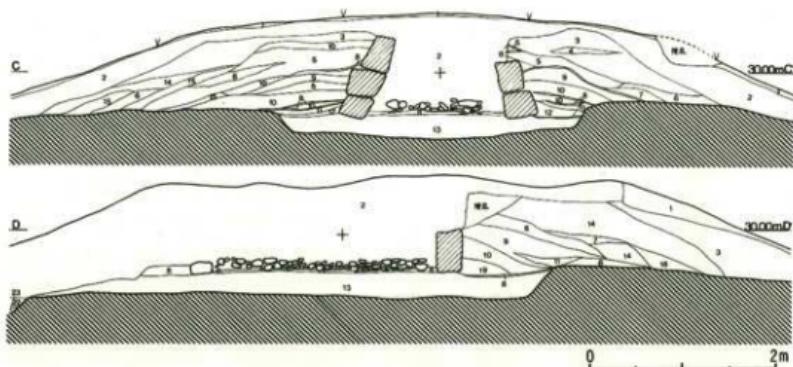
ろう。積み方は切組積みと称されるもので9か所の切り欠き部が現存する。なお正面からは見えないが両側壁が奥壁と接する部分にも切り欠き部があり、直方体の奥壁石材と密着させる方法がとられていた。玄室入口には玄門施設として、いわゆる門柱石が約24cm程突出している。欠失した右側も同じ状況とすれば玄門幅は約50cmになる。この部分に2次移動した凝灰岩質砂岩の截石があり、桐石の一部と思われた。漢道部も左側の一石のみである。玄室入口部より5cm狭くなっている、0.88m内外の幅が推定できる。

側壁は持ち送りで上部が狭くなっている。2次変動が無いと思われる中央右側壁と床面とは約80度である。天井部高を90~110cmと推定すればそれぞれ45~35cmの天井幅となる。なお側壁下端と礎上面とは約20cmの高低差がある。

壁面に使用した凝灰岩質砂岩の表面には粗雑な加工調整痕が明瞭に残る。これは同じ石材使用の1・3・12号墳のものが手斧痕状になっているのと比べて大きな差である。断面がV字形に近い。

床面はコブシ大の河原石を敷きつめている。その厚さは20cm程度でかなり厚い。特に扁平な礎を選択したものではない。玄室から直刀が出土した。

後ごめは粘土を使用している。石室の背後1.5~1.8mの幅で数層のたたきしめた粘土層が確認できた。層序は下半部が丁寧でやや密であり、上半部は区分が不明瞭になっている。粘土は小さなブロック状態でたたきしめられていた。また下部よりも上部に粘土を厚く用いて側壁を支えている。部分的に凝灰岩質砂岩の小



1. 表土 2. 茶褐色土 3. 軟質暗褐色土 4. 粘土 5. 暗褐色土（粘土  
ブロック含む） 6. 黒褐色土 7. 褐色土（粘土ブロック含む） 8. 粘土（凝灰質砂岩含む） 9. 暗褐色  
土（粘土） 10. 黑褐色粘質土 11. 暗褐色粘質土 12. 暗褐色土（砂質、小砂利を含む） 13. 黑褐色  
土（しまり良好、粘質） 14. 暗褐色土 15. 黑色土 16. 黑褐色土（しまり良好） 17. 暗褐色土（しま  
り良好） 18. 暗褐色土、褐色土混合（凝灰質砂岩含む） 19. 砂層 20. 暗褐色粘質土 21. 黑色土（凝  
灰質砂岩層含む） 22. 暗茶褐色土 23. 暗茶褐色土（凝灰岩層含む） 24. 暗茶褐色土（鉄分を含み、  
粘質）

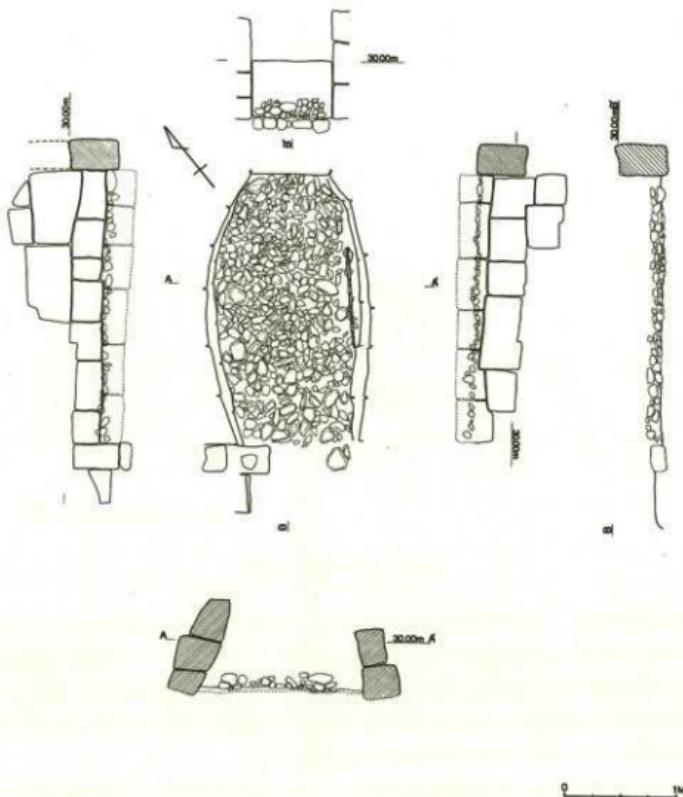
第26図 桜山7号墳断面図(2)

片を混入する層がある。粉末状になったものもあり、石材加工の屑と思われる。最下段側壁の後ご  
め中に既に認められるが上部側壁背後にもあり、加工整形作業を側壁積み上げ中に行っていること  
が知られた。

掘形は不整長方形プランで旧地表（黒色土面）から30~40cm掘り下げる。石室側壁や奥壁背後か  
らそれぞれ60~90cm外側にまで達している。明瞭な版築状況は認められず、ほぼ均一な土層であっ  
た。

石室前面に周堀とは異なる前庭埋没ビットがある。石室床面から90cm掘り下げているが、粗雑な  
掘り方でおとうとつがあり、粘土層まで掘り込んでいる。覆土に混入物があり、その上を埋土してい  
るが特徴である。混入物は凝灰岩質砂岩の屑や粉末化したものがかなり多く、また若干の小砾や  
緑泥片岩の破片が層を異にして含まれる。層序は石室側から外方へ傾斜しており、また分層状態を  
観察すると、石室構築の工程に従って廃棄された様子が知られる。埋土の上面には凝灰岩質砂岩の  
粉末状のものが広汎に散乱しており、石室を加工整形した屑が完全に除去されていないことが知ら  
れた。なお前庭埋没ビットは未発掘部へ延びているが、これは周堀に続くものと思われる。両者の  
関係は明瞭につかめなかったが、縦断土層の状態によると前庭埋没ビットが、周堀のブリッジ部分  
になっていた可能性がある。

周堀はトレンチ内で検出されている。全面調査することはできなかったが石室の奥壁側を除いて  
三方に存在する。右側壁側はトレンチ内で遺構はつかめなかったが土層断面の落ち込み部は周堀の  
一部と思われる。左右両壁側の周堀は石室中央とほぼ等距離にあり前庭部側も同じであるので、不  
整形ながら三方を半径約10mで囲むものと思われる。なおこの部分はそれぞれ6・9・8号墳と対



第27図 桜山7号墳石室

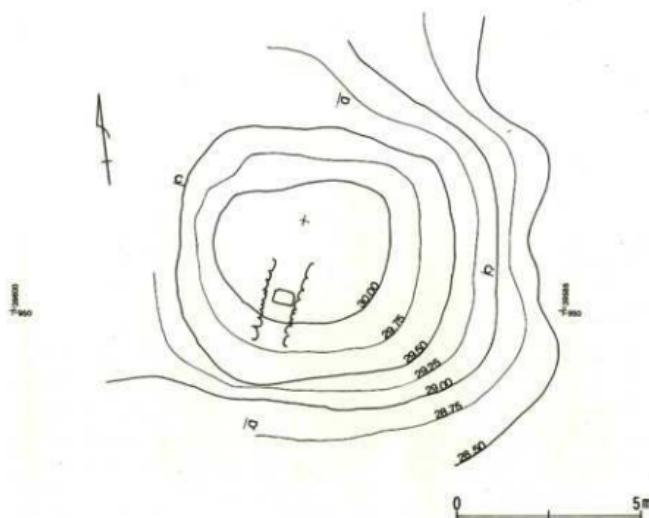
面する位置である。

出土遺物は玄室右側壁際の砾床面から出土した直刀のみである。全長90.4cm、鍔部の銹着で区部が不明であるが刃部長76.4cm、茎長14.0cmが推定される。刃身棟幅7.0~5.0mm、同身幅3.2~2.7cm、茎厚約5mm、鉢幅1.7cm、保存状態はやや良好である。

#### (8) 桜山8号墳（第28~31図）

墳丘は直径約10m、高さ1.25m、標高29mの丘陵縁辺に立地する。南群の最東端に位置する。

石室は河原石乱石積みの横穴式石室である。使用砾は他の例と異り、扁平でかなり大きな砾を混え、総じて扁平気味の砾を選んで積み上げている。玄室部は根石を含めてほとんど抜き取られてい



第28図 桜山8号墳全体図(1)

るが礫床の範囲から、中央やや奥壁寄りに最大径をもつ胴張り型プランが推定できる。玄室入口には $67 \times 37\text{cm}$ 、厚さ $20\text{cm}$ の凝灰質砂岩の截石を仕切りに置いて、樋石としている礫床の範囲から玄室長約 $3\text{m}$ を推測させる。羨道部は樋石奥端から入口まで $1.4\text{m}$ 、幅 $0.75\text{m}$ を計る。羨道入口は特に大形礫を横長に置き羨門の一部としている。左側の礫は二次移動したものである。羨道入口に人頭大の礫が散乱していたが、これは封鎖礫の一部と思われる。

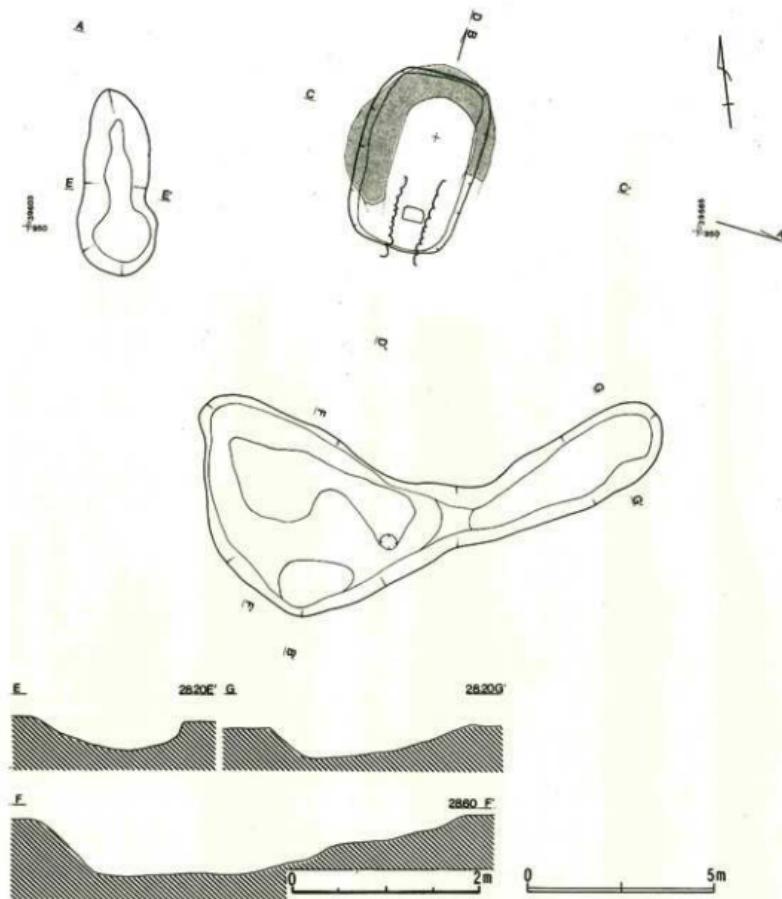
樋石の玄室寄り部分はL字形の切り欠き部があり、ここに玄門施設として門柱石が立っていたことが知られる。側壁部に若干の隙間があるので緑泥片岩の板状石を立てたことが推定できる。

礫床は特に扁平な礫を選んで敷いている。奥壁寄り中央の床面に $18\text{cm}$ の間隔で耳環（金環）が1対出土している。

後ごめは粘性の強い粘土と黒褐色土を基本としてたたきしめている。側壁礫の背後を直接ささえしており、約 $1\text{m}$ 外側にまでたたきしめた部分が拡がる。部分的に凝灰質砂岩の層の混入層があるが、これは石室入口前面にも同様のものが散乱していた。同質の石材が樋石以外にも使われた可能性が知られる。

石室掘形は長方形プランで床面下 $30\text{cm}$ まで掘り下げている。明瞭な版築状態ではないが、石室直下の層は固くたたきしめられていた。

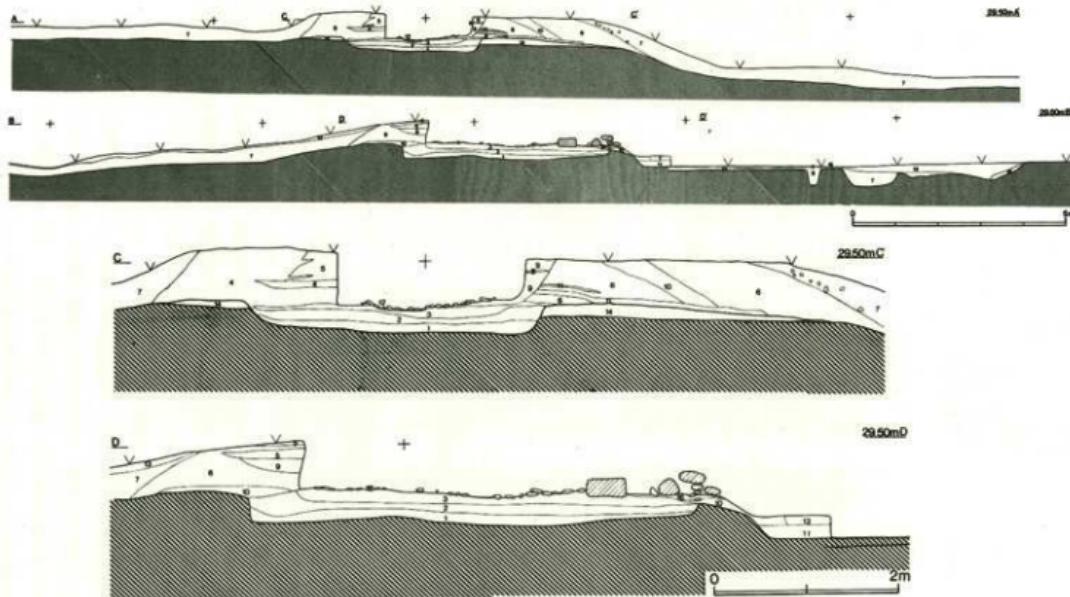
周堀は不整形で断続的である。特に石室入口の $5\text{m}$ 先に掘られたものは底面もおうとつがあり、粘土層まで掘り込んでいる。6号墳で認められた前庭埋設ピットに形状が類似している。混入物に



第29図 桜山8号墳全体図(2)

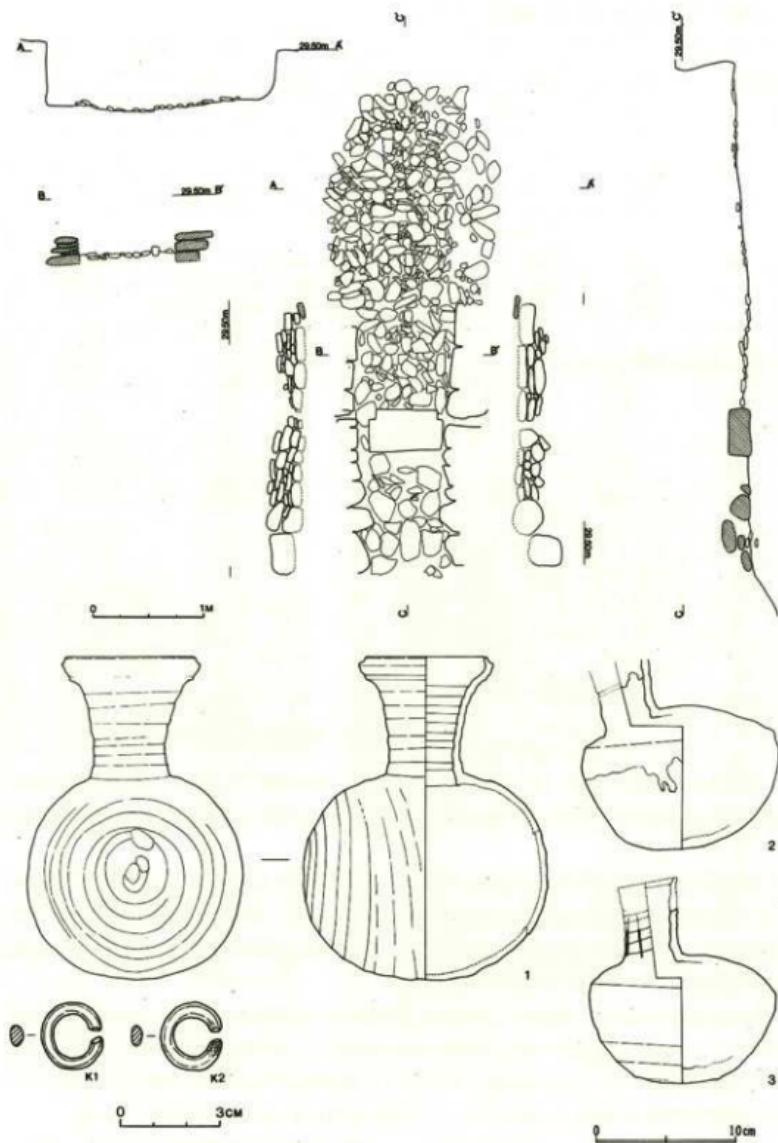
顯著なものはなかったが同様の遺構であろう。東にのびるやや浅い周堀とは形状が異なっているのでこちらが本来の周堀と思われる。この浅い周堀内では須恵器の細頸瓶(フラスコ型瓶)(第32図1)と平瓶(第32図2)が中央部分に散乱して出土している。また西側部分にも周堀がある。この部分は9号墳と直面する方向である。内部から須恵器の平瓶(第32図3)が出土した。

出土遺物は上記の須恵器細頸瓶1、同平瓶2、耳環1対のみである。耳環(第32図K1・2)は2個ともに全く同じ重量(6.47g)、太さ(6.9×4.0mm)、色調(緑かかった黄金色で冷たい光沢をもつ)である。環径はK-2が横幅18.3mm、縦幅20.1mmで小さく、K-1は横幅0.1mm、縦幅で0.5mm上回る。保存状態は非常に良く鍍金が全面に残り金属光沢を良く残す。



- |                   |                   |                     |
|-------------------|-------------------|---------------------|
| 1. 暗褐色土（軟質）       | 7. 黒褐色土（表土）       | 13. 黑色土（旧表土）        |
| 2. 黒褐色土（しまり良い）    | 8. 濁灰砂質岩破片層       | 14. 黄褐色粘質土          |
| 3. 黄褐色土（しまり良い）    | 9. 茶褐色土（粘土混入）     | 15. 黑褐色粘質土          |
| 4. 粘土層（濁灰砂質岩小片混入） | 10. 暗褐色土          | 16. 暗褐色土（濁灰質砂岩破片混入） |
| 5. 粘土層            | 11. 茶褐色土          |                     |
| 6. 黑褐色土（硬質）       | 12. 黄褐色土（濁灰質砂岩混入） |                     |

第30図 桜山8号墳断面図

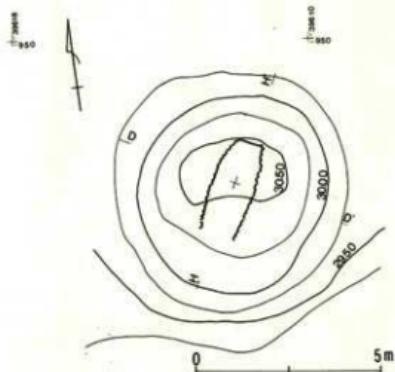


第31図 桜山8号墳石室および出土遺物

## 桜山 8 号墳出土土器（第31図）観察表

器種	番号	大きさ (cm)	態形の特徴	手法の特徴	備考
細頸瓶	1	口径 8.7 胴径 17.5 器高 23.1	頸部やや太く短かい、体部中央以上に緑黄色のゴマ状自然釉、口縁部形態整う	頸部ロクロ痕明瞭、内面はラセン状に上がる。体部回転ヘラ削り部中央に指紋、ロクロは時計回り、焼成良好硬い、暗灰色	完形
平瓶	2	胴径 14.0 胴高 10.3	やや形態歪む、天井部ふくらみ大きい、頸部沈線は浅い、ほぼ全面に暗黄緑色自然釉、一部ゴマ状	体部下半は回転ヘラ削り後ナデ仕上げ、焼成良好硬い、暗灰色	口頭の一部のみ欠
平瓶	3	口径 (4.4) 胴径 12.3 器高 14.7	頸部小さくやや内側に付く、頸部鋸いヘラによるラセン状沈線 5周底面に 3 本、頸部に 2 本の粗沈線	全表面ザラつく、体部下半粗い回転ヘラ削り、底部ヘラナデ仕上げ	口頭の一部のみ欠

## (9) 桜山 9 号墳 (第32~35図)



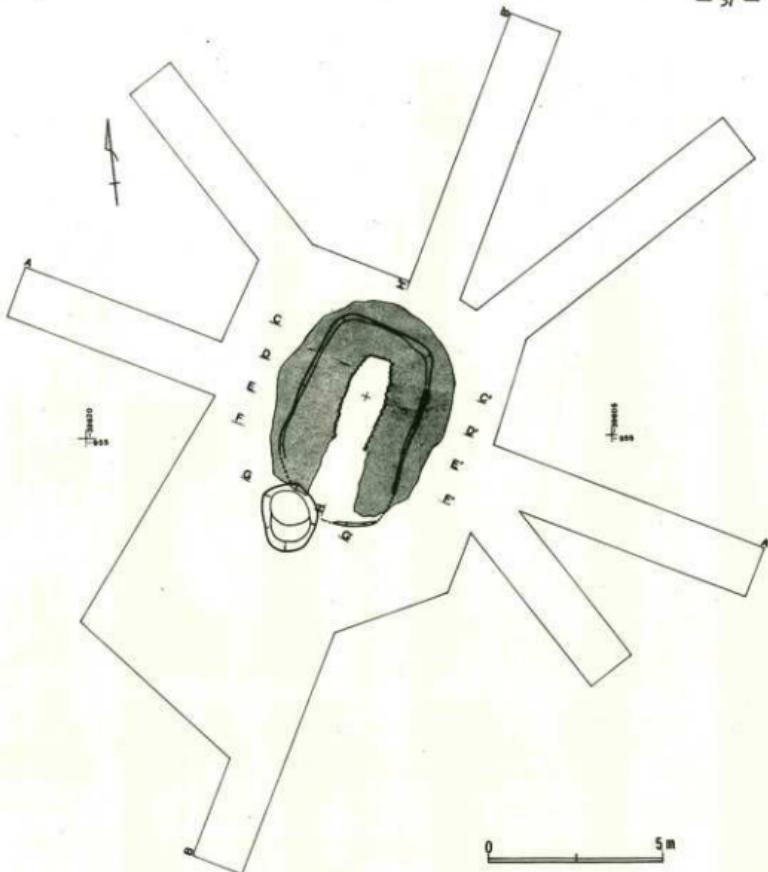
第32図 桜山 9 号墳全体図 (1)

現墳丘はやや小さく直径 7m、高さ 1.3m で、標高 29.3m の丘陵やや内側に立地する。桜山古墳群全体が丘陵縁辺ラインに沿って立地しているのに比べて 9 号墳のみが平坦面のやや内側に位置している。

石室は河原石を使用乱石積み横穴式石室で玄室の一部と羨道部を欠くが、整った胴張りプランをもつ。河原石を使用した他の古墳の中では最も整美な石室である。玄室長は現存部は 2.65m であるが若干延長したものが実際長であろう。奥壁幅 0.56m、最大幅はほぼ中央で 1.02m である。石室全長は後ごめ粘土プランから 4.9m 前後になろう。

奥壁は緑泥片岩を使う。幅 65cm、高さ 60cm、厚さ約 10cm で若干内部に傾斜しているが、基部が床面レベルとほぼ同じであるので押し出されたものと思われる。本来は直立していたもので背後の後ごめ粘土と両側壁によって支えられたものであろう。側壁は 30cm 大の礫を小口積みしている。使用礫はほぼ同形同大のものをそろえており、他の古墳とは異なり、総じて丁寧に作っている。

後ごめは粘土を基本土としてたたきしめている。石室使用礫の背後を直接ささせており、壁裏から 1.5~1.8m までたたきしめた後ごめが認められた。後ごめ外側プランは石室プランと類似した不



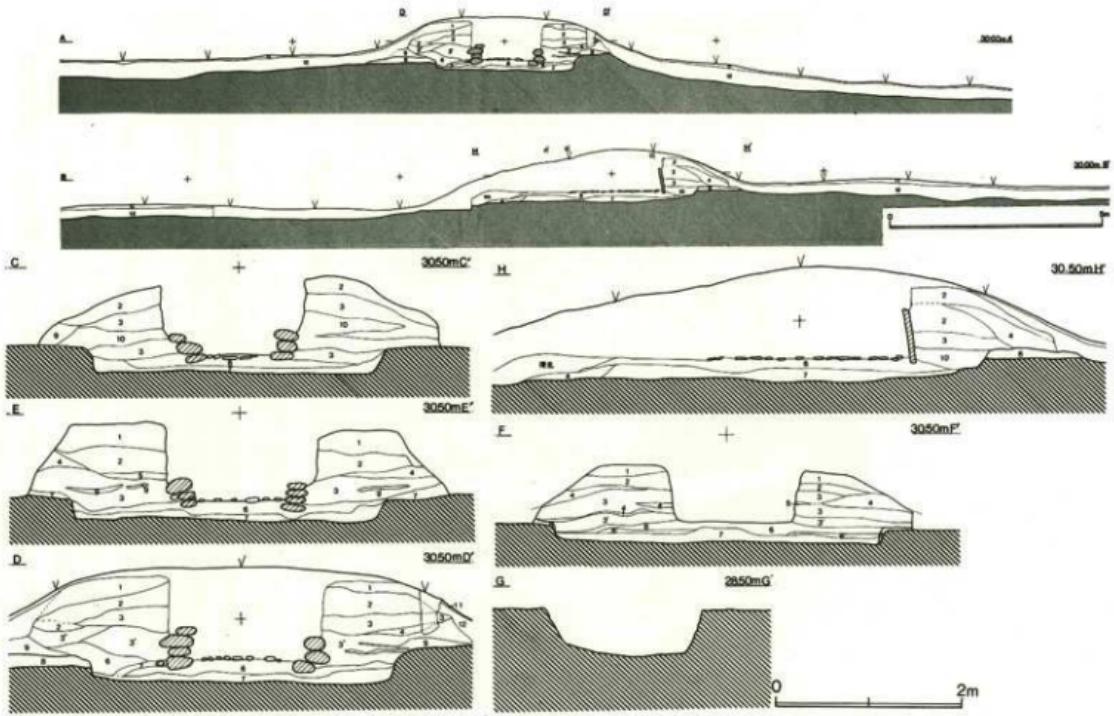
第33図 桜山9号墳全体図(2)

整長円形である。層序は下位に細かい丁寧なたたきしめ土層があるが上位は一枚の土層がやや厚い。ただしほぼ同一の粘土で土層間の差異が不明瞭な部分もある。他の例と比べると間層部分が明瞭ではないが、後ごめ状態はかなり丁寧でしっかりしている。

掘形は  $5.9m \times 3.5m$  の不整長方形で石室をほぼ中央におさめる。石室の背後  $0.9 \sim 1.0m$  外側を掘り込む。深さは石室床面より  $20 \sim 30cm$  深い。石室直下の層は固くたたきしめられている。

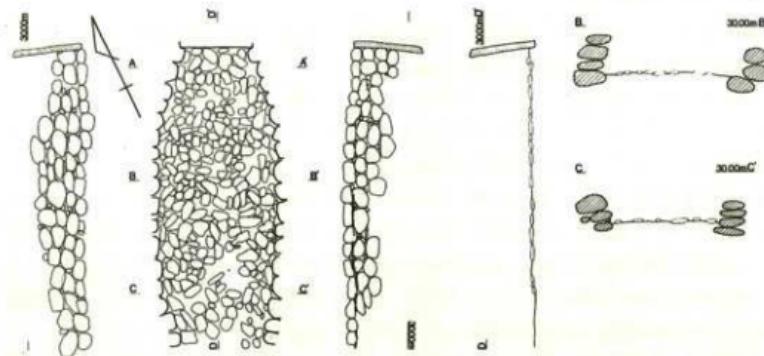
前庭部に  $2.0m \times 1.8m$  の不整円形ピットがある。深さは石室床面から  $-1.62m$  である。床面はやや粗い掘り方をしている。内部から遺物は無いが特に新しく切り込まれた要素はない。前庭部埋設ピットとしてはその位置がやや異なるが同様の遺構の可能性もある。

出土遺物は特に古墳と直接関係あるものは出土しなかった。

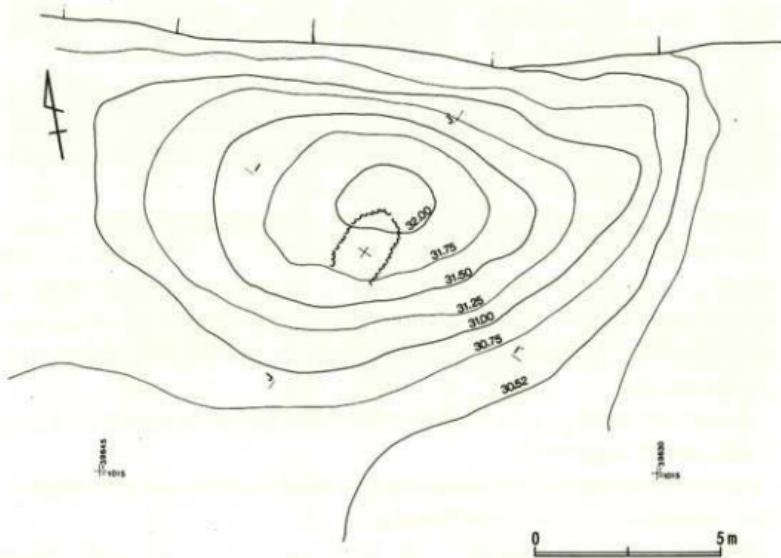


第34図 桜山9号填断面図

- 1. 褐色土（軟質）
- 2. 黄褐色土（粘土質）
- 3. 黄白色粘土（暗褐色土含む）
- 3'. 黄白色粘土（3より多く暗褐色土含む）
- 3''. 黄白色粘土（3'より多く暗褐色土含む）
- 4. 暗褐色土
- 5. 褐色土（砂質、小砂利を含む）
- 6. 黄白色粘土ブロックと黒褐色土
- 6'. 黑褐色土を6より多く含む
- 7. 黄褐色土（硬く、しまり良い）
- 8. 黒色土（旧地表）
- 9. 黑褐色土
- 10. 淡青灰色粘土
- 11. 表土
- 12. 淡黑褐色土



第35図 桜山9号填石室



第36図 桜山10号填全体図 (1)

(10) 桜山10号墳（第36～39図）

墳丘は $18m \times 10m$ 、高さ $1.5m$ を測り、一部切断されているが南群中で最大規模である。標高 $29m$ の丘陵縁辺のわずかに台状地形の端部に立地する。

石室は前後に破壊された部分をもつが河原石乱石積みの横穴式石室で、わずかに胴張りプランを呈する。玄室のみ検出された。最大幅は中央部で $1.26m$ 、現存部は $1.8m$ まであるが、後ごめや掘形か石室全長は $4m$ 以上になろう。奥壁は河原石乱石積みが予想され、特に他の石を使用した痕跡はない。側壁は最下段の根石部分には特に形の整った横長の礫を選び、高さをきれいにそろえて配置している。その上段からは小口部が $15\sim 20cm$ の厚さをもった大形礫を積み上げる。壁面使用の礫としては桜山古墳群中最大である。床面も礫床の礫としてはかなり大き目のごろた石を敷いている。

後ごめおよび掘形造構については他の古墳とは異なった特徴をいくつかもっていることが観察された。これらの観察をもとに石室構築までの工程は以下のようである。

まず $5m \times 4m$ の不整長方形土壌を掘り込む。これは黒色腐植土層面（旧地表面）から $45\sim 60cm$ の深さである。旧地表面はやや傾斜するので、底面は概ね平坦である。これを一次掘形と仮称する。一次掘形の下位層は大まかな整地をしており、土層ラインが全体まで通らない。特に強くつき固めた痕跡はない。中位の黒褐色土は $20cm$ の厚さでやや固めている。上位には粘土質のロームブロック土を強く固めて積み上げ、その上に細かい砂利を多く含んだ黄褐色粘土を強くつき固めた薄い間層（ $2\sim 4cm$ ）をおき、更に若干砂利がすくなくなる黄褐色粘土層を $10\sim 15cm$ の厚さでつき固める。この層が直接石室を支える。この層の上面は旧地表面より $20cm$ 程高位になっており、石室の床面レベルに等しい。なお土層中の焼土・炭化物・土器片等の混入は、当古墳が2軒の住居跡の上に乗って作られていることによる。

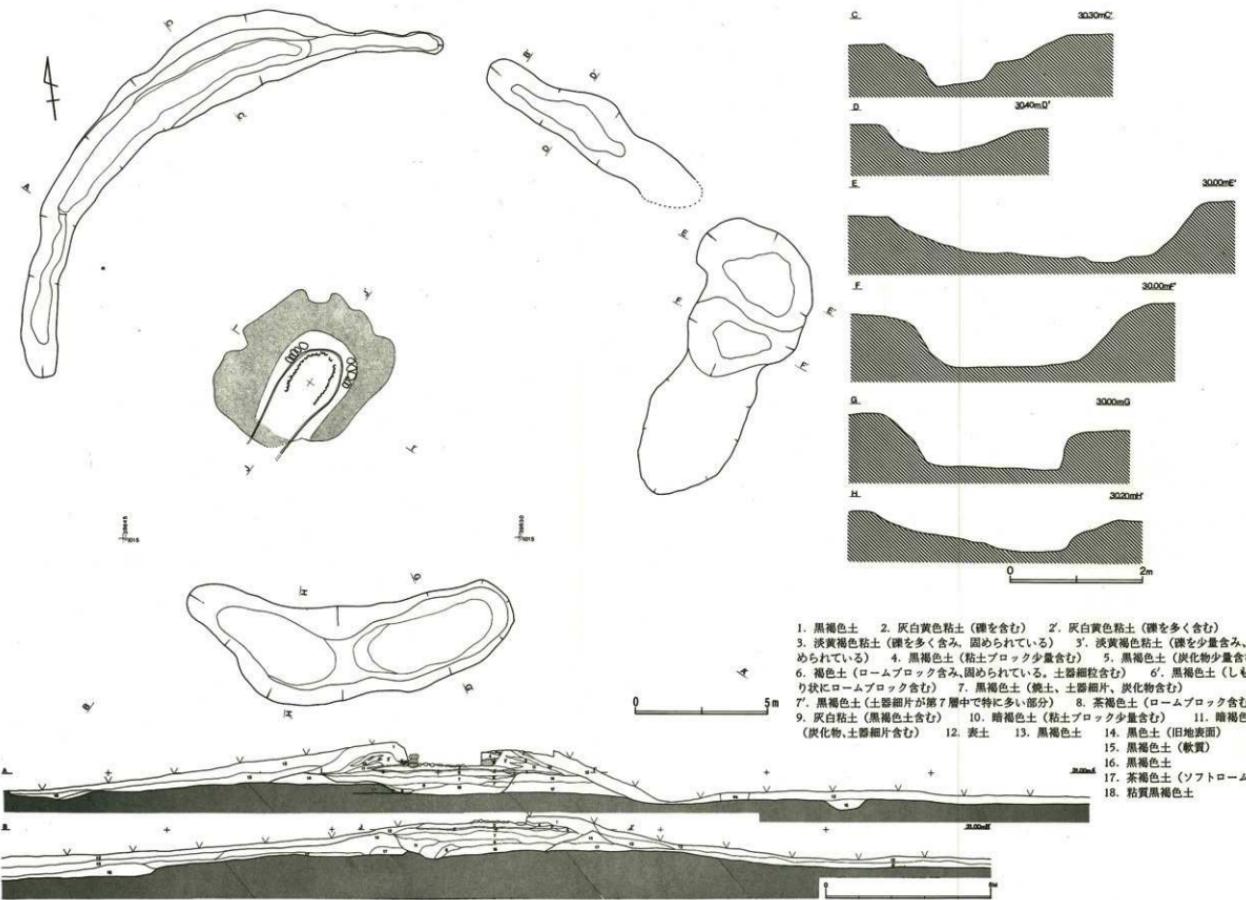
以上が石室構築の基礎地形工程であるが、次に石室構築に移行せず、砂利を含んだ黄褐色粘土と（黒）褐色土を交互にたたきしめながら版築を続行する。そしてある程度積み上げた後に、この版築部に新たに掘り込みを作る。この二次掘形は断面逆梯形で下底幅は $2.9m$ が確認できる。擾乱のため全体プランは不明であったが、きれいな掘り込みであった。

次の工程は二次掘形の下底面縁辺に沿って、 $30\sim 40cm$ 、厚さ $20cm$ 前後の枕状の礫をレベルをそろえて一列に敷きならべる。あたかも石室の根石のような配列であるが、石室根石を囲むように外側に位置し、 $5\sim 10cm$ 程度低レベルで上面をそろえている。擾乱があるので、石室根石の外側を一周するか否かは不明であるが、これを全く欠く部分もあるので、部分的な配置も考えられる。なおこの後ごめ外側礫は一石のみで複数個積み上げた痕跡はなかった。またその配列は石室根石プランとほぼ同じであった。

次に石室の根石を配置し、これと二次掘形との間を砂利を含む粘土と黒褐色土を交互につきかためながら側壁を積み上げてゆく。

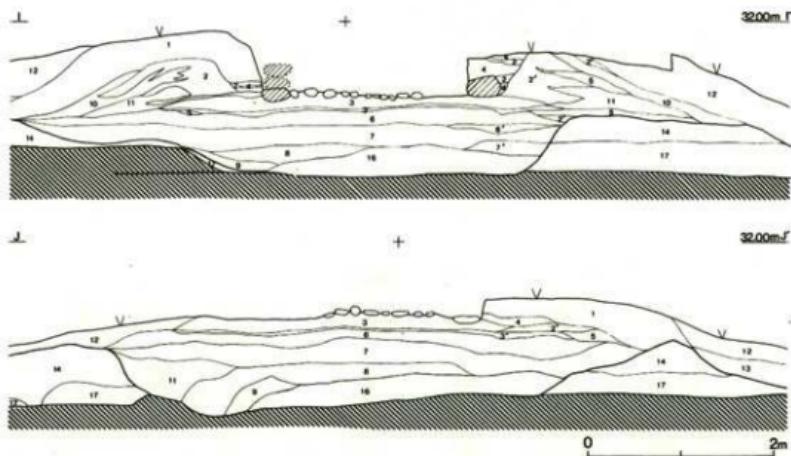
以上が石室構築に至るまでの工程を土層観察に基づいて復元したものである。版築を更に掘り込んで二次掘形部を作るところに大きな特徴がある。

周掘は断続部をもちらがらほぼ円形にめぐる。幅・深さともに一定しないが、特に深い部分は粘土層まで掘り込んでいる。



第37図 桜山10号墳全体図(2)および断面図(1)

出土遺物は埴丘土・後ごめ土・周堀覆土中から土師器片・埴輪片・須恵器片が出土しているが、これらは南側斜面で検出された埴輪および須恵器窯跡とそれに伴う住居跡に由来するものである。10号墳に伴う遺物は東側周堀北側の大ピット下層で出土した提瓶と南側周堀内出土の平瓶がある。(第39図1・2)、また北側周堀内では耳環1対が出土している。K-1・2ともに全面に緑青がふき淡青緑色である。二次移動したものと思われる。



第38図 桜山10号墳断面図(2)(土層名は第37図に同じ)

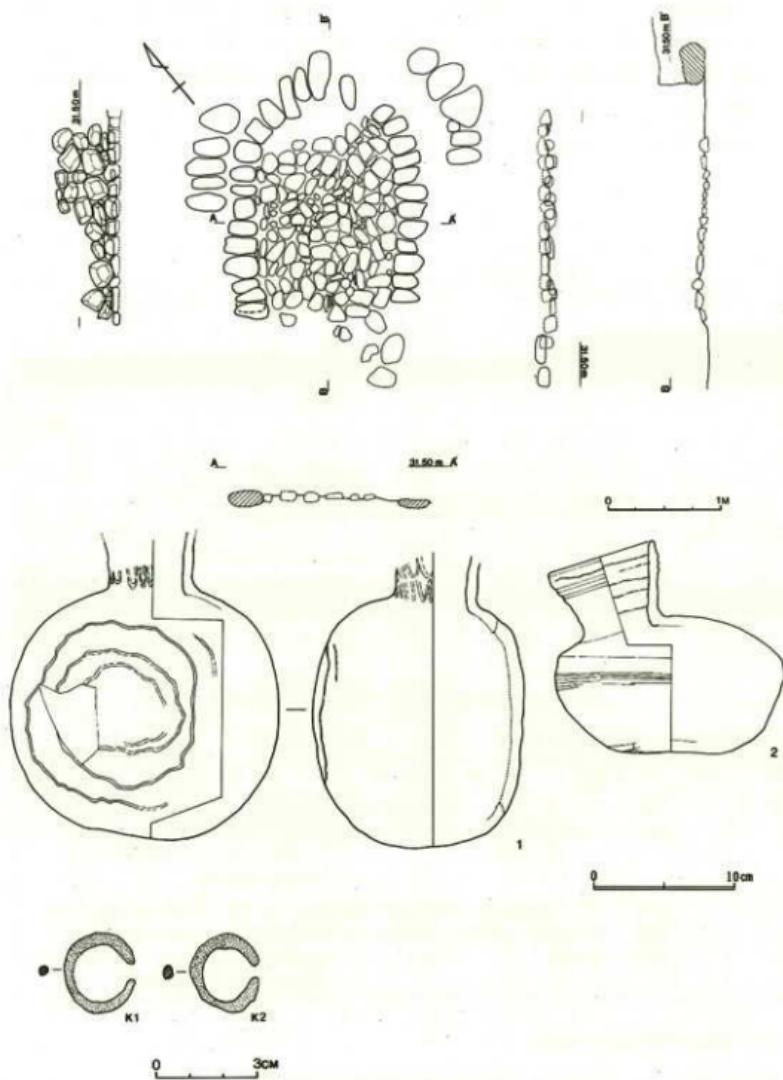
桜山10号墳出土土器(第39図)観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
提瓶	1	胴径 胴厚	厚手、頸部・胴部の柳描文は浅く 不明瞭、ラッセン状柳描文の外側は ナデ消される	胴部全面にナデ調整(ロクロ使用 せず)で平滑、回転ヘラ削り痕は ナデ消される、ロクロは時計回り 焼成、淡暗灰色	口縁のみ 欠
平瓶	2	口径 胴径 器高	赤褐色焼成、厚手、頸部に接合痕 明瞭、形態整う、底面指おさえ平 底	粗いカキ目はナデ消され不明瞭、 底部周辺は手持ヘラ削り調整、天 井部と頸部ロクロナデ、ロクロは 時計回り、やや軟質、赤褐色	完形

## (11) 桜山11号墳(第40~42図)

墳丘は11m×11m、高さ約1m、標高29.5mの丘陵縁辺に位置する。

石室は河原石乱石積み横穴式石室で、部分的に根石が残るのみである。玄室全長2.45m、同幅は礎床範囲から1.4m(推定)、羨道幅0.89mを計る。玄室プランは奥壁がやや内湾気味で、わずかに胴の張る形態である。側壁は根石のみ残る。玄室入口には凝灰岩質砂岩の截石(65cm×21cm、厚さ

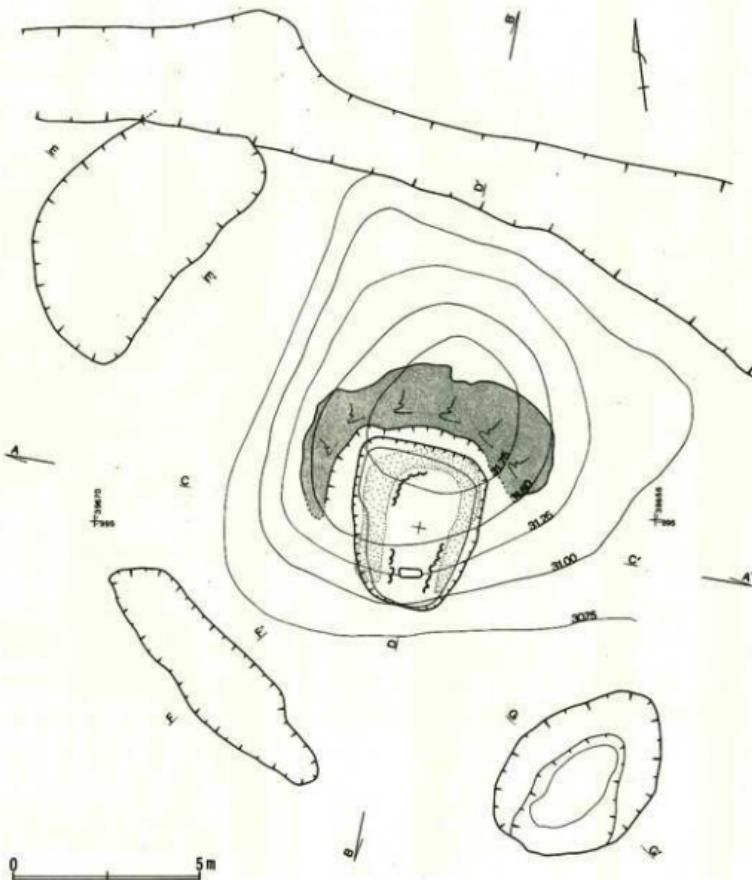


第39図 横山10号墳石室および出土遺物

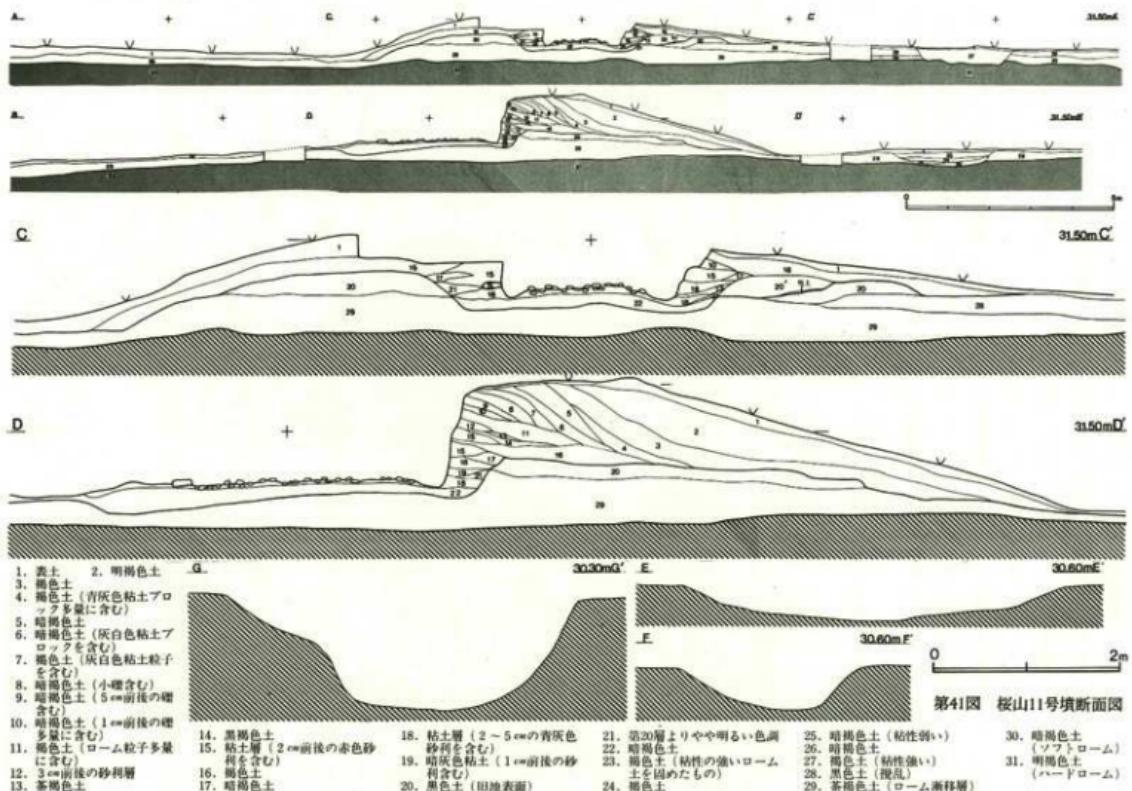
9cm) の樋石が置かれている。樋石の両側は側壁に間隙があり、また床面下約20cmの位置に上面が平坦になるように自然礫を埋め込んでいるので、ここに門柱石が立っていたことが知られる。付近では緑泥片岩の長方形板状石が數片発見されているがこれらを使用していたものと思われる。

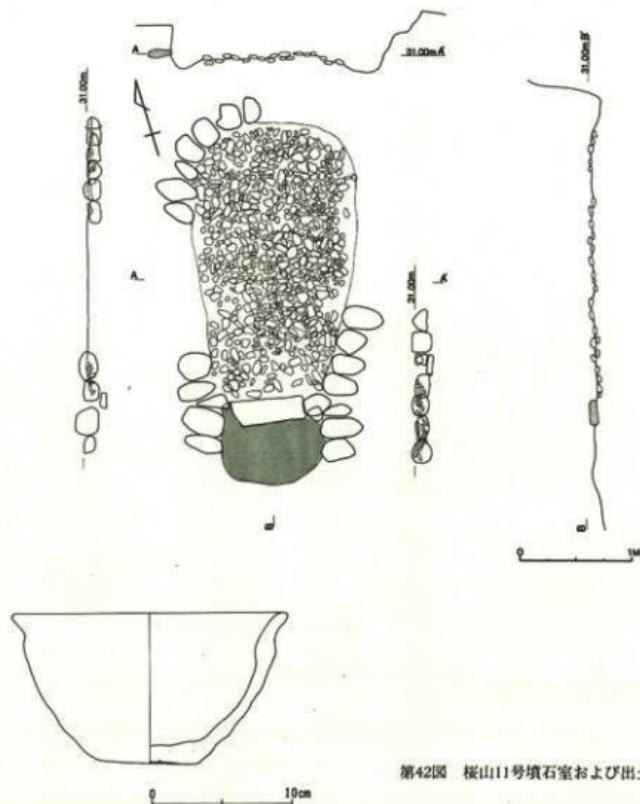
漢道部入口は破壊されていた。粘土が床面に散乱していたが、二次堆積と思われる。

後ごめは、かなり多量の砂利を含んだ粘土を主体にたたきしめている。これらは下位から上位に向かって青灰色粘土に混入したもの、赤茶褐色粘土に混入したもの、暗褐色土に混入したものに大別されて積み上げられる。砂利粒の大小のバラつきがあり、砂利混じりの粘土層から採取したものと思われる。因に砂利混り粘土層は付近の地層中にみられるもので、ローム層下の粘土層のやや下



第40図 桜山11号墳全体図





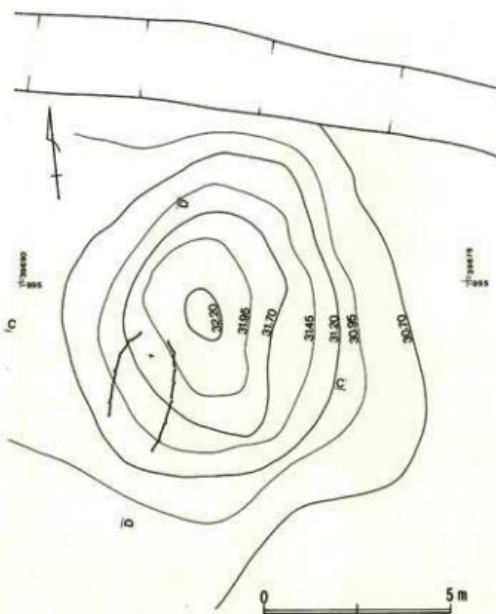
第42図 桜山11号墳石室および出土遺物

位に認められる。

掘形は黒色腐植土（旧地表）を約30cm程度掘り下げる。旧地表面は石室床面とほぼ同レベルである。平面プランは不整台形で4.4m×3.5m、底面は外側がやや深い。褐色土を主体にやや固めているが、石室直下は砂利混じり粘土層で強くかためている。

周堀は3ヶ所に分離している。西側の2ヶ所は浅いが、東南側は非常に深く、石室床から-2mあり、粘土層まで掘りぬいている。

出土遺物は北側周堀から土師器鉢形土器が出土している（第42図）。完形であるがかなり磨滅している。伴出遺物はその他に埴輪片、土器坏片、弥生土器片などの細片があり、これらは墳丘盛土中にも認められ、10号墳でみられたように、住居跡、窯跡を破壊して古墳がつくられた結果による。鉢形土器もそれらと同類と思われ、古墳の時期と直接関係の無いものであろう。鉢形土器は口径14.5cm、器高10.7cm、底径7.5cm、かなり厚手で磨滅著しい。明赤褐色、胎土粗、やや軟質でザラつく。



第43図 桜山12号墳全体図(1)

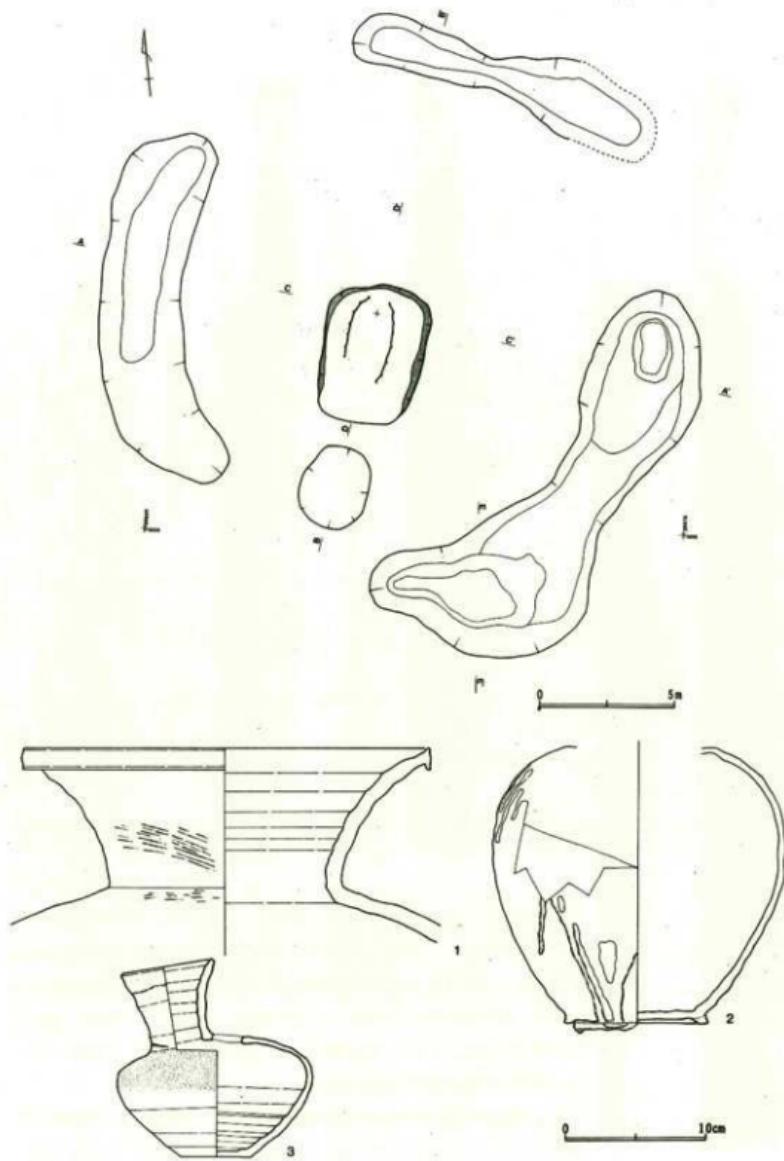
(12) 桜山12号墳 (第43~46図)

墳丘は $10m \times 11m$ 、高さ $1.2m$ 、標高 $30m$ の丘陵縁辺に立地する。南群中最西端に位置する。石室は凝灰岩質砂岩の載石を用いた。胴張型プランで、切組積みである。玄室幅は中央最大幅 $1.56m$ 、奥壁は抜き取られているが幅 $0.67m$ である。奥壁はその痕跡から側壁と同じ石材と思われる。側壁は3ヶ所で切組み用の切り欠きがある。奥壁と接する面も切り欠いて密着させる工夫がある。床面下に $10cm$ 埋まる。断面図にみられる右側壁は土圧による内傾であるが、左側壁部が当初の傾斜を示す。床は $20cm$ 大の礫を敷き、その間に $10cm$ 大の小礫をつめて上面をそろえている。

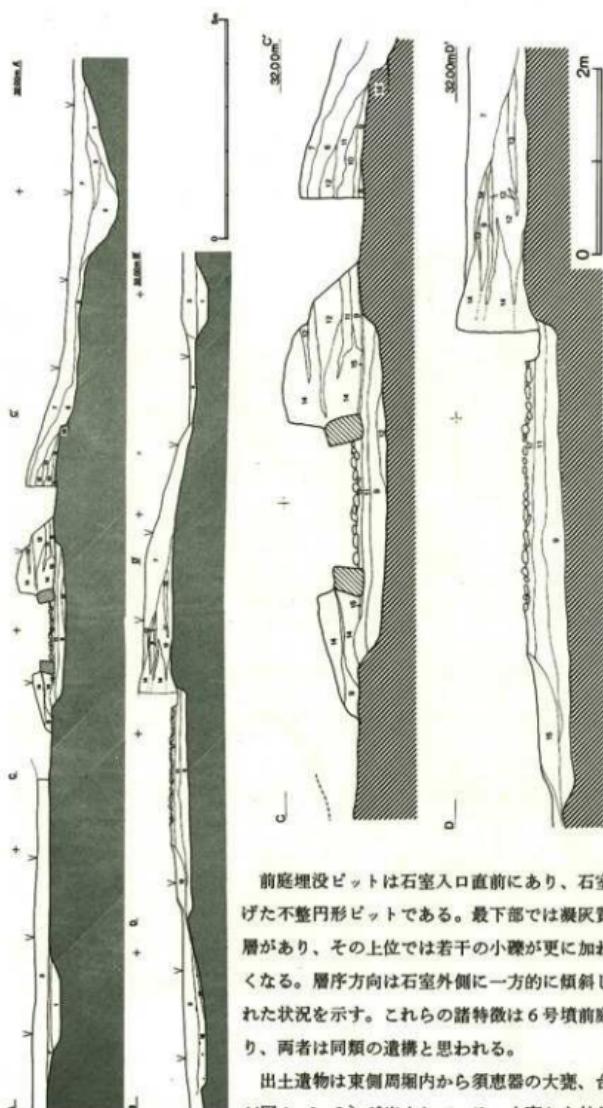
後ごめは粘土を主体とする。石室背後に $1.5m$ 程度をおおっている。中央横断面の観察によると第1段の基底面に凝灰岩質砂岩の屑混入の層がありまた後ごめ粘土の間層として同様の層があるので石材を加工調整しながら後ごめ作業をしていることが知られる。また1個の側壁石に対して数回の工程で粘土を積み上げていることも知られた。

掘形は $5.2m \times 3.8m$ の不整長方形プランで旧地表面（黒色腐植土）を $20\sim25cm$ 掘り下げている。（黒）褐色土をたたきしめて石室の基礎としている。

周堀は石室の周囲をめぐるが断続部があり、3ヶ所に分断される。東側周堀は他の2ヶ所とは異なり極端に深い部分がある。石室床面から $1.4\sim1.7m$ の深さで、粗く掘り下げ粘土層まで達している。



第44図 桜山12号墳全体図(2)および出土遺物

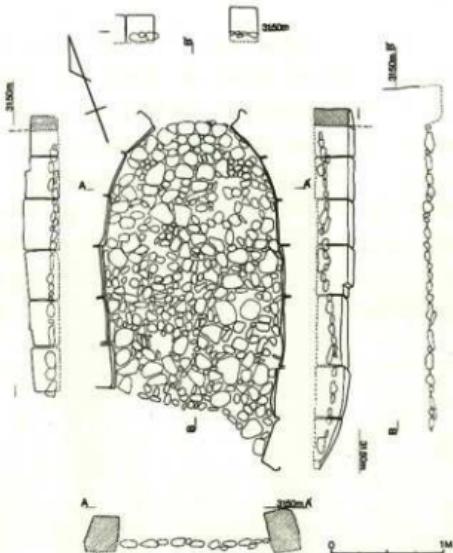


第45図 松山112号墳断面図

1. 黒褐色土（ローム含む）
2. 黒色土
3. 黑褐色土（ローム少量含む）
4. 暗褐色土
5. 茶褐色土（粒子の粗いロームを含む）
6. 茶褐色土（ロームブロック含む）
7. 茶褐色土（細かいローム粒子含む）
8. 黑褐色土（ロームブロック多量に含む）
9. 黑褐色土（ロームブロック少量含む）
10. 黑褐色土（ロームブロック含む）
11. 黑褐色土（やや軟質）
12. 黑褐色土（やや軟質）
13. 黑色土
14. 粘土
15. 黑褐色土（礫灰岩層多量に含む）
16. 黑色土（礫灰岩層と小礫含む）
17. 黑色土（軟質）
18. 黑色土（旧地表面）

前庭埋没ビットは石室入口直前にあり、石室床から-80cm程度掘り下げた不整円形ビットである。最下部では礫灰質砂岩の切屑を多量に含む層があり、その上位では若干の小礫が更に加わる。上層には混入物がなくなる。層序方向は石室外側に一方的に傾斜しており、人為的に埋められた状況を示す。これらの諸特徴は6号墳前庭埋没ビットと類似しており、両者は同類の遺構と思われる。

出土遺物は東側周縁内から須恵器の大甕、台付長頸瓶および平瓶瓶（第44図1・2・3）が出土している。大甕と台付長頸瓶は覆土の上層で検出されている。



第46図 桜山12号墳石室

桜山12号墳出土土器（第44図）観察表

器種	番号	大きさ (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 (29.0)	形態よく整う、口縁突帯やや鋸い つくり、口縁内外に黒緑褐色の自 然釉、胸部外面全体	口縁内外ロクロナデ（粗いタタキ 目わずかに残す）、粘土紐おうと つ残る。胴内面指おさえ後ナデ	焼成良、 胎土細、 暗灰色
長頸瓶	2	胴径 底径	20.8 10.3	胴部薄手、形態よく整う、高台は 胴下半の回転ヘラ削り痕はロクロ ナデで消される。高台に焼き台付 着底面丁寧なナデ	焼成良、 胎土細、 暗灰色
平瓶	3	口径 胴径 器高	6.6 13.9 14.0	口縁外反、薄手で形態整う、口縁に 粘土接合痕、一部にヘラ切り込み 痕、口縁内外と天井部ゴマ自然釉 体ヘラ削り擦痕目立つ	焼成良、 胎土や 明灰色

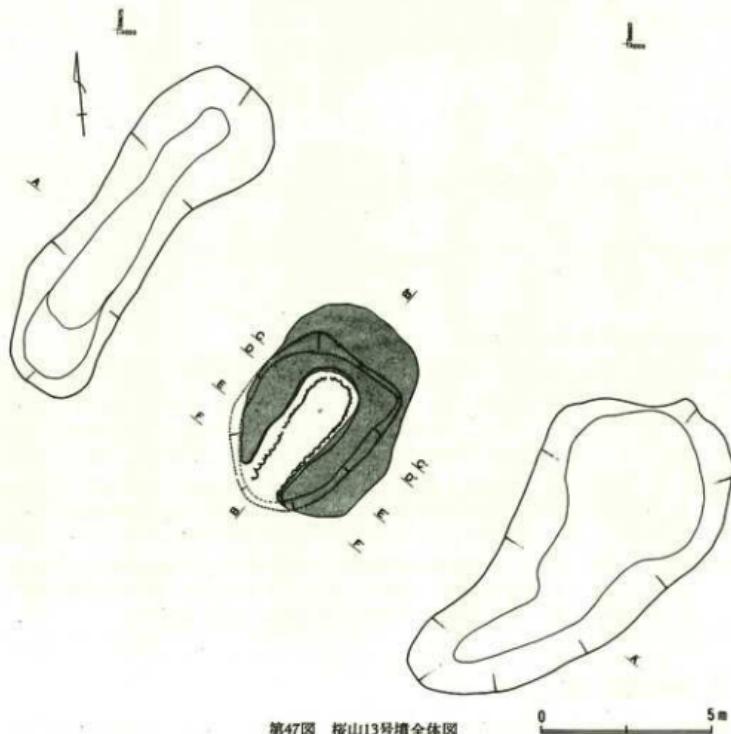
(13) 桜山13号墳（第47～49図）

南群中最南端に位置し、丘陵斜面に最も近い部分に立地する。10・11・12号墳が丘陵縁辺部に尾

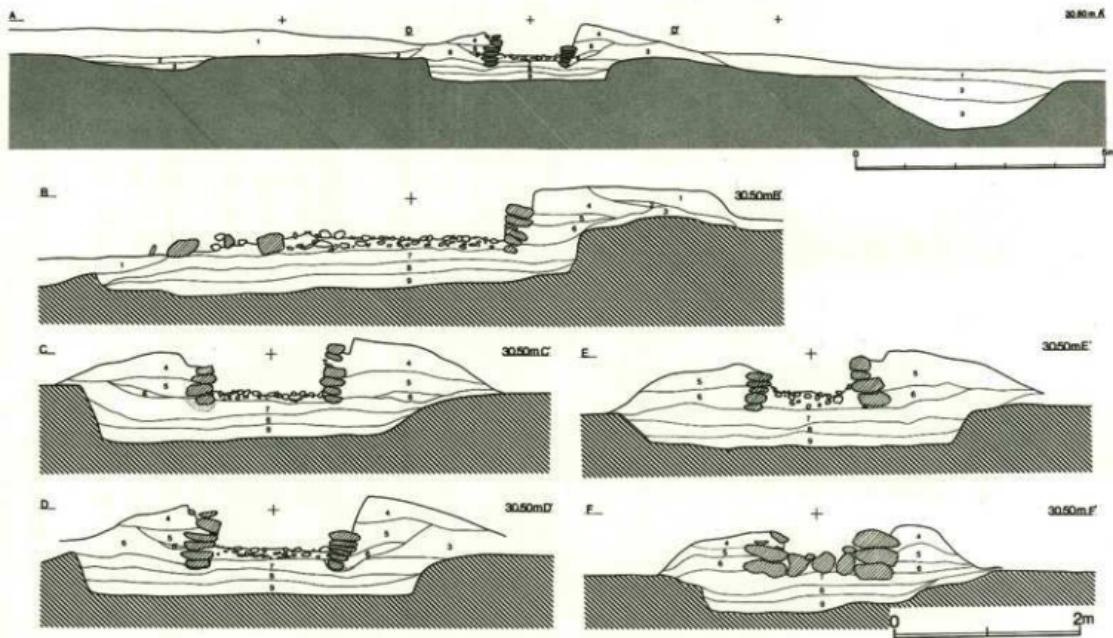
根状にのびる微高地に連なるように占地しているのに対し、13号墳はそれから離れた斜面寄りにあり、11号墳に接する位置に占地する。石室入口付近は丘陵斜面の肩部に相当する。

墳丘はわずかに残り、当初は地形のおうとつと思われたが、ボーリング探査によって石室が確認されたものである。

石室は河原石乱石積みの横穴式石室でわずかに胴張りプランを示す。全長3.80m、玄室長2.50m（奥壁から側壁の玄門柱石抜き取り痕まで）玄室幅1.2m、羨道長1.30m、羨道幅0.81mを計る。奥壁は河原石を積み上げたもので側壁と同様である。床は礫を敷くが5～10cmの大の普通の河原石である。床面レベルは側壁根石レベルとはかなり差がある。20cm前後の差があり、その間は礫石とそれを受ける褐色土の厚さになっている。玄室と羨道の境界には玄門施設がある。床は凝灰岩質砂岩の載石（厚さ20cm、幅約20～25cm、長さ不明）を置いて樋石としている。上面が破壊され、ややすれているがほとんど原位置である。樋石の両側に礫床面下20cmのレベルで玄門柱石の礫石が置かれている。側壁根石と同一レベルで、上面を水平に保つようにおかれ、緑泥片岩屑が若干認められた。この部分は側壁にも間隙があり、板状の緑泥片岩がさし込まれていたことが知られた。

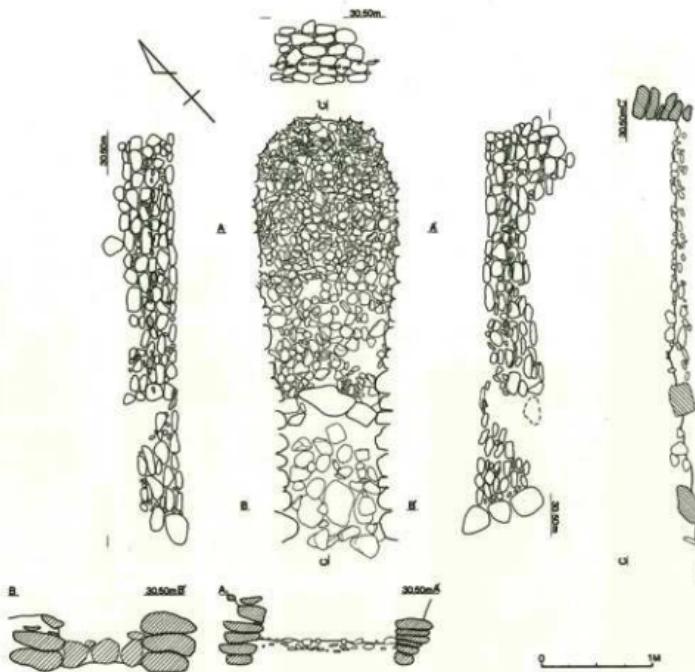


第47図 桜山13号墳全体図



第48図 桜山13号墳断面図

- 1. 暗褐色土（粘土粒子、ブロックを若干含む）
- 2. 暗褐色土（粘土粒子、ブロックを多く含む）
- 3. 褐色土（黒色土、粘土が混り、粘性有り）
- 4. 粘土
- 5. 粘土（褐色土が混る）
- 6. 粘土（褐色土を若干含む）砂利（D-D' 6層下）
- 7. 粘土（黄色味が強い）
- 8. 粘土（黒色土、褐色土含む）
- 9. 褐色土（粘土が混りやわらかい）



第49図 桜山13号墳石室

羨道入口は両側に厚さ20~30cm、長さ40~50cmのかなり大形の礫を積み上げ羨門部を形成する。入口付近には封鎖礫と思われるやや大形礫が散乱していた。

後ごめは石室背後に1.2~1.3m程度に粘土でささえる。側壁礫背後に直接粘土を積み上げ、20~30cmの厚さで層序区分はやや厚い。強くたたきしめられていた。細かい層序ラインは検出されなかったが、たたきしめの様子は数回の工程で一層を形成していることが知られる。

掘形は5.4m×3.8m、旧地表面下約60cmを掘り下げて内部に褐色土・粘土をつめている。特に石室に近い二つの層がやや固くたたきしめられていた。

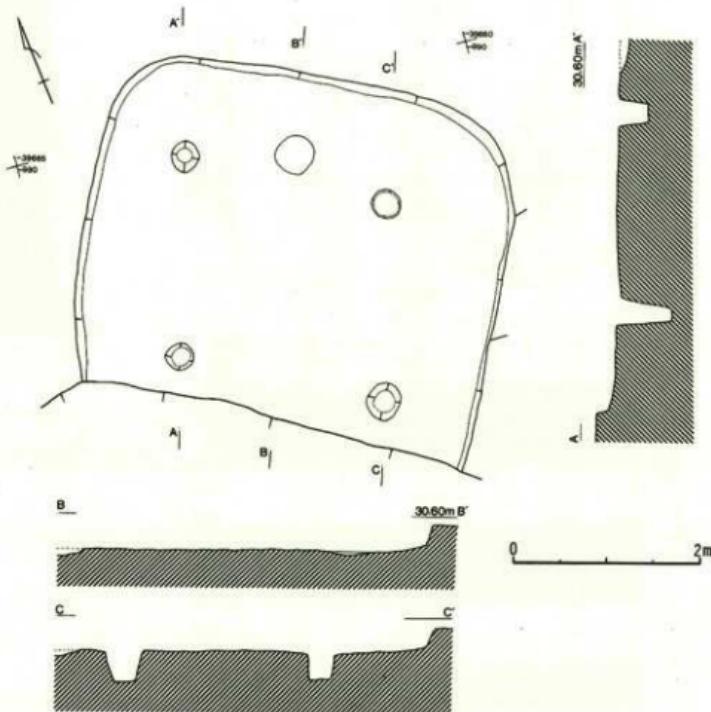
周堀は石室の側壁側の延長部分に2ヶ所ある。石室を囲むようにわずかに円弧を描く。西側は石室床面より30cm低いが、東側は特に深く、1.5mもあり、粘土層まで大きく掘り込む。この部分は掘り方がやや雑で、西側とは大きく異なるが石室をはさんで対応する位置にあり、13号墳の周堀としてよいであろう。

出土遺物については13号墳と直接関係あるものはなかったが、盛土中に埴輪片や土師器片がある。これらは10~12号墳中に認められたものと同じで埴輪窯跡やそれに伴う住居跡を破壊して古墳が作られていることによる。

## 2. 住居跡（弥生時代）とその遺物

### (1) 桜山Y 1号住居跡（第50図）

1辺4.5mの隅丸方形住居跡、東側から11号埴周堀が中央を掘り込んでいるが、床面レベルは検出できた。炉は北壁にかなり近い部分にあり、床面をわずかに掘りくぼめ、焼土が散布する。強く焼けた痕跡はない。柱穴は4本検出され、床面から30cm掘り下げる。北側の1本は特に深く90cmを計る。床面は全体的にやわらかであった。遺物は土器片が若干あるが、住居跡を切断する11号埴周堀中や埴丘盛土中に弥生後期（吉ヶ谷式）の土器片があるので、同時期の住居跡であろう。

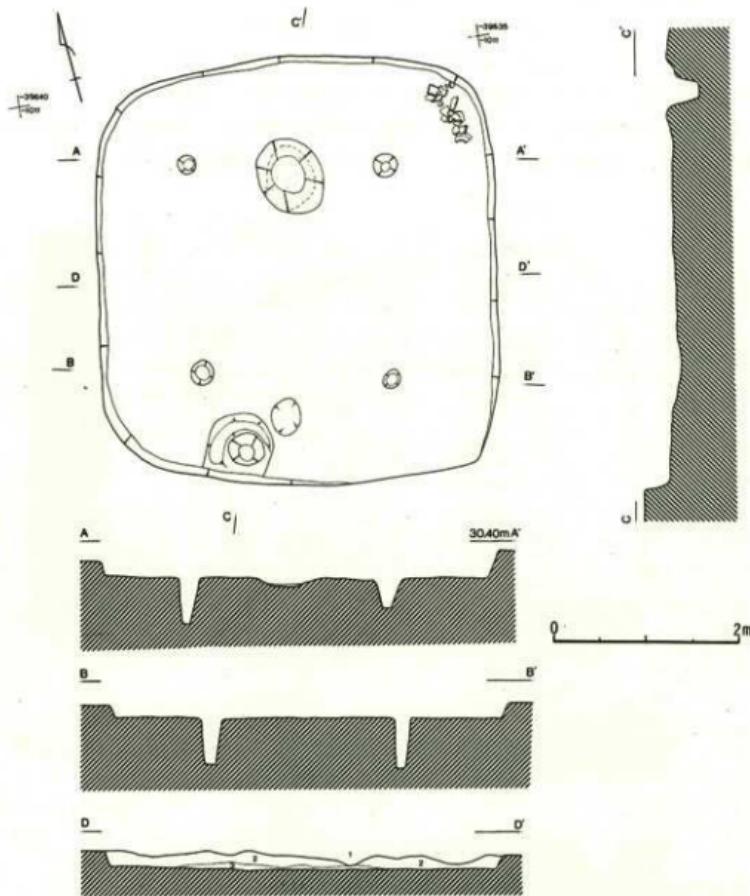


第50図 桜山Y 1号住居跡全体図

### (2) 桜山Y 2号住居跡（第51・52図）

4.7m × 4.3mの隅丸方形、桜山10号埴直下にあった。構造がよく整った典型的な住居跡である。炉は床面を10cm掘りくぼめ、内部には軟質焼土が堆積する。柱穴は35～55cmの深さであった。南壁際の貯蔵穴は幅20cm、高さ5cm程度の凸帯がめぐる。隣接する位置に、わずかに掘りくぼめた小ビ

ットがある。床面は中央がやや固結していた。覆土中に多量の焼土、木炭粒が検出され、床面直上まで散布していた。北東壁際の床面に大形壺上半部が一括出土した。その他に台付壺、櫃、高环、ラッキョウ形土製品が出土しているが、いずれも床面に近い層から出土したものである。

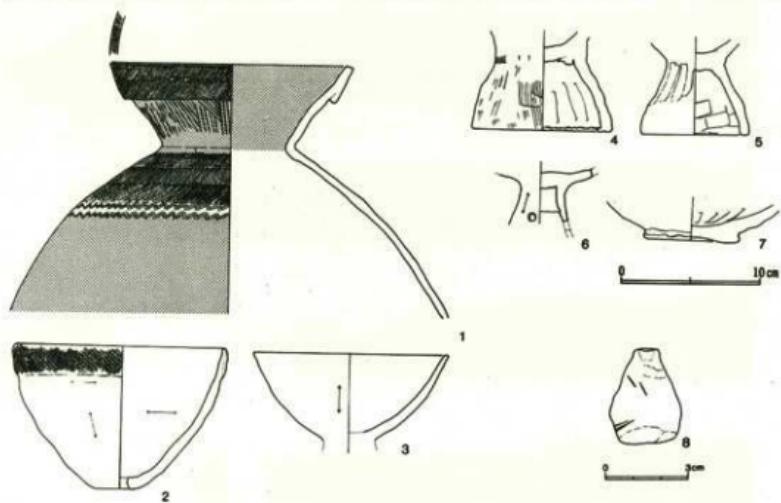


第51図 桜山Y-2号住居跡全体図

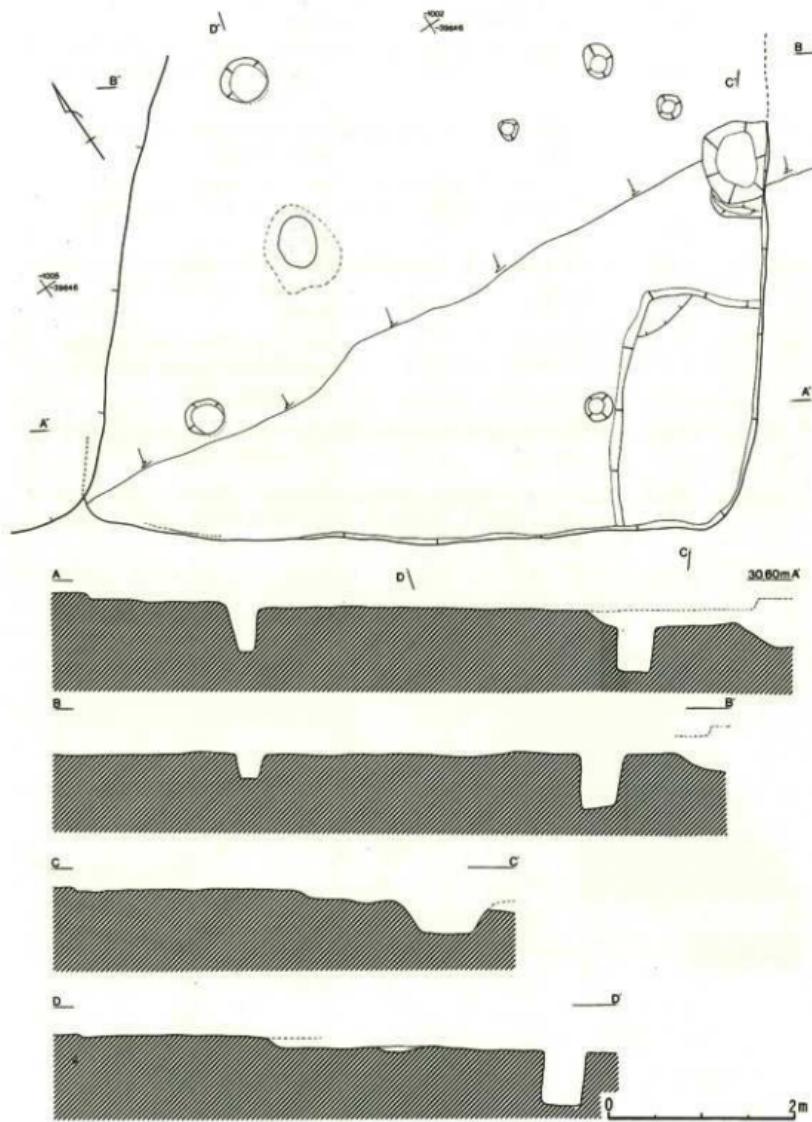
桜山Y-2号住居跡出土土器（第52図）観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 胴径 17.6 31.5	形態良く整い丁寧なつくり、文様 帶は口縁、胴上半ともに單節斜繩文と無節斜繩文のくり返し、最下 部は口縁粗いハケ目残る、内面丁寧なナデ、胎土やや細、焼成良、	口縁内外と胴外面にヘラ磨きと丹刷上半部 彩、口縁粗いハケ目残る、内面丁以上完	

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓶	2	口径 15.4 器高 10.4 底径 2.9	部に二段の結束文。 口縁貼りつけ、斜縞文帯、孔径 1.1cm、底部付近黒斑。	明黄褐色。 体部内面ヘラ磨き、光沢は弱い。 口縁直下は縱位磨き後に横位磨き。	上半のみ欠 欠、底部胎土やや細、焼成良、黄褐色。 完
高 坯	3	口径 (14.0)	塊状环部、やや深く小型、脚台基部細い。	内外ヘラ磨きで滑沢、胎土やや粗。	焼成良、暗赤褐色。
台付甕	4	底径 (10.2)	やや低い台部、形態不整、おうとつ目立つ、二次火熱を受けもろい。	粗なつくり、外面粗いハケ、内面欠	天井部は丸く突出、胎土粗、赤褐色。
台付甕	5	底径 7.9	やや内湾、小型、二次火熱を受け赤變。	外面ヘラナデ、内面横ヘラナデ、	台部完
高 坯	6	3孔。		やや粗雑なつくり、胎土や粗、赤褐色。	
壺	7	底径 (7.0)	やや上げ底で突出、底部一部黒斑。	外面丁寧なヘラ磨き、光沢をもつ。 内面天井部に粘土瘤 2 個、胎土や粗、焼成良、赤褐色。	内面ヘラナデ、底面ナデ、胎土や粗欠
土製品	8	最大径 2.6 高 3.4	ラッキョウ型土製品、底面部やや平坦、端部に孔、内底面山形、わずかにおうとつ残るが丁寧なつくり。	胎土やや細、焼成良、赤褐色。	底面一部剝落



第52図 桜山Y 2号住居跡出土遺物



第53圖 櫻山Y 3號住居跡全体図

## (3) 桜山Y 3号住居跡 (第53・54図)

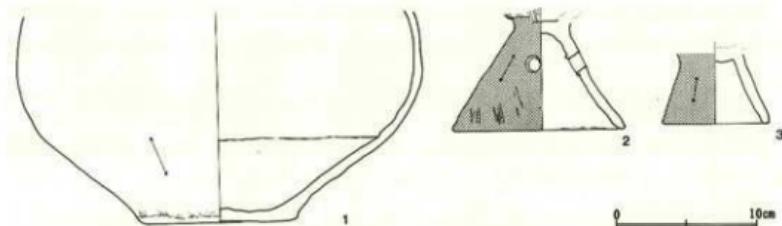
一辺7.1mの大形に属する住居跡である。丘陵の中にやや尾根状に連なる微高地の中央に位置するが、道路による削平とローム土の流失のため壁高がほとんどない。一部壁面が不明瞭なところもあった。北西側は桜山10号墳の周縁によって切断されている。今回発見された弥生時代の住居跡では最も大形である。Y 1号住居跡とは16m、Y 2号住居跡とは5.5mの直線距離がある。Y 1・Y 2号住居跡の方向とはやや異なり、炉と貯蔵穴を結ぶ軸線は北北西—南南東になっている。

柱穴は床面下50~60cmの深さであった。炉跡は上面が削平されていたがかなり広い範囲に焼土が散布しており、やや掘りくぼめた火床が確認できた。東壁際に不整形プランの貯蔵穴があり、周縁南側にローム土の固い凸帯が残っていた。北側は削平されているので全体形状は不明である。断面は逆梯形を呈する整った掘り方をしており、底面は平坦であった。

南東隅にベット状遺構がある。床面より5cm内外高くなっている。2.4m×1.5mの長方形プランであるが周縁はその境界はやや不明瞭であった。しかし明らかに固い面をもっており、その周囲の床とは明確に区別できた。住居跡の床面そのものはベット状遺構よりもやや軟質であった。

覆土中には焼土、木炭片が混入しており、特に南東側に多く認められ、床面直上にまで散布していた。

出土遺物は貯蔵穴内から大型壺の胴下半部と高壺脚部が検出された。



第54図 桜山Y 3号住居跡出土遺物

## 桜山Y 3号住居跡出土土器 (第54図) 観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 胴径 (28.7)	器肉一定、形態整う、底面わずか に上げ底、内底面中央ややふくら む。	外面丁寧な縦ヘラ磨き、滑沢で表 面磨き痕明瞭、内面ナデ、一部粗 いハケ残る、胎土やや粗、暗赤褐色	胴下半分 欠底面に モミ?痕
高壺	2	底径	12.3 大形、3孔、つくりやや難、外面 丹彩、胴内上半に一部丹彩。	外面と壺底面粗いヘラ磨き、粗い ハケ残る、孔ははみ出し粘土残 る、胎土やや細、やや軟、赤褐色	脚部完
高壺	3	底径	7.7 直線的に開き、小形、やや低い、 外面丹彩。	外面粗い縦ヘラ磨き、光沢わざか 内面丁寧なナデ、胎土細、赤褐色	脚部完

### 3. その他の遺物

#### (1) 繩文式土器（第55～57図）

本遺跡において出土した縄文式土器片は総数約300片余であるが、大半は表裏の摩滅が激しく文様のわかるものは少ない。縄文時代に比定されうる造構は今回の調査では全く検出できなかった。おそらくは古墳築造における大規模な整地等により破壊されたものと思われる。縄文式土器片は遺跡全体の広範囲に散発的に検出され、特に集中箇所は看取れなかった。古墳盛土、石室後込め土の中からもかなり出土したこととも考慮に入れるならば、あえて出土地点に捉われる必要を認めない。従って、以下順次時代順に説明する。なお、今回検出した縄文式土器片は、早期前半の沈線文系土器から、後期初頭までの時期のものであった。

##### 第1群土器（第55図1～15）

縄文時代早期前半の沈線文系土器を一括する。

###### 第1類（第55図1・2）

半截竹管の背部と腹部との境を斜めに使用し、やや太めの沈線文を施している。1・2共に口緣部破片であり、口唇部は平坦である。1は口辺に平行に4本の沈線が横走し、その下は斜方向に2本の沈線が施される。2は斜方向の平行する沈線により文様が構成されている。いずれも胎土は砂質で硬く、色調は淡黄褐色を呈する。

###### 第2類（第55図3）

半截竹管の背と腹を交互に用いて沈線文を横走させるものである。従ってやや太い二本の平行沈線と太く断面「かまぼこ」状の沈線が交互に認められる。胎土は砂質で硬く、色調は淡黄褐色である。

###### 第3類（第55図4）

平行沈線と刺突文により文様を構成するものである。平行沈線は横走、斜行し、刺突文が一段連続して横にならぶ。胎土は小砂利が多く、やや軟かい。色調は黄褐色である。

###### 第4類（第55図5）

竹管背部を用いた太い沈線の施されるものである。沈線は長短まちまちであり、部分的に曲線化している。胎土はやや軟質であり、色調は褐色である。

###### 第5類（第55図6）

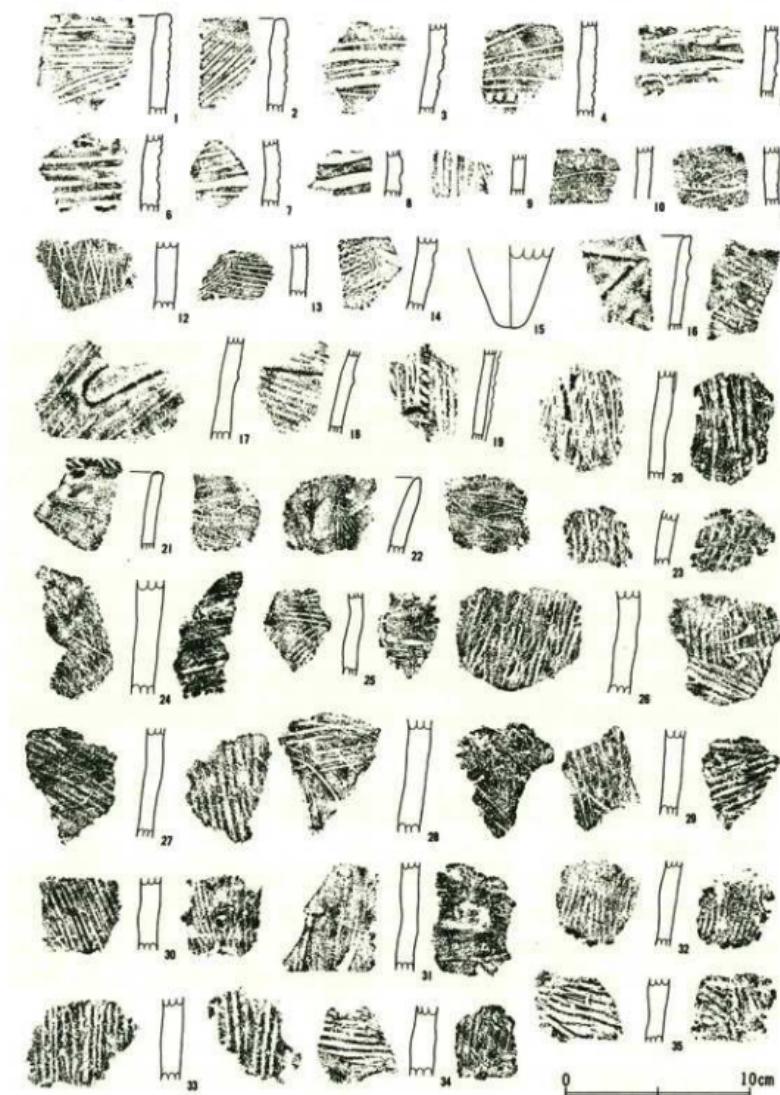
半截竹管の腹部を使用して、長沈線と短沈線とを組合せて横走させるものである。胎土はやや軟質であり、色調は褐色。

###### 第6類（第55図7～9）

竹管の背部を使用して太い沈線を平行に施したものである。7は沈線の太さに二種類認められる。8は極めて太い沈線を横走する。9は縦走するものである。いずれも胎土は硬く、良好。色調は淡黄褐色。

###### 第7類（第55図10～12）

細い沈線を主体とする文様を持つ土器である。10は横に平行に施文される。11・12は格子目状に



第55図 桜山古墳群出土の縄文式土器 (I)

施文されている。いずれも胎土は硬い。色調は10は褐色、11は淡黄褐色、12は赤褐色。

第8類（第55図13）

半截竹管の腹部を用いて細い平行沈線を密に施文したもの。胎土は硬く、色調は褐色。

第9類（第55図14）

太い沈線文と貝殻腹縁文の組合せの文様構成を取るものである。胎土は硬く、焼成は良好である。色調は表面黒色、裏面褐色。

以上その他、第55図15の本群の極めて特徴的な底部が出土している。本群は全て田戸下層式に比定される。

第2群土器（第55図16～35、第56図36～53）

早期後半から末にかけての、いわゆる条痕文系土器を一括する。

第1類（第55図16～20）

細隆起線によって文様が創出されるものである。16～18は断面三角形の細隆起線によって直線あるいは曲線的なモチーフが描かれる。いずれも胎土は砂質であり、黄褐色を呈する。纖維は少ない。19は波状口縁の深鉢で、波頂部から垂下する細隆起線には刻みが付けられる。またこの垂下する細隆起線から横走する細隆起線が延びる。また口唇部には刻みが認められ、地文は貝殻条痕の上に竹管による沈線が縱走する。纖維は多くはない、胎土は軟かい。色調は褐色。20は「みみず張れ」状の細隆起線が断続的に貼付される。地文の貝殻条痕が明瞭である。纖維は少ない。胎土は軟かく、黄褐色を呈する。

第2類（第55図21～35、第56図36～45）

貝殻条痕以外の文様の認められないものを本類とした。条痕の浅いもの、深いもの、あるいは施文の方向、条痕の幅等の要素により、さらに区分されようが、ここでは一括しておいた。時期的にもかなりの幅があるものと考えられ、数形式の条痕文系土器を含んでいる。1・2は口縁部破片であり、1の口唇部には刻みが付けられている。いずれも纖維を含んでおり、色調も黄褐色から褐色を呈している。

第3類（第56図46）

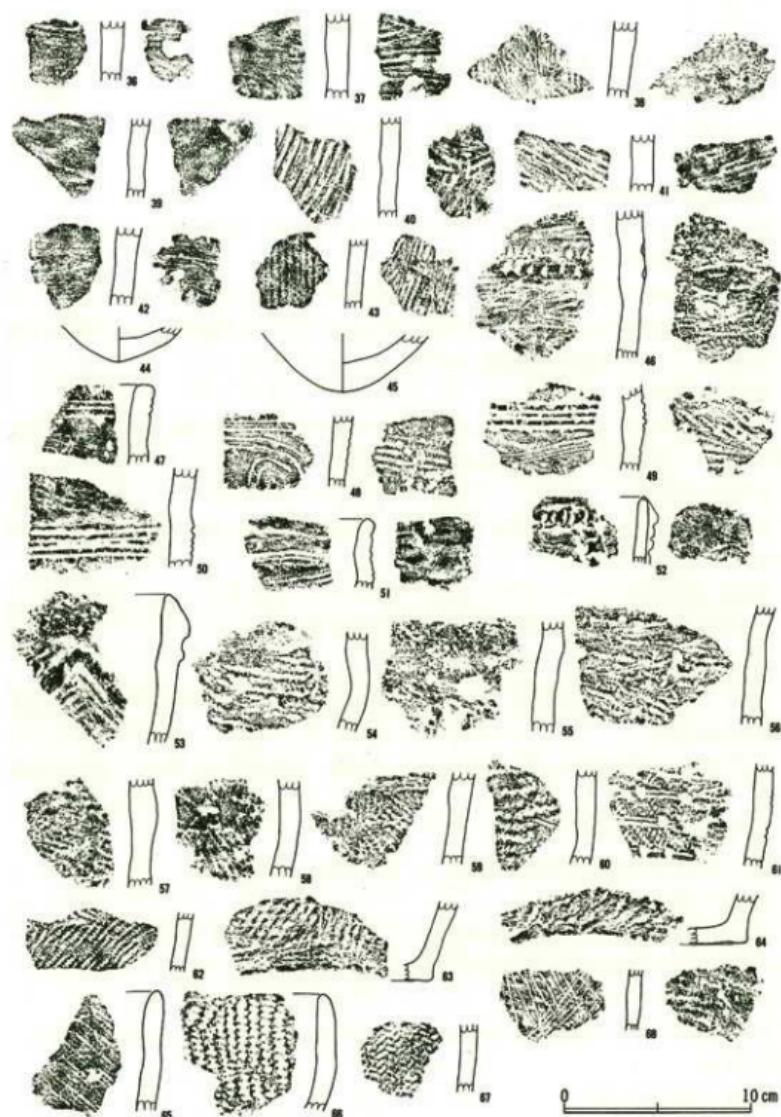
表裏に貝殻条痕文が認められ、わずかに肥厚した部分に刻み目が二段廻っている。

第4類（第56図47～51）

半截竹管を用いた沈線文のものである。47～50は同一個体と思われる。口唇は平坦であり、横走する平行沈線が認められる。また、平行沈線の他に曲線、波状の平行沈線文が加えられる。表面は条痕が磨り消されているが、裏面は明瞭に残る。胎土にはわずかに纖維が含まれており、硬い。焼成は極めて良好で、黄褐色を呈する。51も波状の平行沈線文が口縁直下を横走している。焼成良好。淡黄褐色を呈する。

第5類（第56図52）

アナダラ属の貝殻腹縁を用いて隆帯上に押捺したもの。口唇部にも腹縁による刻み目が認められ、口縁に平行に一条の隆帯が廻り、さらにその隆帯から弧状の垂下する隆帯が分岐している。胎土中には纖維の混入が多く、軟質である。淡黄褐色を呈する。



第56図 桜山古墳群出土の圓文式土器 (2)

#### 第6類（第56図53）

口辺部文様として連弧状陸帯が廻るものである。口縁部外面は「くさび」状に肥厚している。胎土中に纖維を多く含み、極めて脆い。褐色を呈する。

以上の土器の時期であるが、1類は野島式土器、4類は下吉井式土器に比定される。2類は野島式から花積下層式土器に至る、いわゆる茅山上層直後の時期のものを一括した。大半は茅山上層直後の時期に比定されよう。本群の他の各類も同様である。

#### 第3群土器（第56図54～67）

縄文時代前期前半の纖維系土器群を一括した。全て胎土中に多くの纖維を含むものである。

##### 第1類（第56図54～64）

地文に単節斜縄文を用いたものである。器面は纖維を著しく多量に含むためか凹凸が激しい。54～56は撚糸圧痕文が認められるものである。60・61は横走するように半截竹管による平行沈線が浅く施されている。全て色調は、赤褐色を呈する。

##### 第2類（第56図65）

地文として異条斜縄文を用いているものである。口辺部破片であり、口唇部は尖っている。胎土は比較的硬く、纖維も多くない。褐色を呈する。

##### 第3類（第56図66）

地文に単節LRの撚りを斜めに回転させたもの。口辺部破片であり、やや内湾する。胎土は軟質であり、黄褐色を呈する。

##### 第4類（第56図67）

地文に組紐を用いたもの、胎土は軟質であり、褐色を呈する。

##### 第5類（第56図68）

沈線により格子目状文を削出するものである。裏面は貝殻条痕が浅く施されている。色調は暗赤褐色であり、脆い。

本群の第1類は花積下層式土器に比定されよう。第3類、4類は関山式土器の新しい部分に位置する。

#### 第4群土器（第57図69～110）

縄文時代前期後半の土器である。諸磓a、b、c式土器を一括する。

##### 第1類（第57図69～78）

地文に単節斜縄文を用い、他に文様のないものである。69は平縁で外反する口縁を持つ深鉢であり、2は内湾する波状口縁の深鉢である。いずれも胎土は良好で褐色を呈する。

##### 第2類（第57図79～84）

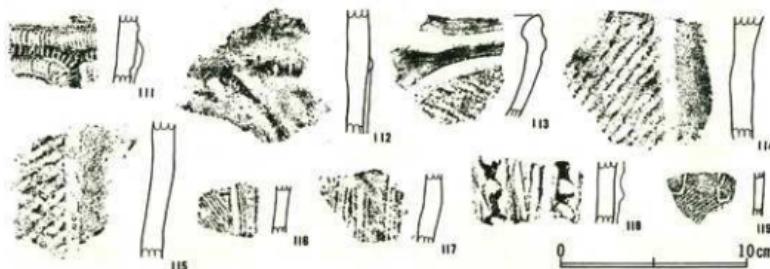
地文に縄文を有する平行沈線文の土器である。79は内湾する平縁の深鉢。いずれも胎土は硬く、褐色を呈する。

##### 第3類（第57図85～93）

いわゆる爪形文の土器である。いずれも連續幅広爪形文により、三角形あるいは半月状のモチーフを構成する。胎土は硬く、焼成は良好。赤褐色を呈する。



第57図 桜山古墳群出土の繩文式土器 (3)



第58図 桜山古墳群出土の縄文式土器 (4)

第4類 (第57図94~105)

地文は無文で平行沈線により文様を創出するものである。平行沈線を横走させることにより上下を分帯し、その間に三角形を基本とするモチーフを連続して創出させている。全て同一個体を思われる。器面の荒れが激しく、色調は不明。胎土は脆い。

第5類 (第57図106・107)

地文は無文で、細い平行沈線文が密に施されたものである。

第6類 (第57図109)

いわゆる浮線文の土器であり、波状口縁を呈する。口辺部の屈曲は、ゆるやかである。

第7類 (第57図108)

地文繩文に耳状の貼り付けのあるものである。

第8類 (第57図110)

集合沈線文の土器であり、ボタン状の貼り付けが認められる。胎土はやや柔かく、黄褐色である。

第5群土器 (第58図111~118)

縄文時代中期中葉から後半の土器を一括する。111は隆帯による椭円区画文が創出される勝板式土器である。隆帶上及び両側に幅広の連続爪形文が施される。赤褐色を呈し、胎土は硬く焼成良好。112は、断面三角形の隆帯により文様が創出されるものである。部分的にヘラ状工具による刻みが認められる。阿玉台式土器系統上の在地の土器である。113~117は加曾利EⅢ式土器である。113~116は地文繩文のキャリバー形の深鉢土器である。117は地文に条線を使用、118は地文に太い沈線を用い、垂下する隆帶上には粗雑な刺突が認められる。曾利系土器であり、加曾利EⅢ式期に比定される。

第6群土器 (第58図119)

縄文時代後期初頭の土器である。細く浅い沈線によって曲線的な文様が創出され、沈線間は縄文が磨消される。薄手の土器であり、胎土、焼成は良好。色調は淡黄褐色。

## (2) 石器 (第59図・60図)

### 先土器時代の石器

#### 石核 (第59図 1)

7号墳第1トレンチより出土した粘板岩製の石核。重量 120.8kg。いわゆる両設打面の特徴を備えているが、正面の剥離作業面では上下に、側面では左方向からの剥離痕が観察される。前者では縦長の、後者では横長の剥離痕を呈している。剥離順序は概ね後者から前者の時間差が認められる。打面調整は前者で著しく、後者では乏しい。断面形は横断面では正方形にちかく、縦断面では縦長の方形をとる。全体的に角柱状を呈する。縦長の剥離痕は長さ 6cm 前後で石核の高さに一致するものが多い。幅は 2cm 前後で剥離痕の対比による長さと幅の比は 3 対 1 となる。横長の剥離痕は長さが 3cm、幅が 6cm 前後で両者の長さと幅の比は 1 対 2 である。長さ・幅ともに石核の側面における数値と一致する。

#### 剥片 (第59図 2)

1の石核と同じく 7号墳第1トレンチから出土している。石質は粘板岩で 1 の石核と同一母岩である可能性がある。重量は 28.9kg、長さ 7.3cm、幅 2.7cm、厚さ 2.1cm で長さと幅の比は約 2.5 対 1 で石核における縦長の剥離痕にちかい。形状は正面では中央に一条の稜を持ち、頭部・中央部・末部の幅がほぼ一致する。打面は三角形に残置され調整を受けている。正面に残る稜上の剥離痕は右面から左面への時間差を示し、素材となる剥片の剥離作業に先立ついわゆる石核側面の調整剥片の形状を成す。

### 縄文時代の石器

#### 石鏃 (第59図 3~5)

3・4は土師住居跡覆土から出土した珪岩製の石鏃である。えぐりは浅いかほぼ平坦で外形からは早期末葉の土器によく伴出するものと一致する。5は34号土壙から出土した黒曜石製のもの。やや小形で両脚は左右非対称である。

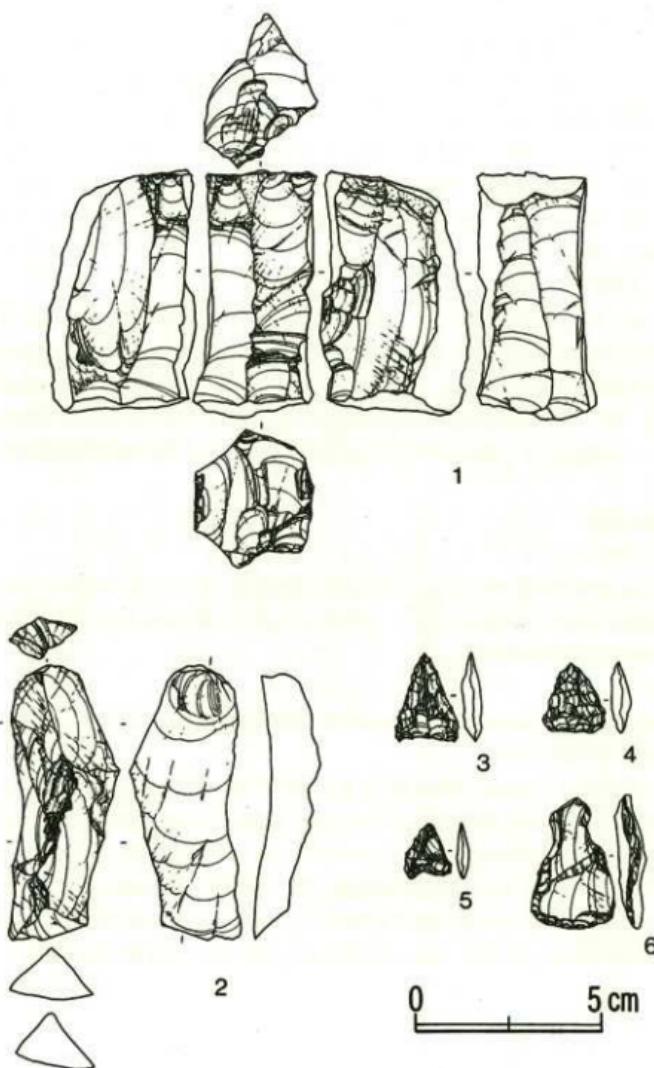
#### 石匙 (6)

土師住居跡床直より出土した石英製の縦長石匙。素材は横長の剥片と思われる。

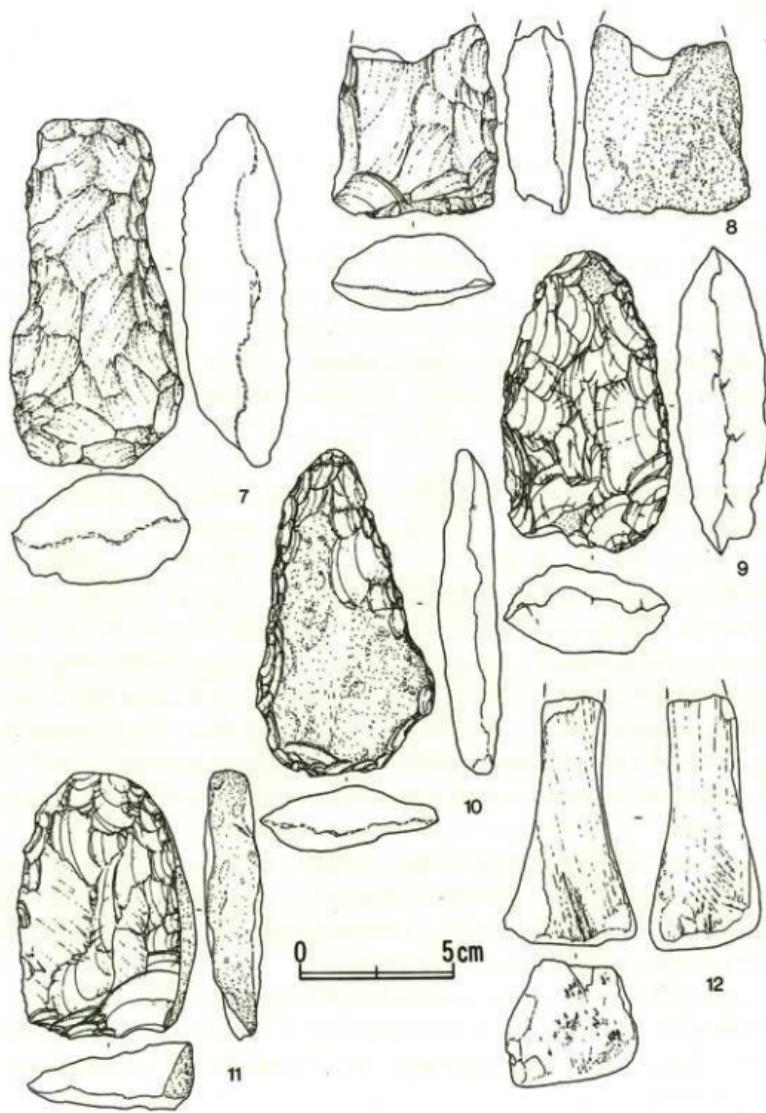
#### 打製石斧 (第60図 7~11)

7は9号墳北トレンチ出土。全体に風化が激しく石質不明。頭部は刃部よりもやや小さくなる分銅形にちかい形状。8は11号墳丘盛土より出土した。頭部を欠き刃部は裏面より片刃状に作り出され、刃縁はほぼ直線。石質は頁岩。9はFコーナーグリッド出土の粘板岩製。外形は刃部に向かって末広がりの形状をとる。10は緑泥片岩の礫核製。刃部・刃面にわずかな磨耗が認められる。11は頁岩製で刃縁はほぼ直線で片刃状。10号墳南側の表土より出土した。12は砂岩製砥石。角柱状で上部を欠く。ほぼ長軸上に線状痕が、また正面下部には切り削ったような痕跡が認められる。

(田 中 英 司)



第59図 桜山古墳群出土の石器 (I)



第60図 桜山古墳群出土の石器 (2)

## 結 語

### 桜山古墳群について

発掘調査された桜山古墳群の総数は13基である。これらは岩殿丘陵端部の平坦地にまとまっており、東方に九十九川の沖積地を臨むひとまとまりの古墳群で、周囲には他の古墳は存在しない。今回の発掘調査ではこれら全部の古墳を調査したことになり、いわば一つの古墳群全体が調査された稀有の例とすべきであろう。13基の古墳はいずれも横穴式石室を内部主体とする円墳群で、埴輪をもたず、出土遺物、古墳構造、および分布等から、いくつか併存する古墳をもちらながら、ある一定期間存続したものと思われる。したがって桜山古墳群そのものが岩殿丘陵およびその東側の高坂台地も含めて、周辺の後期後半の古墳群の一つのモデルとも考えられる。桜山古墳群の特徴は、あるいは普遍的意味をもつものもあるかもしれない。岩殿丘陵では、住宅公園の開発地区以外に閑趣自動車道関係地でいくつかの古墳が発掘されている。これらの古墳と比較しながら桜山古墳群の特徴をいくつかあげて結語にかえたい。

### 分 布

桜山古墳群の古墳分布は極めて特徴的である。古墳築造可能な平坦地を十分にもちながら、數基の古墳が一定地域に密集している。こうしたひとまとまりはA～D群の4つに分けられる。(A群—4・5号墳、B群—2・3号墳、C群—6・7・8・9号墳、D群—10・11・12・13号墳)各群中の最も近接する古墳相互の石室中央間距離は次のようにある。(A群:④—20m—⑤、B群:②—20m—③、C群:⑥—24m—⑦—22m—⑧—20m—⑨、D群:⑩—25m—⑪—13m—⑫—26m—⑬)桜山古墳群の調査結果では、周堀をもつ古墳の場合、その外周縁と石室中央部との距離は10m内外が平均的である。したがって個々の古墳の兆域的役割の範囲もその位であるとすれば、上述の古墳間隔はかなり密集度が強い。こうした密集度は一定空間地を生み出し、そこでは古墳築造できない不可侵地となる。古墳の密集性は造墓主体相互の緊密な関係のあらわれであろう。古墳存在地は一定の墓域であり、全部で5つの墓域を指摘できる。これらの墓域は単独墳で構成されるもの(1号墳墓域)、2つの古墳によるもの(A・B群)、4つの古墳によるもの(C・D群)がある。

これらの中で1号墳墓域とD群墓域は、南側に支谷を臨み、眺望に富むと同時に、谷の開口部を指向する。D群墓域は屋根状にのびる高まりの突端にある。特に東端に立地する10号墳は周堀規模では最大で、ここでは大形古墳に属する。1号墳は最高の墳丘をもち、性格的には10号墳と類似したものであり、古墳群中の主墳と称すべきものである。

1号墳の東側平坦地に多くの古墳が作られず、谷奥や丘陵平坦地の奥に古墳分布がのびていること、10号墳が最も良好な地に占地し、谷奥方向へ分布がのびていることを考えると、古墳占地と分布のパターンも想定できる。つまり谷地形の北側から、同じく谷の開口部から奥へ、丘陵縁辺から奥へという方向である。

このような分布パターンを示すとすれば、築造は北群(A・B群)では小支谷の北側斜面を上った縁辺部に1号墳が占地し、一定の墓域が設定される。東側の丘陵縁辺や平坦部に古墳分布がのび

桜山古墳群石室計測表

古墳番号	(1) 全長	玄室			羨道		(7) 主軸方位 (Nは磁北)	用石		玄門施設		II2 床面高	II3 遺物	
		(2)奥行	(3)幅	(4)前幅	(5)長	(6)幅		(8)奥壁	(9)側壁	II0門柱石	II1樋石			
1	4.13	2.61	1.67	1.03	1.52	0.77	N-19°-E	凝・載	凝・載	凝・載	凝・載	29.30	耳環2、直刀1 (細頭瓶)	
2	(3.70)	(2.60)	1.10	(0.90)	(1.10)	—	N-20°-E	綠片	河原石	○(片)	—	29.60		
3	—	2.90	1.56	0.90	—	—	N-20°-E	綠片?	凝・載	—	—	30.60	耳環1、直刀1	
4	—	—	—	—	—	—	—	河原石	—	—	—	—		
5	—	—	—	—	—	—	—	河原石	—	—	—	—		
6	—	—	1.10	—	—	—	—	河原石	—	—	—	29.57		
7	—	2.45	1.29	0.98	—	—	N-38°-E	綠片?	凝・載	(○)凝	(○)凝	29.70	直刀1	
8	(4.40)	(3.0)	—	0.84	1.40	0.75	N-22°-E	河原石?	河原石	(○)(片)	凝・載	29.00	耳環2 (平瓶・細頸瓶)	
9	—	2.62	1.02	(0.75)	—	—	N-26.5°-E	綠片	河原石	(○)(片)	—	29.60		
10	—	—	1.26	—	—	—	N-40°-E	(河原石)	河原石	—	—	31.25	(耳環2、平瓶・提瓶)	
11	—	2.45	(1.4)	0.97	—	0.88	N-17°-E	河原石?	河原石	(○)(片)	凝・載	31.00		
12	—	—	1.56	—	—	—	N-18°-E	綠片?	凝・載	—	—	31.30	(平瓶)	
13	3.80	2.50	1.20	0.86	—	1.30	0.81	N-43°-E	河原石	河原石	(○)(片)	凝・載	30.30	

(註) (1) 床面と接する奥壁面から羨道入口の先端部まで (2) (1)の起点から樋石の玄室部寄りの端部まで、樋石が無い場合は門柱石およびその痕跡部の中央まで (3) 最大幅 (4) 玄室と玄門(門柱石・樋石)との境界部の幅 (5) (2)の終点から(1)の終点まで (6) 平均的な幅部位を採用した (7) 玄室の中軸の方位 (8) 玄室奥の直面する部分 (9) 羨道壁も含む (10) 玄室入口の左右に側壁から突出し、門柱状に立つ石、しばしば礎石を伴う。○は存在を示す (11) 玄室入口部に床に置かれた仕切り石 (12) 玄室床の平均標高 (13) ( ) 内は石室以外の部分で出土したもの  
※ 凝・載は凝灰質砂岩載石、綠片は綠泥片岩の板状の石、河原石はこの場合表面が丸味をもった礎を示す、( ) は推定、片は綠泥片岩、余白は不明を示す

ないのはそのためであろう。A・B群については1号墳の墓域を避けて奥へ進むなら2号・5号墳が先に作られることになろう。南群では10号墳がまず占地する。次いで11・12号墳の順になろう。13号は分布がやや偏在し斜面にかかっているので、最後に築造されたことも考えられる。C群は6・9号墳が周堀を欠く。7・8号墳の周堀が既に掘られていたとすれば、新たに作る必要を認めず墳丘のみを築いたとも考えられよう。

### 墳丘

墳丘は後世の変形があり、現況をとどめているとは思えないが、それでもその規模が2区分されることが知られる。全体的に径10m内外の墳丘が残存部の平均的規模であるが、1号墳と10号墳は明らかに他とは隔った大きさをもつ。1号墳は径は12m内外であるが高さは1.8mあり、10号墳は径16m、高さ1.5mを残している。両者ともにそれぞれ北群と南群に分かれて存在し、また丘陵斜面直前に立地し、更に支谷を臨む端緒的位置に分布するという共通特色がある。1号墳は高さにおいて、また10号墳は周堀外径(約27m)において桜山古墳群中では特別な大きさである。したがって墳丘規模による限り、均一な群ではなく、2基のやや大型の古墳を含む古墳群である。なお1・10号墳は規模だけでなく、内部主体構造や周堀形態、更に分布や立地の特徴からそれぞれ北群、南群の古墳群の中できわ立った特徴をもっている。

### 周堀

周堀については、全周するものは全く存在しなかった。大きく区分すると周堀の無いもの(2・4・6・9号)とあるものに分かれるが、後に複雑な在り方を示す。いずれも断絶部をもつが、掘り込みが1ヶ所のもの(3・5号)、2ヶ所(1・7・8・13号)、3ヶ所(11・12号)、4ヶ所(10号)のものである。これらの中では石室入口の前方があいているものが多く9例中6例であった。掘り方は墳丘寄りの立ち上がり部を急斜にする例が多い。幅・深さともに一定せず、また全体プランがかなり歪んだ円形になったり(1・10号)、四辺形に近くなるような外周プランをもつもの(8・12号)がある。底面については特に深い部分があり、ここが幅広になる例が多い(8・10・12・13号)。また土壤状の例(11号)もある。これらは極端に深くなつて粘土層まで達する。墳丘盛土としては不適当な粘性をもつて後ごめ用として深掘りした部分と考えられる。

以上のように周堀形態はかなりルーズで、定型化したものから外れる。古墳の外観を整える要素が薄くなり、形式化が進んだ段階である。

### 内部主体

内部主体は13基とも両袖型の横穴式石室であるが大きく分けてI、模灰質砂岩の載石を使用した単室構造の石室とII河原石を使用したものがある。Iは更に玄室最大幅を奥壁寄りにもちやや胴張り型の1号墳(I-A型と仮称)と、玄室最大幅を中央にもつ胴張り型(I-B型)の3・7・12号墳がある。河原石使用のII型は、石室の残存状況が良好ではないものがあり、やや不明な部分があるが、玄室形態によればA・B・C型の3類型に区分されよう。II-A型はI-A型と類似して玄室最大幅を奥壁寄りにもつて11号墳を典型として、10号墳もその可能性がある。II-B型はかなり整った胴張りプランで玄室最大幅を中心にもち、奥壁および玄門部にむかって緩やかにカーブしてせばまる。9号墳が相当する。II-C型は玄室最大幅との偏差が小さく、奥壁寄りを除いて、

ほぼ同じような幅で直線的に玄門部へ移行するプランをもつ。2号墳を典型として13号墳の他に6・8号墳が相当する。図示すると以下のとおりである。



以上のように同一古墳群内でもタイプを異とする石室をもつことが特徴の一つである。使用石材の差にもかかわらず、近接してIとIIのタイプが混在する。先に述べたようにきわめて相互緊密性が強いと思われるA～D群内の個々の古墳でも、B群ではI-B型とII-C型、C群ではI-A型とII-B・II-C型、D群ではI-A型とII-A・II-C型というように混在している。濃灰質砂岩の截石は、河原石使用の8・11・13号墳でも枠石として使用されており、両者は全く相容れない技術系統に属する石室形態でないことも知られる。

I・II型の類似はプランにも示されている。I-A型石室はプラン的にはII-A型と類縁がありI-B型はII-B型と類似する。

桜山古墳群をのせる岩殿丘陵では既にいくつかの古墳調査例があり、田木山1・2号墳（註1）、舞台1・2号墳（註2）、根平1・2号墳（註3）、駒堀1・2号墳（註4）が内部主体が知られる例である。この中で桜山古墳群石室と同類のものは根平1号墳のみでII-C型に属する。その他は駒堀例を除けばいずれも濃灰質砂岩の截石を使用した石室である。これらは舞台1号墳のように逆梯形の羽子板形プランをもつもの、またそれと類似するが奥壁がやや彎曲する舞台2号墳および根平2号墳の系統のものがある。田木山1号墳は複室構造であるが玄室形態は桜山I-B型に類似し、田木山2号墳も複室構造であるが、玄室形態は桜山I-A型に類似する。なお駒堀1号墳は箱式石棺状石室で、2号墳は河原石使用であるが完全プランでは無い。

上記の4遺跡は桜山古墳群からいずれも1km以内に近接した距離にある。それにもかかわらず石室形態にいくつかの型がある。濃灰質砂岩の截石を使用したものは次のようなものがある。(1) 長胴張り型と称すべきもので玄室最大幅をほぼ中央にもち、玄室長が長いもの、田木山1号墳を祖形として桜山I-B型（3・7・12号墳）に統くもの。(2) 短胴張り型とすべきもので、玄室最大幅を奥壁付近にもち、田木山2号墳を祖形として桜山I-A型（1号墳）へ統くもの。(3) 羽子板型とすべきもので直線プランをもち、舞台1号墳が相当する。これには奥壁が彎曲するものもある。(4) 河原石を使用したもので桜山II-A・B・C型の古墳と根平1号墳駒堀1号墳の箱式石棺状石室に4大別される。

以上に取り上げた諸古墳はいずれも埴輪を含まず古墳時代後期後半の限定された時代でありながらこのように変化に富んだ石室形態をもつ。桜山古墳群の石室はこうした状況を如実に反映しているものと思われる。

東松山周辺の横穴式石室の編年については既に金井塙良一氏の案が示され、I～V形式に分類されている（註5）。胴張りを有する横穴式石室はIII～V形式に該当し、年代的には7世紀代をおおう

ものとしている。更に横穴式石室が1～3段階の変遷を遂げるとしてⅢ～V形式にあてはめ第3段階は規模の縮少や構造の簡略化が著しく玄室の単室化、玄室に対する羨道部の縮少をあげている(註6)。これらによれば、桜山古墳群の横穴式石室は第3段階に属することになろう。

しかし最近の発掘例の増加により、凝灰質砂岩の截石使用では桜山I-AおよびI-B型のようなやや狭長タイプの石室と、羽子板プラン石室(註1)が発見されてきた。Ⅲ→Ⅳ→V形式のものとして取り上げられている青塚古墳・若宮八幡古墳→附川1・7号墳→三千塚古墳群第4支群2および4号墳の系統とは異質のプランである。桜山I-A型およびI-B型については先に述べた様に、複室構造をもつ石室との系統が予想され、河原石使用石室のプランも凝灰質砂岩截石使用石室との類似も予想された。このように東松山市周辺の横穴式石室について、いくつかの系統が考えられる。更に桜山古墳群や根平古墳群のように、同一古墳群に属し、近接した位置にあって使用石材が全く異なっていたり、同一石材でもそのプランが違えるという異構造の石室が併存している。このような状況にあるので、現在のところ桜山古墳群の石室編年については更に検討を要する。ただし埴輪を伴わず、また凝灰質砂岩截石の横穴式石室では玄室が単室なっていることなど終末期の古墳の一形式としてよいであろう。

#### 出土土器

桜山古墳群では数個の土器類が出土している。図示したものの中で11号墳の土師器鉢(第42図)と12号墳の須恵器大甕および長頸瓶(第44図)は古墳と直接伴出しないものと思われる。前者は鬼高窓住居跡(桜山窓跡群に伴う工房跡と思われるもの……今回は未報告)に伴うものであろう。また後者は周堀中の黒色土上面からの出土で、甕・長頸瓶ともに同時出土である。他のものは古墳に直接伴うものである。なお墳丘盛土内や周堀中から埴輪片や土師器片が出土しているが、これらは窓跡群とそれに伴う住居跡を破壊したことによる。

古墳から出土した須恵器は丸底細頸瓶(フラスコ形瓶)2個(1・8号墳)、平瓶4個(8号墳2個、10号墳、12号墳)、および提瓶(10号墳)である。いずれも石室外から出土した。

丸底細頸瓶は2個ともに形態、つくりを異にしている。口縁直下に段をもつものが古く6世紀末から7世紀に出現したといわれている(註8)。1号墳のものが頸部の太さ、長さ、口縁のつくり等で8号墳よりも古い特徴をもつ。しかし頸がやや長目に変化し、二条沈線もなく、口縁直下の段がやや退化しているので、7世紀中頃にしたい。

平瓶は4個とも形態、つくり、色調等全く異なっている。8号墳の2(第31図)は天井部が丸くふくらみ腰高で暗緑色の釉がかかる。3は平面圓になり、小型で、表面ザラついた灰白色で釉はつかない。前者は東海西部の後者は東海東部の特色である(註9)。10号墳の2(第39図)は分厚な赤褐色焼成で、体部にカキ目が残る。在地産の可能性が強い。12号墳の3(第44図)は完全な平底である。以上の4個の平瓶は、扁平で肩部に稜をもつものがないので、8世紀を降ることはない。また大型のものを含まず、単口縁で、天井部のふくらみも少なく、平底タイプが多いので7世紀初頭をさかのぼらない。平底傾向は7世紀後半であるといわれている(註10)。

提瓶は10号墳で1個検出された(第39図)。分厚く、粗雑なつくりであるが、暗灰色であった。器面に櫛描(2本齒)による波状文を渦巻状につける。10号墳出土土器は赤褐色の分厚い平瓶(肩部

にカキ目残る)も出土している。赤褐色焼成、分厚な製品、粗い櫛描文という要素は近隣の根平1号窯で確認され、住居跡出土品では舞台遺跡1・5号住のように通例の施文箇所以外に施文される粗い櫛描文やカキ目多用の要素が更に加わっている(註1に同じ)。鳩山村出土の短頸壺でも櫛描を多用した須恵器が紹介されている(註11)。こうした特徴はいわば在地産須恵器の特徴であるので、10号埴瓶も近在で焼かれたものと思われる。他の例はいずれも7世紀前半代の年代が与えられる。10号埴出土提瓶の櫛描文はやや退化形態とも思われるが、年代的には下降するかもしれない。

#### 弥生時代の遺構と遺物について

桜山古墳群内で弥生時代後期住居跡が3軒発見された。いずれも隅丸方形プランで4本の主柱穴をもち、特にY2号住居跡は典型的な形態であった。つまり主柱穴、炉、貯蔵穴(凸帯付)、更に炉の南側壁際のピットが整然と配置されている。Y3号住居跡は1辺7.1mの大形住居である。この部分は尾根上にわずかの高まりが西方へ延びてゆくうちで最も高い部分である。柱穴配置にやや歪みがあるが、凸帯付の貯蔵穴や、ベット状遺構があり、炉が主柱穴にかこまれた内側に位置する。他の2軒の炉は柱穴間にあったり(Y2号住居跡)、壁寄りにとび出した位置にある(Y1号住居跡)。Y3号住居跡の構造特徴は住居占地を含めて、大形住居の特徴を示している(註12)。

出土遺物は多くはなかったが、土器群には異系統のものが混在する。出土土器は複合口縁大型壺、台付甕、瓶、高杯である。その中でY2号の甑形土器は東松山市大谷遺跡3号住居跡で出土しており吉ヶ谷式(註13)とされているものである。またY2号出土の大形壺は羽状繩文施文やS字状結節文、器形から南関東の弥生町式の系譜をひくものである。これはY2号住居跡の台付甕(第52図4・5)、有孔脚高杯(第52図6)、壺(第52図7)、Y3号住居跡の壺(第54図1)、有孔脚高杯(第54図2)も同様である。Y2号の高杯(第52図3)とY3号の直線的に広く形態の高杯(第52図3)は吉ヶ谷式と思われる。このように一内で異系統の土器が出土している。なおY1号住居跡はこれを破壊した古墳の軒の住居覆土中の土器片に吉ヶ谷式のものがあった。

吉ヶ谷式は繩文施文を主体とし、久ヶ原式併行として設定された(註14)が、駒堀遺跡の調査で弥生町式土器とも併出することが知られ(註15)、更に根平遺跡では器台形土器(有孔)、台付甕、と併出することにより五領式の段階まで併存することが知られた(註16)、東松山市周辺では弥生後期の土器群として他に櫛描文(波状文・簾状文)を主体とする岩鼻式土器として設定されているものもある(註17)。しかし岩鼻式についてはこれを吉ヶ谷式以前とする研究者や(註18・19)、いくつかの様相が存在して、弥生後期全体に繼續していた(註20)とする研究者もあり、検討の余地を残している。

桜山例のY2号住居跡の壺形土器は駒堀遺跡の同類のものよりは後出する。また根平遺跡では吉ヶ谷式土器と併出した器台形土器や壺形土器が出土していないことを積極的に評価すれば、根平住居跡例よりも先行する。弥生町式の系統がどの位の独自性をもって東松山市周辺に入りこむのかは不明であるが、大形住居としてY3号住居跡をとらえた場合、炉の位置は弥生町式(久ヶ原式も含めて)文化である。いずれにしてもこれらの問題は資料不足は否めない。個性ある弥生後期土器群が急速に五領式土器群へ収束されてゆく実態究明はまだ端緒についたばかりである。(小久保徹)

註

1. 1974 栗原文藏ほか「田木・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第5集
2. 註1に同じ
3. 1980 水村孝行・今井 宏・「根平」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第27集
4. 1974 栗原文藏・谷井 鮎・今泉泰之ほか「駒堀」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第4集
5. 1968 金井塚良一編「柏崎古墳群」東松山市文化財調査報告 第6集
6. 1975 金井塚良一「吉見百穴横穴墓の研究」校倉書房
7. 註1に同じ
8. 1976 橋崎彰一編「日本の陶磁・古代中世編」中央公論社
9. 酒井清治氏の御表示による
10. 註3に同じ
11. 1977 高橋一夫「比企郡鳩山村出土の須恵器」埼玉考古16号
12. 1978 抽稿「弥生時代の大形住居について」埼玉考古17号
13. 1900 金井塚良一「埼玉県東東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」台地研究16号
14. 註13に同じ
15. 1974 栗原文藏・谷井 鮎・今泉泰之ほか「駒堀」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第4集
16. 1980 水村孝行・今井 宏ほか「根平」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第27集
17. 1964 金井塚良一「東松山市天神裏遺跡第一次調査」埼玉考古 2号
18. 1972 栗原文藏他「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡調査報告 第1集
19. 1976 補沼幹夫「埼玉県における弥生式土器の成立とその系譜」埼玉県土器集成4 (解説)
20. 1876 中島利治「比企地方の弥生式土器」北武藏考古学資料図鑑